
銃剣少年と双銃少女

偽者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃剣少年と双銃少女

【Nコード】

N7240Y

【作者名】

偽者

【あらすじ】

時は西暦二〇一一年、四月七日。この日、高城堅二^{たかしろ けんじ}は友人との模擬戦を終え、魔法生徒育成国立高等学校・空峰学園226クラスにて、朝のHR前の時間をいつも通り爆睡して過ごしていた。が、何やら静まり返った教室の雰囲気を感じ、ふと顔を見上げると、そこにはどう見ても十歳程度の少女が。あれ？ と明らかな違和感に首を傾げる堅二の前で、彼女は口を開き――

この作品はSS検索・投稿掲示板Arcadiaにも投稿させていただきます。

第序章・二人の初動（前書き）

文章や内容に対する感想や意見など、優しくても厳しくてもいいので貰えれば幸いです。

不定期更新になると思います。

では。

第序章・二人の初動

守りたいとそう思っ
でも自分の力が信じ切れない時、
心にのしかかる重みをどうすればいいのか――

違和感に、彼は目を覚ました。

まだ目の辺りに野暮ったい感じがするが、真っ暗な闇の中で何度かまばたきをすれば視界もハッキリしてくる。

同時、寝呆けた頭にも直ぐに電気信号と血液が忙しく駆け巡り始め、複雑な思考が出来るようになった。

起きた頭でまず考えることは、

……さて、俺は今何を……。

寝ていた。

そう答えは直後に出るが、答えはまだ続く。

確かに寝ていたことには寝ていたが、

……朝のHR前に、疲れてて……。

机に両腕と上半身を押し付け、崩した腕組み状態の腕を頭部の支えに寝た。そこまで思い出した。

そして思い出した通り、自分の腕は額の下にあり、視界は腕が顔の周りを囲んで居るため光が入らず真っ暗。辛うじて机の木目が認識出来るぐらいだ。

己の状態を、今だ目が覚めてから微動だにしないまま感覚だけで確認して、

……というか身体の節々が無駄に痛いんだが……！？ あのアホ

の所為か！

今日の早朝のことが頭に浮かぶ。

一応中学時代から友人となつていて身体が無駄にデカイアホ野郎と模擬戦をしたのだが、結果があるとはいへ環境破壊上等な攻撃を数百単位で放つて来るのだからもう始末に終えない。模擬術式を使用しても痛いものは痛いし、死ぬ時は死ぬというのがあのアホは分かってないんじゃないかと思う。後、模擬戦という自覚があるのかと。

普通の人間なら万回くらい死んでるんじゃないかという猛攻に、なんとか生き延びるという意味で耐え切ったが、代償は肉体の隅から隅まで駆け抜ける打撲の痛みだ。

あの野郎今日の昼『エターナル飲料研究会』考案の『黒焦げのナニカジュース』を一気飲みさせてやると、復讐を密かに考えつつ、

……じゃなくて！ あのアホのことはどうでもいいんだよ！

思考が一足飛びで過去へとぶつ飛んだのに気がつき、慌てて思考を戻す。

問題なのは身体の痛みや早朝の出来事ではない。

問題は、

……今、何で俺は起きたか、だ。

結論し、彼は耳をひそめる。

魔法は使っていない、素の聴力だが、それでもたかだか六、七メートル四方の教室内部における音を聞くには充分だ。

耳の鼓膜に届く音は、殆ど無い。沈黙の音とも言えるシーンとした無音が耳に届くだけ。

朝のHR前、先生からの話を聞くための沈黙だと考えれば普通な

らおかしくはないが、

……このクラスの奴等が、素直に静かになる筈がねえ……！

過去から現在までの記憶が、頭の中を高速で流れて行く。

去年八月に試験があり、約半年程準備期間としてこの学園に関する規則や自分達が持つ権利を学んだり、生徒会及び委員会のメンバーを決める選挙会などがあつたが、その間にクラスメイト達との交流もあつた。

その際、彼は特に誰と話した訳ではないが、それでもこの226クラスにアホの友人含む少々頭のネジが五本程抜けてるところか宇宙人辺りに入れ替えられてないかと思うような人物が大量に居るということは、教室の後方から眺めるだけでも良く分かる。

四六時中本を読んだり、ヘッドホンで音楽を聞いたりする者が居て、かと思えばパソコンを扱いながら意味分らない言動をする奴が居たり、何やら漫画を描いてる女子も居るし、教室の中なのにサングラスをかけてたりゴーグルつけてたりスカーフ巻いてたりする者、明らかに小学生にしか見えない少女に飛びつこうとする変態男、他様々な常識的に見ておかしい者達がこのクラスの大半を占めていた。

……今ザッと挙げてみたけど、本当にこのクラスおかしいぞ！？

そんな、直球に言っただけで頭がいかれてるとしか考えられない者達が居る自分のクラスで、完全な沈黙などあり得ない。

精々黙ることはあっても、本やらヘッドホンやらパソコンやらを扱う者が絶対に居るので、何らかの物音がするのは間違いないだろう。

しかし今どれだけ耳の感覚を鋭敏にしても、物音一つ聞こえることはなかった。

……どういう、ことなんだ？

せめて先生からの話ぐらい聞こえてもいいのに、本当に何も聞こえない。たとえ耳を塞いだとしても、ここまで見事に何も聞こえないというのはそうそう無いだろう。まるで一人残らず自分の周りから人が消えたかのようなのだが、肌を感じる幾つもの気配がそれを否定する。

そして、肌で感じる物がもう一つある。
視線だ。

街中で目立つ格好や物を持っていた際に集まる視線の圧力が、此方へと向けられている。

身を圧迫するような、急かすような、身体を震わせるような視線。

……いや、違うか。

圧力を身にかけて、しかし彼は違うと思った。

感じる圧力の焦点、視線が見てるものが違う、と。確かに視線は自分の近くを見ては居るが、自分を見てはいない。

ここまで考えて、何故起きたのかということに対する結論が、ようやく出た。

……俺の近くに全員を沈黙させて注目を集める程の『何か』があって、俺はその『何か』に向けられた視線の所為で起きたってことか。

これだけの無音の圧力をかけられたら、どれだけ徹夜をした後の爆睡中でも起きる自信がある。

机にうつ伏せのまま彼は思っ

……起きるか？

そろそろ狸寝入りを止めるべきだろうか考える。

いい加減感じる視線が鬱陶しくなってきたし、眠気もう既に掻き消えてしまった。今からもう一度寝るのは肉体的にも状況的にも難しい。

本音を言うとはとなくこのままスルーしてしまいたかったが、この視線の重圧を無視して平然と出来る程、彼は心が強くはなく、馬鹿でも無かった。

だから、顔を上げる。

うつ伏せの状態から身を起こせば、視界は天辺部分から白く染まって、光に馴れた目が色を捉えてゆく。見えるのは、昨日から正式に通うこととなったベージュ色を中心に構成された教室の姿だ。付属するように、机や椅子、黒板などの物体も認識。

教室の風景が徐々にはつきりと、瞳から脳へと入り込み、

「……………は？」

驚愕した。

啞然とした、と言ってもいい。十五年間の人生でも、ベスト十入り出来るレベルの驚きだった。

彼は前方を凝視したまま口を魚のようにぽかんと開き、目を見開き、自分に出来る限りの方法で驚きの感情を見せている。

周りでは同じように、驚きに差はあれど、感情で言う衝撃の表情をしたクラスメイトや先生の視線が彼と同じ方向を見ていた。

だが彼の視界にそんなクラスメイトの姿は入らない。いや、入ってはいるのだろうが、気にするだけの余裕が彼に存在しなかった。

驚きの原因に目を捉えられ、それ以外を見たり理解したりする脳の処理能力が残っていない彼は、その驚きの原因を今一度よく見る。

どう見ても十歳程度にしか見えない少女が、其処に居た。

年齢は十歳程だろうか。全体が小柄で、百七十五センチある此方の三十センチぐらい下、百四十センチ程しか身長が無かった。

両腕は腰に当てられ、身に纏うは学校指定のブレザー型制服。ピタリサイズなのであろう藍色の上着と赤のリボン、灰色のミニスカートで構成されたそれらは、彼女の身体を外の目から完全に守っている。大きく露出しているのはミニスカートから覗く細長く白い足くらいだ。

肩の上で切り揃えられた髪は輝きながらも柔らかそうで、美しいというよりも若々しさというものを感じさせる。色は世界何処でも発生すると言われている茶色で、アジアでよく見られる黒髪には無い明るさを持っていた。

対して瞳の色は緑。これもまた髪に劣らない輝きをしていて、さながら宝石のように煌めき、星のように優しい光を持っている。ただ瞳は多少細められ、注視という形で此方を見ていた。

雪のような白い肌で大部分を構成された表情も、やはり多少顰めるように力が入っていて、桃のような水っ気を持つ薄いピンクの唇も、何かを堪えるように引き結ばれている。

そんな、冷淡な顔ではなく笑顔でさえ居れば写真集のモデルどころか子供アイドルとしてデビューしていてもおかしくはない、茶色と緑の美少女が自分の目の前、五十センチと離れてない場所に居ると、ここまで眼前に仁王立ちした少女を観察して思い、

……誰だコイツ！？

一番に湧き上がった疑問がこれだ。

美少女か少女かどうかは対した問題では無いのでこの際捨て置く

が、目が覚めたら目の前に女の子が居て此方を見つめてましたなど、一体どれだけ漫画やライトノベルで使い古された展開だよと叫びたくなる。今でもまだ安定して使われる王道の展開だとは認めるが、『魔神少女カラストロフ・インパクト』という漫画のように導入部分でヒロインがいきなり地球を破壊するくらいのインパクトが欲しいと思う。いや、現実でそんなことがあっても困るが。

…… ってダメだダメだ。現実逃避はダメだ俺。

冷静に落ち着いて状況を把握すべきだと、改めて少女の姿を眺める。

彼女の服はどう見てもこの学園の制服だ。高等学校という、十五歳以上の年齢である者達が通う学園に十歳程度の少女が居るというのは明らかにおかしい。故に慌てたし、驚愕もしたが、

…… 十歳だからって、別にこの学園じゃおかしくないか。

落ち着いて考えてみると、何ら不思議では無い。

普通の高等学校ならば直ぐに職員室か校長室に連行されて保護者を呼ばれてもおかしくはないが、この学園においては話が別だ。

しかもよくよく見ると、教室前方、黒板には白と何処から持ち出したのか分からない虹色のチョークで『転入生』と無駄に大きく書かれて居た。

その文字と、今までの知識と経験から推測出来るのは二つ。

1：『特別生』の資格を持っていて、わざわざ飛び級で入学してきた。

2：見た目はあれな少女だが、実年齢が実は十五歳。

可能性が高いのは前者だ。

国から十五歳以下で戦闘系魔法を学ぶのを認められている『特別生』の資格持ちは、学力さえ高ければ日本国内において飛び級することも許可されている。

なのでこの学園に飛び級で入って来たとしても、それはなんらおかしいことではない。比較的稀、というだけだ。

しかし、だとすれば彼女は、

……相当な天才ってことだぞ……。

普通十五歳で入学し、しかも日本に七つしか無い魔法生徒育成国立高等学校に飛び級で入学するなど、並大抵の事ではない。

しかも、転入生というならば、去年の内に行われた入学試験ではなく転入試験の方を受けたということだ。三万人中約九千人しか合格しない入学試験の、更に数十倍の難易度と言われる転入試験に、五年程の差がある者が合格するなど尋常ではない。

そう、思っていたら、

「……アンタが高城堅二たかしろ けんじでいいのよね？」

「っ、そうだけど？」

……いきなりアンタ呼びかよオイ。

ずっと思考の渦にはまっていたためか、痺れを切らしたように沈黙していた少女から声をかけられる。

なので彼、高城堅二も不躰な第一声に眉を寄せつつそうだと返答した。

己のボサボサ鳥頭となっっている黒髪を掻きつつ、自然と不機嫌になった目で彼女の顔を正面から直視する。

対する少女は、

「……………」

何故か黙ったまま、此方へと向ける視線を強めた。

その小さな身体から放たれる剣のような鋭い視線に、何か怒らせるようなことしたかと堅二は首を傾げる。

周りからの好奇の視線が強まる中、やがて少女は口を開いた。

小さな唇から紡ぎ出されるのは、

「福岡県魔法生徒育成国立高等学校、そらみねがくえん空峰学園一年226クラスに
在学する高城堅二」
たかしろ けんじ

「あ、ああ。それがどうし——」

「男、十五歳」

「——？」

まるで此方の言葉を聞いてないように遮られ、あれ？ と堅二は
思ふ。

茶髪の少女は今、此方を見つつ口を動かしている訳だが、何故か
その姿を見て、壮絶に嫌な予感を感じた。

ぶわっと気持ち悪い汗が吹き出し、肌の上を通過していく。

ベタベタした冷や汗という名の汗が堅二の顎へと垂れている内に、
少女は更に視線を強めて、

「今年の八月三十日に誕生日を迎え、十六歳となる。よって誕生日
は十六年前の西暦一九九五年八月三十日、乙女座。身長百七十五セ
ンチ、体重七十キロ。血液型はA型、特にアレルギーや持病などは
無し。好きな食べ物はいすい力で、嫌いな食べ物はゴーヤ。趣味は特
に無し。好きな事は頭を余り使わないスポーツ、嫌いな事は頭と手
が疲れる単純な作業。得意科目は現代国語、苦手科目は英語を始め

とする外来語。得意魔法は強化系で、苦手魔法は儀式系。特に儀式系は殆ど適性が無し。戦闘スタイルは典型的な近接魔法剣士、接近戦タイプ。尚、ある程度のレベルに達している放出系魔法を使うため、中距離戦にも接近戦の補助レベルで対応可能。戦闘ランクはB-、十五歳にしては高く、『特別生』であることを垣間見せる。それ以外の公式ランクは習得していない。性格は普通、だが最近の若者らしい不良要素あり。問題視する程では無い。家族関係は兄が一人に両親が健在だが余り良い間柄では無い。友人関係も親友二人に話すだけの知り合いレベルの友人が多数存在するなど、それなりに良い。学園まで電車で約十分という場所にあるマンションの二つに一人で住んでいる。一人暮らしな所為か――」

[illegible]

なんか、言葉の濁流を叩きつけられた。

少女の口からつらつらと上げて行かれるそれは、全て自分に関することだ。

心中で気持ち悪い悲鳴を上げる堅二は、完全に頬を引き攣らせて身体も思考も固まらせてしまう。どんな言葉が飛び出るのかと思えば、自分が履歴書に書くようなプロフィールを列挙されたのだ。引かない方がおかしい。

一方で、教室の沈黙を破った少女は、目を閉じることさえせずスラスラと続けて、

「——ある程度の調理や家事が行え、サバイバル能力も訓練により習得している。小学生での成績は国語5、算数4、理科3、社会3。中学生での成績は国語5、数学4、理科4、社会3、英語2。その他の科目に関しては体育が5で、他は全てオール4。小学生の時作文で面倒だったのか『《全略》』と書いたことがあり、担任教師を

本気で怒らせた経験がある。中学生の時に後に犯罪者とされた者五名を事故で病院送りにし、警察に拘束されたこともある。五歳の頃、瀕死の重傷を負い死にかけるも無事。それ以後、生死に関わるようなことはあっていない。ただ中学の修学旅行の際に間違えて酒を飲み、酔った勢いのまま全裸で清水の舞台からノーロープバンジーヤンプをしてしまったことも。過去、恋愛経験は無し」

……なんでそんなことを知ってる……っ！？

当事者でももう記憶が薄れかけている過去の失敗談を、どうしてこの少女が知っているのか。

周囲からの好奇の視線が堅二に強く集まり、今度は別の意味で冷や汗が噴出し始めた。今、教室内に満ちる声は、原稿を読み上げるアナウンサーのような少女の声だけで、それ以外には音というものが無い。

つまりそれは、少女の声が遮られることなく周囲に筒抜けということ、

……隣のクラスまで聞こえてねえよな……？

己のプロフィールやら恥ずかしい過去やらを上げられる堅二としては、全力で祈る他無い。というかこれ人権侵害じゃないだろうか。訴えたら勝てないだろうか。

平然と読み上げて行く少女に対し、殺意にも似た気持ちが湧き上がるが、

「好きな女のタイプは、裸エプ——」

「おおおおおおおっ！？」

「ムゴッ！？」

『好きな女』の部分で腰を浮かせ、『裸エ』の部分に至った時には絶叫を上げながら少女の口を塞いでいた。

過去最高と言っているいいスピードで突き出された堅二の右手は、茶髪少女の口を完全に塞ぎ、形ある声を発せなくする。息がし辛いのか、「ムームー！」と呻きながら手を剥がそうともがいているが、堅二には知ったことではない。

彼は周りに目をやって、大部分のクラスメイトがクエスチョンマークの？を頭上に浮かべてるのを見て、ホッと一息つき、

「あのなあお前！ 何処の誰だか知らねえけど、一体なに言ってる！？ 明日から俺のあだ名を『裸エプロン』にするつもりか！？」

盛大に自爆した。

右手を剥がそうともがく少女に怒鳴って、数秒してから、

「……あ」

再度静かになった教室の空気と、自分の発言の失敗に気がつき、堅二はもう一度辺りを見渡す。

何人かは今だに訳が分からないのか首を捻るなどのリアクションをしており、

「やあ、裸エプロン君」

「よオ、自分も全裸の裸エプロン」

「今日も元気か？ 裸エプロン」

「『クラスメイトが裸エプロン好きだった件』……よし、スレ立て完了」

「裸エプロンか……、いや、否定する気は無いんだが、やはり性的興奮を一番促すのは女性の裸自体だと——」

単語の意味が分かる者達の半分が、ニヤニヤ顔で此方を見たり挑発して来たりした。ム力つくことこの上ない。そして他半分程、主に女性陣が顔を赤らめて此方から逸らしたりしている。

先程までの沈黙が嘘かのようなざわめきと声が、教室を満たし始めていて、内容はもちろん堅二の爆弾発言についてだ。

そんな周囲の反応に堅二は慌てて、

「ま、待て！ ちょっと待てお前ら！ 俺の話を……って何そこメモとってる！？ そっちの焦げ茶髪は何録音魔法機取り出してんだオイ！？ 何に使うつもりだお前ら！」

叫ぶのだが、一向に効果が無い。一応当事者なのに、誰も此方を見ていなかった。

……水を得た魚っていうのはこういう事を言うのか畜生！

誰か話を聞いてくれないかと堅二の視線がさまよい、行き着く先は教壇。

其処には一人の女性、226クラスの担任である先生が居て、

「せ、先生、エッチなのはダメだと思います！ そ、そういうのはもつと大人になってから……はうっ」

「先生ええええええっ!？」

顔を真っ赤に染め上げてよろめくように膝をつく担任教師（二十五歳）の姿に、堅二は叫ぶ。使えねえと。

今ほど先生がもつとしっかりした人であって欲しいと思った事はなかった。

そうこうしている内に、辺りのざわめきはドンドン大きくなって

いつて――、

「待てよ、テメエ等」

野太い声が一つ、ざわめきを切り裂いて木霊した。

ふとざわめきが消え、皆の興味と目は声の主へと向かう。

声を放ったのは、堅二ではない。

教室左斜め前方の席に座る、身長百九十センチはありそうな、大柄な少年。青白い髪と、赤い瞳が特徴的だった。

彼は椅子から鈍い音を上げて立ち上がり、

「ちょっと堅二のことで勘違いしてるみたいだから言っとくが、コイツは裸エプロンなんざ好きじゃねえぜ」

「か、神原……！」
かみはら

神原と呼んだ少年の言葉に、堅二は思わず腕や足に力を入れる。

今朝の模擬戦ではっちゃけやがったアホの友人だったが、まさかこんな所でフォローしてくれるとは思わなかった。やはり持つべきは友達だ。

何やら右手の先からくぐもった悲鳴が上がったが堅二は無視しつつ、願うように皆の注目を集める神原を見る。

……頼むぞ神原！

そんな堅二の内心を知るように、神原はうんうんと頷く。分かっている、分かっているぞと言わんばかりに。

そして彼の口が大きく開けられ、

「堅二はなあ、――裸白衣好きだ」

今ほど殺意だけで人が殺せたらと願った事はなかった。

心臓の弱い人ならそれだけでショック死してしまいそうな、殺意を大量に込めた魔力を発するのだが、神原は俺の役目は終わったとばかりに清々しい笑顔で席に座り直すだけだ。

教室のざわめきは一層強くなり、

「裸白衣、だと……！？　なるほど、そういうのもあるのね……！」

「さっきから裸エプロンだの裸白衣だのなんだ？　なんか美味いもののか？」

「はっはっはっ！　自分は断然、水着派だけどね！」

「ああ……、あの人は常識人だと思ってたのに……」

「金だ！　これは金になる！　ククク、ビジネスの準備だ……！」

「堅二つて、何時の間にそんな性癖に……、私一応幼馴染なのに、全然知らなかった……」

「裸白衣かあ……、ゴーグル属性とかも世の中にあったりするのかなあ？　そこら辺どう！？」

「変態が急増されて、いや、オープンじゃないから変態じゃないのかな？　なんだか定義がよく分からなく……」

……　なんか色々ツツコミてええええええええええええっ！！

一人一人の言葉に色々叫びたくはあるものの、そうするだけの時間も余裕も無いし、テンションが現在進行形上限無しで上がりまくっているクラスメイト達には言っても通じるかどうか。

段々と収拾が付き添うに無いほど騒ぎ出した教室内の魔境を見やり、怒りを通り越してもはや呆れの領域に達しかけている堅二は、どうしようかと考えて、

「ぷはあっ！」

「んっ？」

騒ぎの原因たる少女の口を塞いでいた右手の拘束が、力づくで解かれた。

彼女自身が小顔なのと堅二自身の手の平が大きかった所為か、口どころか鼻まで塞いでいたらしい。よって少女は窒息寸前だったらしく、拘束を解かれた今何度も繰り返して深呼吸をしていた。

肩を上げ下げし、ゼーハゼーハと熱の籠った息を吐き出す姿は、まるで全力疾走した後のようで、

「ようガキ。早速だがこの状況をどうするつもりだ？ どう責任とるんだ、ああ？」

「……っ！……っ！」

怒気を秘めた堅二の問いに、少女は直ぐに答えない。

いや、何か言おうとはしているようだが、

……呼吸を整えきれてないか。

待て、とばかりに手の平を向けて突き出された彼女の手を見て、堅二は素直に待つてやることにした。どうせ急いだ所でクラスメイト達のテンションが下がる訳でもない。上がるかもしれないがそれはもう知らない。

机を挟んで反対側に立つ少女を、彼女よりも高い位置にある目で、見下ろした。

「……すー、はー……、すー、はー……」

茶髪の少女は俯き、片手を膝につけ前屈みとなり、足りない酸素を取り入れるため深く呼吸している。
やがて。

暫く、数秒程すると少女の呼吸音も普通になって行つて、肩の動きも収まつて行き。

呼吸音が耳で聞き取れない程小さく、静かになつた直後、

「――殺す気なのこのバカ!!」

「言わせてもらうがお前は俺を社会的に殺す気か!？」

全力で言い返すと、上体を跳ね上がらせた少女に涙目で睨まれた。よっぽど苦しかったらしく、茶色の髪は髪形など知らないとはかりにぐちゃぐちゃになっていて、顔全体がリングゴのように赤い。興奮していて、まるで泣くのを堪える子供のようだ。

重度の犯罪者ロリコンなら速攻で「ハアハア……、ねえ、ちよつとおじちゃんと面白い遊びしない……?」などと言つて連れ去ろうとしたり、そうで無い人であつても保護欲を刺激される姿だが、生憎と社会的死を迎えかけた、もしくは迎えようとしている堅二はそんな感想を抱かない。

緑の瞳を涙ぐませ睨む少女へと指を突きつけ、

「プロフィールはまだいい、過去の失敗談とかもな。だけど性癖はダメだろ性癖は! 男が一番知られたくない物を、よりにもよつて『好きな女のタイプ』とか言うか普通!? それじゃまるで俺は裸エプロンしている女の子にしか興味ねえみたいじゃねえか!」

「えっ……? 違うの? 私は『あの男は裸エプロンじゃない女は女として見ていないらしい……』って聞いたんだけど」

「そんなデマ言つてた奴誰だあ!？」

きよとん、と睨むのも忘れて訪ねてくる少女の姿に、天井を見上げ叫びを迸らせる堅二。

一体何処のどいつが自分の性癖を曲解して茶髪の少女に教えたのか。

……というか俺の性癖が何時ばれた……！？

自分は確かにそういう趣味があるが、それは最重要トップシークレットとして中学時代から延々と隠し続けて来た筈。

なのに、何故だ。何故ばれている。何故……、

「……そういえば、一つ聞きたいんだけどさ」
「！」

その声に、堅二は現実へと帰還した。

とりあえずは現実に対処しなければと、少女の言葉へ促しの返答をする。

「何をだ？」

「何でこんなにこのクラスの連中騒いでの？ 何かあった？」

「原因の半分はお前による俺のプロフィール及び性癖の暴露だよ……っ！」

……残り半分はウチのクラスメイト達が異常だからだけだな！

少女の言う通り、今や教室は隣のクラスから抗議が来てもおかしくない程ギャーギャーワーワーと騒いでいる。

今までは会話や動きから生じる雑音だけだったのに何時の間にやら悲鳴や打撃音なども響く、真の魔境と化している。

「ああ！？ 何だよオマエ何様だ！？」

「貴方の方こそそのサングラスはなんですか。今日くらいは外しておけと何度も言いましたよね？」

「アダダダダダッ！？ 待て待てくれギブギブギャアアアア

「アアアッ!？」

「人のスカート見てエロい妄想する奴の言葉なんか聞くかあああああッ!」

「ふふっ、君達は本当に仲がいいな」

「……………」

「えっ? なんですか袖引つ張って……、あッ、これ開ければいいんですね? ……私すっかり雑用係だ……」

「裸白衣! なるほど、これは真境地だね!」

「言っとくけど、女が着るからいいんであッて、男が着ても意味ないからな其処の馬鹿!」

もう誰が何を言ってるのか一人一人の音が大き過ぎて把握出来ないが、とにかくお祭り騒ぎのように各々が好き勝手に行動している。朝のHR前の静かな時間は何処へやら。

蹴り飛ばされたであろう椅子が宙を舞うのを見つつ、

「なんか、もう帰りたくなってくるな……」

本心からそう呟いたが、周りに伝わることはない。

その事に堅二がため息をついていると、少女の方から、

「ていうか、裸白衣ってなによ? そもそも裸エプロンってのもよく分からないけど」

純真そのものの問いかけが直撃した。

堅二は見えない衝撃にぐらっとよろめきかけるものの、何とか踏ん張って堪える。

……知らずに言っただけだったのか……!?! さっきのプロフィール列挙といい、変な所で無知なタイプか!

質問者である少女は、そんな堅二の態度を不思議そうに見ていて、

「？　どうしたの？」

「いや、別に何でもねえ……、それより」

堅二は強引に話を変えた。

身体を起こして真っ直ぐ立ち、

「お前、誰だ？　あの黒板からして転入生っていうのは分かるが……、なんで俺のことをそんなに知ってる」

「知ってる、じゃなくて調べただけだね。まあ色々あるのよ」
「調、べた……？」

……調べられるような立場の人間か？　俺。

訝しむものの、少女は此方の質問に答えきったと感じているのか、暴走するクラスメイト達に緑の瞳を向けている。

この少女は此方のことを調べたと言い直してまで言った。それは、彼女が偶然聞いたなどではなく、自分の意思で情報を集めたということだ。一学生に過ぎない高城堅二のことを。

どれだけ調べたのかは、あのプロフィール列挙を思い出せば理解出来る。

だが、そうされるだけの理由が堅二には思い浮かばない。
いや、

……一つだけあるが。

一つだけ、堅二には心当たりがある。自分という個人のことをわざわざ調べられる『理由』。思いつくそれは、生まれた時から決ま

っていたもの。

二、三年前からは更に注目されるようになった『理由』が、彼女が自分を調べた原因だというのなら、納得出来る。

その『理由』はそれだけ大きくて、重い。

そして、堅二は自分のものではないその『理由』が、大っ嫌いだった。

だから、尋ねる。

「なあ、お前――」

「……はっ!? み、皆さんどうしてこんな体育祭みたいに盛り上がってるんですか!? 先生もしかして時の流れに置いていかれます!?!」

疑問を尋ねることは出来なかった。

少女に声をかけようとした瞬間に響くのは、何処か間の抜けた担任教師の声。

教壇の上で何故かオロオロしている彼女は、

「えーと、えーと、えーと……、あっ! 思い出しました! 裸工プ――」

「先生もつと前だ前!」

「えっ、あれ?」

うーん、と虚空を見上げて悩む先生の姿に、額を手で抑える堅二。先生のおっとり姿に影響を受けたのか、騒いでいたクラスメイト達も沈静化して、今はもう自分達の席へと座って前へと向いている。クラスメイト達の変わり身の速さに呆れる間もなく、思い悩む先生が「ああ!」と言って手を叩き、

「そうそう、転入生さんが居るんです! いやぁ先生すっかり忘

れちゃってました。堅二君、あまり先生を困らせないでくださいね！先生も怒っちゃいますよっ」

「いや、原因は俺じゃ……、あつ、もういいです、はい」

ブンブンと擬音が付きそうな先生の姿に、堅二は弁明することを止めた。

これからの学校生活に対する得体の知れない不安が巻き起こるが、気づかなかったことにして着席する。

左斜め前方から笑いの気配を持った視線が飛んで来たが、それも気づかなかったことにした。

見れば教室内はまだ微かなざわめきがあるものの、全員が席へと座る朝のHR前の風景へと戻っている。

ただ、普段と違うのは、堅二の机の前に、茶髪の少女が立っていること。

それだけだ。

……コイツ、前に戻らなくていいのか？　というか、俺が起きるまでどこまで自己紹介とかしたんだ？

彼女はどうするのかと、堅二は問うべきか迷い、

「……後で話があるから」

そう言って少女も踵を返し、堅二に背中を見せて前の方へと歩いて行く。

歩く度に彼女の体重が軽いことが分かる軽い足音が、何度も床と彼女の上履きから鳴った。

さほど広くは無い教室内の机と机の間。狭い通路を彼女は歩き、やがて反転。

………！

堅二は見る。

彼女の回転する動きが、とても洗練されていて、尚且つ無駄が無いものだ。

軸たる足はバランスを一瞬とて崩さず、両手は大して動かしてないというのに回転の遠心力は強く、そして回転して踏み止まる姿にブレは無い。

恐らく武器は銃だろうと、堅二は当たりをつける。あの状態で両手に銃器を持ち高速回転すれば、全方位への高速射撃になる。それも次の拳動への隙が殆ど無いものに。

それは魔法が直接的に関わる訳では無いが、戦闘系魔法を学ぶ者としては大事な動きだ。

自分以外にもその姿を見て思った者が居たのか、ほうと息をつく音や警戒の気配を放つ者が居る。

「ではでは、気を取り直して自己紹介お願いしますね」

……まだ自己紹介してなかったのか。

虹色のチョークを先生から手渡され、不理解の表情をする少女を見て肘を机につく。

どうやら今から黒板に名前を書くらしく、黒板の上半分を完璧に支配している『転入生』の下に、チョークを持った彼女は手をやった。

……さて、どんな名前なんだ。

少女がどんな姓と名を書くのか、堅二はそれなりに注視して黒板を眺める。

彼女の小さな手に握られているためか、握られたチョークがやけに大きく見えた。

その虹色チョークが、少女の白い手に従って動き始め、文字を書き始める。

硬い物が擦れて片方が粉になって行く音が、短く何度も連続して鳴り響き、文字を作り出していく。

まず書かれたのは、カタカナの『タ』が二つ。次に移って書かれたのは縦長の『方』で、小さなカタカナの『ノ』、漢字の『一』、更に横棒と縦線を幾つか書いて漢字の『目』に似た所々突き出た字を作ってから、カタカナの『ハ』。

これで姓は書き終えたのか、彼女の手は空間を少し開けた。

次に書かれるのは漢字の『十』、次に『目』、漢字の『一』、そしてカタカナの『ハ』。恐らく最後であろう字の最初はカタカナの『ノ』に漢字の『二』。そして終わりに漢字の『人』。

己の名たる完成した文字達を一度だけ少女は確認して、教室側へ向き直る。

小さな唇から零れるは、文字を音とする声。

「多旗真矢。^{たはた まや} 十歳、『特別生』の資格を利用した飛び級生」

そこで少女、真矢は言葉を切って、

「——よろしくね？」

何処までも自信に溢れた強気的笑顔で、そう言った。

堅二が今まで見た笑顔の中でも、それは堂々の一位に輝く程の可愛さと、美しさを兼ね備えていて。

これから、高城堅二という少年が多旗真矢という少女に関わる内

に、何度も見ることになる笑顔だった。

思いは現実にはならない。
思いは行動になるだろう。

第一章・早朝の剣劇

出会いが衝撃的というならば
その後の誰かとの付き合いは
一体どう表現するのだろうか

鮮烈な輝きで、火花が散っていた。

それは『視線と視線がぶつかり合って火花が散っている』などという比喻としての物では無く、硬質な物同士がぶつかる事によって生まれる物理的現象の火花そのものを指している。あくまで物理的な物であり、何処かの誰かがいきなり修羅場などを生み出したりしている訳では無い。

日本の西暦二〇一一年、四月七日、木曜日、早朝。福岡県空峰市のとある小高い山の中腹辺りで、真つ赤な線香花火にも似た火花は連続して散り続けていた。

誰も居ない、人の気配がしない山の中腹部分の森林地帯。珍しく気温差によって生まれた白い霧が舞う中、紅い光の塊たる火花はよく目立ち、その名の通りに紅く熱い花となって消えてゆく。

その火花の原因は明白だった。火花が生まれる瞬間、何かがぶつかり、弾ける鈍い轟音が幾つも生まれているからだ。

白い霧を水のように掻き分け、黒い影にしか見えない『何か』は、普通の人間の目で捉えるのが不可能という無茶苦茶な速度で交差し合い、轟音が度々炸裂する。

やがて、一際高い轟音が一つ。

白霧の中を駆ける影は、交差では無く正面からぶつかり、轟音に混じって何かが軋む甲高い音が耳を震わす。

そして、一拍して。

世界を突き抜けるように、爆風が迸った。

荒れ狂う爆風は大気の壁となって、満ちていた白霧を押し流し、吹き飛ばす。常人なら目を開けることさえおこがましい程のそれは、

辺り一帯の木々をも根っこから斜めに傾かせた。

圧倒的な暴力たる風の後に残るのは、爆心地たる茶色い地面のみの開けた広場。

広場の中心は、何故かひび割れていた。ずれたような、圧迫されたような、細かな破片と大きな岩石が入り混じり、中心部から蜘蛛の巣のように広がるひび割れを見せつけている。

その原因は、大地へとめり込んだ四つの足。

「結界あるからって、やり過ぎじゃねえのか……！？」

「お前も人のこと言えねえだろうよアホ……っ！」

食い縛った歯の隙間から漏れる、男の低い声が二つ。

広場の中心で、声の元たる二人は額をつき合わせ、拮抗していた。普段は誰も居ないどころか、来る者さえ精々野鳥観測者や魔力現象研究者、もしくは何故か硬いロープを持って虚ろな目のまま登ってゆく会つてもなるべく理由を聞きたくない者達くらいなこの山の中腹で、二人の男、いや、少年は手に持った武器を前へ前へと押し出していた。

「うぐぐぐぐ……っ！」

一人は大柄な、身長百九十はあるであろう巨漢の少年。頭髮は白と水色を混ぜたような青白い色。筋骨隆々の身を包むのは白のトレーニングウェアで、長袖の上着は肩辺りまで捲り上げられていて、太い鍛え上げられた両腕がそれぞれ露出している。

その両腕に握られているのは、一つの大剣。

全長三メートル。身長百九十センチはありそうな少年の身の丈よりも巨大な、銀光煌めかせる大剣。刀身は西洋系の両刃式。分厚く、日本刀などと違って叩き潰すための金属の塊は無骨で、装飾という物が一切無い。柄部分も滑り止めの布も巻かれておらず、無駄を通

り越してまるで手抜きのような鋼の大剣。

対して、大剣の銀刃に光を散らして拮抗せしは、光刃。

金属なのは丸い灰色の柄部分だけで、大剣と火花を散らし噛み合っているのは、黄色い光の塊だ。魔力によって形成され、固体として柄に内蔵された術式で光に似た魔力を物体固定。光でありながら刃としての固体物質能力を持つが故に、光の刃は鋼の刃とぶつかり合うことが出来る。

魔力光剣。光の刃なため重さが殆ど無いことと、純粹な持ち主の魔力の塊だからこそその熱量や属性付加、形態変化などの応用性が長所の個人武器。

「ふんぎぎぎっ……！」

そんな武器を持ち、目の前に拮抗させる光剣の光に顔を照らされるのは、黒髪の少年。

身長は百七十と百八十の間ほど。大剣を持つ少年に比べれば全体的に細く見えるが、黒いジャージの下にある筋肉は、細いながらもよく鍛え上げられている。

髪も目も黒で、顔にもこれといった特徴は無い。しいて言うならば『平凡』という言葉が何処までも似合う容姿。

しかし今に限っては、光の剣で鋼の剣と打ち合う異常者の一人だ。

「……っ！」

鏢迫り合いの最中、黒髪の少年に不味いという思考が走る。

魔力刃が莫大な力の前に、構成を崩されまいと音を立てながら堪える中、問題は光剣にも少年にも無い。

黒髪の少年が抱く危機感の原因は一つ。

自分の足下が、目の前の少年よりも沈み始めたからだ。

それは、足下の地面が力に耐え切れなくなっているということ。

大地を構成する砂や石が砕ける乾いた音が一層強くなり、更にはただでさえ身長差で見上げる形になっていた大剣の少年が、徐々に上から押し込むように体重をかけてくる。

歯を食いしばりながら、光剣を両手で支え、

……クソ……っ！

舌打ちをしそうになったのを、なんとか堪える。力を一瞬でも緩めてしまえば、そのまま大剣に押し潰されるのは自明の理だ。

お互いに強化系の身体強化魔法を使用しているが、基本的に同じぐらいのレベルだ。魔法に使用している魔力量も大差無い。となると、元々の筋力同士の勝負になるが、それだと黒髪の少年に勝ち目が無いことは体格差から誰にだって断定出来る。

だから、このまま耐えていても待つているのは圧倒的な力に叩き潰される未来だけだ。

「ッ！」

だから、動いた。

肉体に込めていた力を、全て背後への移動力に変える。

やったことは簡単だ。斜め上に対して踏ん張っていた足と腕の力を、足裏が身体を背後に蹴り飛ばす力へと変える。腕を引き、地面を蹴り、前への拮抗を捨て、後ろへと。

拮抗を捨てたことにより、大剣は込められた力の通りに振るわれた。

音速を楽々と超えた鋼のほぼ真上からの一撃を、光剣を沿わせて防御し、受け流す。

あえて完璧に回避せず、光剣を沿わせることで大剣の動きをある程度誘導する。

狙いは、

「やべっ……」

相手からの、思わずという呟きが耳に入る。
どうやら此方の意図に気がついたようだが、

……遅いつ！

そのまま黒髪の少年はバックステップで下がり、光剣を引く。

直後、光剣という支えを完全に失った大剣が、大地に真っ直ぐ直撃した。鈍銀の大剣は速度と己の重量によって生まれた膨大な力を、全て大地へと叩き込む。

当然のように人外の力に大地は耐えられず、破裂。

土が水のように薙ぎ払われ、咆哮の如き音を伴った爆風が巻き起こった。小規模なクレーターが出来上がり、加えて砂埃も吹き荒れる。

正し、生まれた現象はそれだけではない。

表面の地面自体は耐え切れなかったが、その下の岩盤は別だった。ヒビを全体に入れつつ、なんとか砕け散るのだけは避けた大地は、衝撃の原因たる大剣を締め付けている。

長さ三メートルの大剣。その内の一メートル近い刃が、大地に杭のように突き刺さっていた。幾ら魔法の力があつたとしても、草の根を抜くようにはいかない程深く、だ。

「ミスった……！」

大剣を振り切ったことを後悔する声が聞こえたが、狙い通りの現象を前に黒髪の少年は容赦しない。

……攻め込む……！

あくまでもこれで稼げる時間は一瞬だ。次の一撃を即座に叩き込む必要がある。

巻き上げられた砂埃を含む風圧を肉体保護と気圧干渉の身に纏うオーラのような防御魔法で掻き分けながら、回転。

右足を軸にし、左手だけに握り変えた光剣を空気を裂いて振るい、

「――伸びる！」

直後、黒髪の少年が持つ光の刃が音も無く伸びた。

刃渡りにして約十メートル。

バックステップと地面の爆砕で開いた相手との距離を無い物とするには、十分な長さだ。

生まれた光の刃は術式によって不自然な程真っ直ぐ伸び、硬質な力は大気を切り潰し、横薙ぎに突き進む。

黒髪の少年の狙いは、大剣を両腕で握っているためから空きとなっている敵の、首。

体格に見合った野太い首へ、光剣の刃が迫る。

……よし、決まった！

歡喜の感情が、少年の中を駆け抜けた。

光刃はもはや首へと叩き込まれる寸前であり、今両腕を上げて防御してももう間に合わない。そして防壁系の魔法を展開しても、即興で発動した防御魔法など突き破れる。

だから勝ったと思ったのだが、

……って、やっぱりそう簡単には行かねえか！

光剣から伝わって来た硬質な感覚と、響いた金属音に勝利の実感

は掻き消えた。

彼が見る先、大剣の少年の首に当たる筈の光剣が止められている。止めたのは彼の筋肉質な太い腕でも、ましてや地面に突き刺さった大剣でもない。

光の刃を止めたのは、盾。しかも魔力と術式のみで構成された半透明で不確かな盾ではなく、歴とした固体の盾だった。

さっきまでは空気と粉塵以外何も無かった敵の隣に立つ、盾。

縦の長さが二メートルと巨大な鋼の盾は、大剣と同じで全く装飾など無く、ただ地面に突き立って横からの斬撃を食い込まれながらも防いでいる。レーザー型や熱線型の、固体物質能力を持たない光剣ならば盾に防がれながらも通過して敵を切り裂けただろうが、それはただの無い物強請りだろう。

とにかく結果として、タワーシールドと呼ばれる盾は己の役目通りに此方の攻撃を防いだ。

よって、反撃が来る。

「……！」

身体を今度は逆回転させ、魔力の無駄遣いを避けるため光剣の刃を縮める。

逆回転しきって正面を向けば、敵は大剣を地面から引っこ抜き、

「ふんがつ！」

野太い掛け声とともに、大剣で地面が巻き上げられた。

大量の砂と岩石が掘り上げられて、茶色い土のカーテンがお互いの間に生まれ、視界を塞ぐ。

カーテンとは言っても高さこそ五メートルに達するが、横幅は三メートル。厚さは二十センチもあればいい方だ。

回り込んだり突き破ったり、簡単に実行出来る。

だが、

「クソ！」

今度は声に出して、黒髪の少年は思いっきり左へと跳んだ。

肉体に常時展開している肉体強化の魔法と、足裏に展開した加速魔法の力を限界まで使って、跳ぶ。

足裏から丸い円陣術式が碎ける音と、同時に生じた足裏から体を押し上げる加速の力。

それ等を感じつつ、空中で猫のように背中を曲げて回転する少年の、逆さまの視界の中で、

向こう側から土のカーテンが微塵も残さず吹き飛んだ。

吹き飛ばしたのは、向こうから飛んで来た巨大な何か。鋼の色を持ち、宙を高速で飛ぶ姿は、砲弾。

砲撃のような轟音を上げ、彼が居た場所にその砲弾が着弾する。

どう見ても地面から抜かれた大剣にしか見えない、砲弾が。

大剣という名の砲弾は音速の三倍以上の速度で地面へと飛び込み、衝撃を無差別にばら撒く。

大地へ当然のように亀裂が入り、破裂し、爆散した。

大気と大地が、揺れる。

「あぶねえっ！」

思わず叫びながら、動きは止まらない。

衝撃波と共に余波として飛んで来る岩石を光剣で薙ぎ払って、黒髪の少年は受け身を取って転がり、片膝について起き上がる。

立ち上がる、まではいかなかった。

カーテンが無くなった、その先。

「よっしゃあ！ 一丁やってやるぜ！」

晴れ晴れとした顔と声の少年が、数十の武器を地面に突き立て、待っていたからだ。

大剣や盾と同じ、鈍色の装飾が一つも無い金属の塊。

違うのは形で、一つ一つの武器に刃が最低でも二つついており、持ち手は小さく片手分しか無い。しかも持ち手は刃と刃の間に取り付けられていて、近接戦で振り回すのには、とてもではないが向いているとは思えなかった。

それは、切るためではなく『投げるため』に存在する武具達。それ等からの攻撃方法は、ただ一つ。

「形成系金属魔法術式《武装創造》が奥義！」

向こうは此方が立ち上がる隙など与えないとばかりに、両手に武器を握り締め、

「インフェニティ・ウェポン・ストーム……！」

「それただの力任せ投擲だろうがああ——！」

此方の抗議を無視して、砲弾が飛んで来た。さながら嵐の如く。方向にして正面、距離は二十メートルと、音を超えた砲弾は一瞬でやって来る。恐らく重さは一つ百キロ以上はあり、投じられるのは一つや二つではなく、しかも高速で投じられていく武器一つが、一戸建ての家を木っ端微塵にする程の威力だ。

そんな死神と言ってもいい凶器の嵐に対し。

黒髪の少年の決断は速かった。

理由としては、彼自身も強化系魔法によって、超高速での戦闘が行える程の神経伝達速度を得ているということと、そもそも選べる選択肢が少なかったからという、この二つが原因だ。

選べる選択肢は二つ。真っ正面から武器砲弾の嵐を突破するか、

横に移動して躲すか。

前者と後者を比べると、圧倒的に後者の方がメリットが大きい。横に移動すると敵もそれに合わせて投げる方向を変えなければならぬ。更には速度があれば回り込むことも可能だろう。

対して正面に出ると此方が早く前に出れば出る程、反対側から来る攻撃は相対速度の所為で体感的に早くなるし、よしんば嵐を抜けたとしても待つているのは敵の前。簡単に対処されてしまう。

……だが！

だからこそ、黒髪の少年はあえて前に出る。

立ち上がるのではなく、そのまま前に倒れるよう身体を倒して、地面に這い蹲るようになり、

「加速術式展開……！」

少年の声とともに、

《強化系加速術式：名称『基本加速魔法運動増強型』・即時展開》

彼の左足裏の地面に、そんな日本語が書かれた円陣型の小さな術式が浮かんだ。

青い、半透明の魔方陣。魔力で象られ、魔力で発動するその術式は、術式を蹴り飛ばした者へと一瞬一回の加速の力を与える。

少年の足が術式が描かれた地面に触れ、円陣がガラスのような音と共に物理法則としてはあり得ない広がるような砕け方をして、

「おおおおおおっ！」

前へと加速した。

大気を押しのけ、光剣を突き出し、耳元で響く空気の音をBGMに突き進む。

が、土のカーテンの横に跳んだ時と比べると、その加速は遅い。単に肉体を加速させる魔法といっても、様々な魔法が存在する。身体を直接魔力で前に動かす物もあれば、空気の力で押し出す物も、また空間に干渉し距離自体を直接縮めるなどという物もあるのだ。

そんな中、黒髪の少年が使ったのは強化系の加速魔法で、術式の効果は『蹴り飛ばす力を倍増させる』というものだ。

例えるならば、ジャンプ台のような物。強く蹴れば蹴る程、身体を前に進ませる力は増加して行くし、弱ければ弱い程加速も弱くなる。

普段なら肉体強化魔法の力もあり、気を抜けば本人でさえ壁などの障害物にぶつかってしまいそんな速度が出るのだが、今はそうはいかない。地面を蹴る体勢が悪過ぎた。自分の限界加速度の半分にも達していない。

しかしそれでも、

……初速としては充分だ！

普段の全力疾走とほぼ同じ速度で、黒髪の少年は這うように前へと進む。

空を駆ける間に身体を起こし、二歩目をしっかりと踏み、眼前を睨む。

一步は五メートルの距離を踏み込み、武器を投げて来る敵への距離を四分の三まで縮めた。そこからは加速術式の恩恵の無い、普通の疾走だが、それでも加速で生まれた速度は、足を止めない限り持続される。

「っあ！」

だが二歩目を踏み出す前に、黒髪の少年は光剣を突き出した。突き出された光剣は姿を掠めさせ、刃は真っ直ぐ空気を穿つ。其処へ直撃コースだった武器の一つが壁のように衝突した。最初に放たれた、四つ刃の巨大手裏剣とも言つべきもの。縦に高速で回転し、丸い円刃のように見える刃の一つを、光剣が刺し貫く。貫き、金属にヒビが入り、破碎の悲鳴を上げさせ、破壊。破片は手裏剣自体が持っていた速度の所為で、此方を追い越して背後へと散って行った。

……第二陣が来る！

鋭い金属破片を防御魔法で弾き、光剣を握る右手からの衝撃に歯を食いしばりつつ、彼は二歩目を踏み込んだ。

こうしている間にも敵は次々と好き勝手に武器を投擲して来ている。休む暇は無かった。

といつても、もう既に十数人が投擲されているが、モロに直撃コースなのは実はかなり少ない。当たる武器も、屈んだりステップを踏めば避けれるのばかりで、

……だけど躲したら当たらないやつが当たっちゃう……！

考えてやがる、と黒髪の少年は思った。

直撃するように投げられたのは実の所囃で、本命は躲した後の『本来なら』外している武器達なのだ。

直撃コースの武器を躲させて他のに当てればOK、他のに当たるのを警戒されて動かなければ直撃コースの武器にぶち当たるのだから構わない。

そついう事だ。

黒髪の少年は前を見る。此方へと凶器を投げ続ける少年と、飛ん

で来る武器達の姿を。

基本的にこの投擲攻撃を一つ一つの攻撃範囲で見ると、点か線かのどちらかだ。

点は槍のように突き進んで来て、線は斬撃のように飛んで来る物。ようはそれだけで、後はその点や線の大きさが違うだけ。

黒髪の少年は、その攻撃範囲の群れを躲す。

まずは二歩目を左斜め前に跳んだ。これにより、前から迫っていた線の攻撃範囲である手裏剣が背後へと流れて行く。

三歩目を踏んで、前に飛び込むように飛んだ。上と下を、槍らしきものと斧らしきものが点の攻撃範囲を持って抜けて行く。

四歩目を膝を屈めて着地し、前に跳んだ。残りの距離は十メートル。思ったよりも、進めていない。

「らあっ！」

気合の声を出し、光剣を振るった。

宙に光の残照を残す剣が、迫っていた五の金属塊を力任せに空へと弾き飛ばす。鈍い轟音を上げて、視界からそれ等は掻き消える。

結果として、道とも言うべき空間が、敵に対して一直線に開いた。だが直ぐに次の武器が投擲されるため、この道を駆け抜けることは出来ないだろう。また、周囲を通過して行く武器砲弾の所為で、大きな動きを取ることも出来ない。

加速魔法を使用しても、馬鹿正直に真っ直ぐ進めばカウンターを叩き込まれる。魔法戦闘の常識の一つである加速魔法の弱点を、向こうもよく理解しているからだ。故に使えない。しかし。

黒髪の少年は、光剣の切っ先を正面に翳して叫んだ。

「伸びる光刃！」

道を駆ける必要は無かった。
ただ一直線の空さえあれば、全ては事足りる。

「……っ！」

驚きの顔を見せる相手が息を飲む音が、音速よりも早い世界の中で聞こえた気がした。

構わず開いた空間を、光刃が伸びて突き進む。

光の通り、その早さは光速に近い。術式の展開や固体化の関係上、どうしても光速よりも遥かに遅くなるが、それでも固体には出せない一線を介する早さを出していた。

敵の少年は腕を振りかぶって武器達を投げようとしていたが、その動作の途中は隙だらけだ。だから彼は攻撃が来ることを察知しても、避けられない。

それ等全ては一瞬のこと。

光剣の先端が、相手の首に真っ直ぐ直撃する。

「っ！っ！」

今度こそ、直撃した。

首を突き込まれるように穿たれた少年は、大柄な身体を仰け反らせて後ろへと吹き飛んで行く。彼が持っていた武器が、両手からすっぽ抜けて上空へと飛んで行った。

そんな吹き飛んで行く姿こそ間抜けで滑稽で実にスカッとするのだが、

……直撃はしたけど、決定打じゃねえ！

伝わる手応えが、弱い。

直前に展開された薄い防御魔法と、距離の問題故だろう。

光剣が伸ばせる限界距離は十メートル。腕を限界まで突き出しはしたものの、押し込むだけの刀身が無かった。威力不足の証拠に、防御魔法さえ貫けていない。

なので、向こうにダメージは殆ど無いだろう。

…… だけど終わりだ！

光剣を構え直し、吹き飛ばす少年を追うように、彼は前へ出る。

威力が足りなかったとはいえ、宙を舞う敵は無防備以外の何物でもない。

後は前に出て伸ばした光剣を思いっきり振り下ろせば、此方の勝ちだ。

よって、彼は前へと進む。

と、その時。

偶々、彼は揺れ動く視界が若干下寄りになり、足下が暗いことに気がつく。

己の影か、と思うが、それにしては影は時間が経つ度に大きくなるという変化を起こしていて、

…… っ！？

足を止めざるを得なくなった。

黒髪を揺らし、見上げた空からは高速で落下してくる物体がある。見覚えは、あった。

「さっき弾いた武器か……！」

金属塊が合計五つ、光剣の一撃でヒビを所々に入れながらも、それ等は降って来た。

もう武器達との距離は五メートル程まで狭まっていて、当たれば

動きを止められるのは間違いない。あくまで上から落ちてくるとい
う、音速にも届いていない物だが、それでも重力と重量の力は馬鹿
に出来ないのは確か。

タイミングが悪い、と思いつつ、

「ふっ！」

前に出ながら、黒髪の少年は伸びた状態の光剣を振り払った。

軌道は縦で、前から真上、後ろへと半円を描くように振るわれる。
音も無く空気を裂く黄色の光は、半月のような黄色の姿を生み出
した。

これにより、上から落ちて来ていた武器の一つ、当たる軌道にあ
ったものだけが破壊された。破碎音が頭上で鳴るも、彼は気にせず
突っ走る。

前に進むのだから、縦に真上を通して振れさえすれば、自分に当
たる物だけを的確に破壊出来る。破壊出来なかった物は横に落ちる
当たらない武器だから、無視していい。当たり前で、簡単なことだ。
そして進みながら破壊したため、無駄無く距離を詰めれた。

現在敵はようやく背中から地面に叩きつけられた所で、まだ起き
上がるのに時間がかかる。

急げ、と彼は思った。急がなくては体勢を立て直される、と。

……ここから届くか！？

向こうはかなりの距離を吹き飛んでいて、此方との間の距離はま
たもや十メートル程。

それは光剣の届く範囲ギリギリであり、しかも向こうは勢いのま
ま地面に滑り込んでいつている。

今振つても、外す可能性が高く、かといってこの体勢が良い状態
からの加速魔法を使うには距離が近過ぎるし、攻撃の踏み込みに不

安が残る。

……後三步！ 三步で光剣とアホと地面のサンドイッチだ！

三步と、彼は心に決めた。

全力の三步で距離を詰めた後、同じく全力で光の刃を振り下ろす
と。

行く。

「！」

一歩目で蹴った後に光剣を縮め、柄を両手で握った。

「っ！」

二歩目で大地を抉りながら蹴り、両手に力を込める。

「——なっ！？」

三步目は、踏み込み無かった。踏み込みではなく、彼の右足は急ブレーキとしての静止の力を生み、前へ進む動きを止める。摩擦を示す、莫大な擦れの音色が足下から上がった。

停止した彼の視界が、突如鈍色に支配される。

動きを止めたのは、彼の眼前に鈍色の物体が斬撃の音を響かせ、突き刺さったからだ。

最早何が降って来たかなど、見ずとも分かる。
だが、

……どうして武器が！？ 他にもまだあったのか！？

分からないのはそこだ。

自分が弾いた金属塊の武器は五つ。

立ち止まり、上を見て確認したのだから間違いない。自分の進路を邪魔しそうな物だけを破壊したし、他の物が地面に突き刺さる音も聞いた。破壊したのが二つ、地面に落着いたのが三つだ。

なのに、この武器達は何時空に飛ばされていたと考えて、

「さっき吹き飛ばされた時に、すっぱ抜けたヤツか!？」

気づき、叫ぶも返答はない。

彼の前には、変わらない姿で二つの刃を持つ大剣が突き立っている。隣少しばかり離れた所にも同じような武器が空から突き刺さった。相手の両手に握られていた内の、片方だろう。

視界を塞ぐ大剣がある所為で、相手の姿が見えない。

「邪魔あ!」

故に薙ぎ斬った。

両手で握った光剣を、溜めていた力を使ってバットののように振り抜く。

相手を切るためにためていた力を使った斬撃は、間にそびえ立つ邪魔な障害物を一刀両断した。

横一文字、と言っ言葉が似合う程、丁度真ん中当たりを綺麗に真っ二つにされた大剣は、大地という支えが無い上部を斬撃の衝撃で跳ね飛ばす。

宙を舞う鋼を見ず、黒髪の少年な振り切った光剣を流れるように左肩上へと掲げ、

……ぶった斬る!

両腕に力を入れた。

左斜めからの刃渡り十メートルによる斬撃は、距離を詰めた今なら確実に敵へと当てれる。

不安要因としては大剣に視界を遮られていたため、勘で斬り込むことしか無かったことだが、邪魔な大剣の半分を跳ね飛ばした今では遮られていた向こうの光景が見えていた。

だから黒髪の少年は、己の目で敵の姿を捉え、光剣を振り下ろそうとして、

……はっ？

その先にある光景に、動きを停止した。

其処に居たのは、吹っ飛んで地面に倒れ込んでいた敵の姿。

ただその姿は立っていて、立っている場所は十五メートル先と、かなり離れていた。

いや、まだ其処までなら良い。

黒髪の少年と同じ様に、加速魔法か何かを利用して距離を取ったと推測出来るからだ。

問題は、彼が掲げた手に握られた剣だ。

両刃の切っ先が尖ったシンプルな刃に、鍔は無い。小さな柄が、刀身の底辺部分からちょこんと出ているだけで、他には何も無く、ただ展開と発動をし終えた黄金色の四角形型術式が、砂の彫刻のように崩れながら幾つも巻きついていてるだけ。

黄金色の術式には、日本語の名称が浮かんでいる。

《形成系金属術式：名称『武装創造・龍殺し』》

至る所に《展開》や《発動完了》の文字を浮かべた術式が崩れて行く様は、まるで聖剣の封印を解く光の様な。

そして、黒髪の少年が思う何よりの問題は、

……デカツ！？

剣の大きさは『刀身五十メートル』に『横幅十メートル』。
天に聳える刀身は、下手なビルよりも巨大。

圧巻と言う他無かった。もはや対城塞、対龍機用の人外兵器クラス。まかり間違っても、人間一人に対して使うような武装では無い。見上げた空を完全に覆い尽くす鋼の刃は、ゆっくりと此方の頭上へと翳されて行く。

あからさまに、自分を叩き潰す軌道だ。

数百トン単位の金属が迫る恐怖、それプラス状況を判断して、

「ちょ、アホ！ ストップストップ！ こんなもんブチかましたら
結界が、っていうか死ぬ——！」

戦闘中だといえのも忘れ、慌てて相手に叫ぶのだが、大柄な少年
は叫ぶ彼を見てニツと笑い、

「わははははっ！ ……模擬術式があるからダイジョーブ！」
「お前今一瞬躊躇ったよなああああ！？」

しかも最後は片言だったと、前方で馬鹿笑いしている少年を見て
齒軋りする。

止めなければ、と、もしこの攻撃を喰らった場合に起きるダメー
ジやら後始末やらを想像し、ゾツとした黒髪の少年は、足裏に加速
術式を展開するのだが、

《強化系斬撃加速術式：名称『叩き切れ』・即時展開・即時発動》

散っていた黄金色の術式を消し飛ばして、巨剣の周りに黄色に光

るロール型術式が出現。

刃に沿う様に展開した細長い術式は魔力を通して一瞬で発動し、直ぐに石が碎けるような破碎音で掻き消える。

そして、術式の効果も一瞬で発動。

それまでのろのろと亀のように落ちて来ていた剣が、一気に加速した。

角度にして斜め八十度程度だった剣が、一気に五度程になって視界から早朝の空を消す。

足下どころか、辺り一帯が影という闇に覆われて、

「——あ」

という声が出たかどうかさえ定かでは無く。

黒髪の少年は、降ってくる鋼の巨剣と、それによって切り裂かれた大気の大規模な動きで生まれる豪風を、目と、耳で感じ——

■

「うおおああああああ——!?!」

高城堅二は絶叫した。

椅子を蹴り飛ばして立ち上がり、両手は机に勢いよく叩きつけられて打撃音を上げる。

彼の息は荒く、マラソンでもした後かのような疲労と興奮が混じ

り合った呼吸を、大きく音を立てながら数度して、

……あれ？

そしてそのまま数秒経ってから、ようやく堅二は現在の状況に気がついた。

己を叩き潰さんと落ちて来ていた巨剣の姿は何処にも無い。

今周囲に広がっている光景は早朝の山の中などでは無く、昨日の四月六日に行われた入学式から正式に在学することになった、自分のクラスの光景。

そしてその226クラスは現在授業の真っ只中であり、科目は一・二時限連続の魔法学。

教壇では担任でもあり、また魔法学の放出系を主に専科とする教師でもある若い女性教師が、此方を目を丸くして見ていた。驚いて落としたのか、彼女の足下には黒板に書かれた文字と同じ、白いチヨークが真ん中からへし折れて落ちている。

それを見て、堅二は言葉に出来ない寒気と共に理解した。

……しまった……！　　よりもよって今日この日この時間に寝ちまうとは……！

やらかした。

しかもただ寝てるだけならば良かったが、夢の所為で絶叫跳ね起きのオプションまで付けてしまった。言い逃れも出来ない。

内容が詰まらなかつたりもう知ってしまったている授業では、どんなことだろうと寝てしまふ何時も通りの自分の癖が、この時は恨めしい。

せめてもの抵抗にと、固まったままの担任教師に何か言おうとするのだが、

「オイオイ堅二い？ 授業中に叫ぶなんてどうしたんだあ？ 裸ブレザーの夢でも見てテンションクライマックスモードに突入したかあ？ そこんとこどうよお、ううん？」

「うるさいアホ黙れアホお前寝てただろアホ涎拭けよアホ言い方が一タイラつくんだよアホ取り敢えず其処から頭下にして飛び降りろよアホ」

「センセー、堅二君が遠回しに死ねとか言って来まーす」

跳ね起きの原因者たる大柄な少年、神原千羽が片手を上げながらおどけた口調でそう言った。彼の顔に浮かぶのはヘラヘラとした笑みで、怒りが増すことこの上ない。

早朝の模擬戦でお前がはしゃいだ所為だろうが……！ と、堅二は左斜め前方の青白いボサボサ頭を見て、今すぐ衝動のままに窓から突き落としたくなるがそうも行かなかった。

神原の言葉に再起動した担任教師が、此方を今だ丸くした目で見て、チョークを落とした手を宙で彷徨わせながら、

「あ、あの、堅二君……？ トイレ行きたいなら行っていいですからね？ ただ、授業中にいきなり青春の咆哮をするのはちよつと……。後、死ねとか言うのも……」

「あついえ、すみませんルーシエ先生。青春咆哮とかじゃなくて、ちよつと今日の朝、アホがアホな事やってアホなトラウマ作らされただけですから。後、アホに死ねなんて言ってませんよ先生。ただ窓から飛び降りて、頭打って少しはマトモになってくれって言っただけです」

金と黒の二色の髪色を持つ若き担任教師こと、ルーシエ・スカイ先生に堅二は謝りつつ、アホの友人に対する罵倒を混ぜ込む。

実際、夢を見て絶叫を上げる原因になったのは神原と言っているのだから問題無い。身体が疲れてるのも夢の内容も、原因は神原と

いう名のアホだ。

なので堅二も普段通りに言っただけ、椅子に足を広げて座ったままペン回しをしているアホは開き直るように、

「はいはい、寝たのは自業自得だと思います。後、堅二君の方が脳みその回路に異常があるっていうかテメエにマトモになれと言われたくねえぜバカ」

「アホは黙ってる。もういいから寝てろよアホ。そしてそこから二度と起きてくるなアホ」

「せ、先生、今堅二君がアホっていう単語をもう一生分言い切ってる気がします……！」

「先生、あのアホと関わってたら正直百人分くらいは必要かと。何せ、——アホなんで」

「テメエ堅二、俺の固有名詞をアホにするつもりか！？」

「理論的じゃないな……」

何やらアホとメガネをかけた男子生徒から声が聞こえたが、堅二は面倒なのと片方誰か知らなかったのでスルーした。

そのまま、そろそろ周りのクラスメイト達からの視線も強くなつて来ていたので席に座ろうかと思ったのだが、

「えっと、それじゃあついでだし、ここからは堅二君に読んでもらおっかな」

……マジか！？

教壇の方から、につぱりと笑顔で言われたため、堅二は立ったまま慌てて机の上に開かれていた教科書を手に取る。

幸い、寝てても涎を垂らしていたとか寝相で勉強道具を落としたとかいうことはなく、寝る直前に見た通りの机の上だったため、教

科書やノートが汚れてたり見つからないということは無かった。
だが、

……何ページ目の内容なんだ……！？

黒板に多少焦り気味の視線を向けるが、黒板には魔法という言葉が、自分達が世界のあらゆる物質や生物に含まれる精神感応素粒子『魔力』を『術式』で変化させて使って発動する物理法則外現象の事だけでなく、魔力自体によって起きる自然現象や、魔力が関わる全ての法則のことをも指すという事柄が書かれている。

が、しかし。内容は最後に『魔法法則』の通称が魔法、という文で完結しており、次に書かれているのは『魔法の主な系統について』という題のみだ。

だから授業を聞いてなかった堅二には、教科書の何処を読めばいいのか分からず、

「……クロ、何ページの何処？」

前の方でニコニコしながら待っている、身長百五十後半程の小柄な先生を見ながら、ボソツと尋ね、

「……十四ページ、上から三行目」

静かで鋭い返答が、左隣から返って来た。

堅二の左隣の席に座るのは、長い前髪で目元を隠す、気配という物が何処となく薄く、また憂鬱気な雰囲気を持つ少年。

身長は堅二よりも若干低く、身体自体も細い。加えて黒髪に遮られてその奥の黒い瞳が見えないということもあって、端的に言っただけかなり地味な少年だ。人集りの中に居たら、その他大勢として扱われそうな少年。

しかしそんな彼が武器接近戦闘ランクA-の資格という、日本でも十人程度しか持っていない資格を持つ天才剣士だということを、堅二は知っている。そして何よりも、小学校時代からの親友だということ。

齊藤黒。そういう姓と名の彼を、堅二は昔からクロと呼んでいる。そんな彼の言葉に従って教科書を開き、文字を目で追うと、先生が黒板に書いた『魔法の主な系統について』と全く同じ題が其処に見られた。

「さんきゅ」

「……………」

小声で感謝を告げると、小さな頷きの気配が隣からした。

お互い視線すら合わせないやり取りだが、それでもやり取りの間に感じる絆とも言うべき物を、堅二は心で感じる。やはり持つべきものは親友だ。アホは知らない。

……しかし改めて見ると、まだ最初の最初、基本的な部分ばかりじゃねえか。

堅二は文を見て思う。

書いてある内容は極めて一般的で、その気になったら一般人でも充分知ることが出来る魔法の基礎も基礎の事ばかり。

そう思った此方の顔を見たためか、ルーシェは苦笑いして、

「まあ……、『特別生』の資格を持っていて、日本に七つしか無い魔法生徒育成国立高等学校の試験にまで合格した貴方達には、ちょっと基礎過ぎてつまらないですよねえ。このクラスの皆は全員『特別生』の資格持ちで、一際優秀な人達ばかりですし」

「えっと、そんなことは……」

言葉が無意識の内に濁る。

ただ、堅二と同じような感情を抱いている者は他にも居るらしく、顔を逸らしたり渋い顔をする者が何名か居た。

そんな彼等に対し、ルーシェは「それでいいんですよ、それが普通なんですから」と言って頷き、

「日本が定めた平和条約の一つ、戦闘系魔法を学べるのは十五歳以上の人という決まり。だけど、魔法に対する大きな才能や魔力量を持つ子供達を何とか早期から魔法について学ばせ、事故などを防ぐ為に作られた『特別生』の資格制度。その資格を持っている時点で、皆さんが普通の人達よりも才能があるというのは間違いありません」

ですが、と彼女は続ける。

「だからといって油断は禁物です。魔法というのは才能と努力、そして心で作られる物で、扱い方次第で人を救うことも、殺すことも出来ます。時には魔法の力があるというだけで差別を受けたり、恐れられたりすることもあるかもしれません」

……あるだろうなあ。

言わば、戦闘系魔法が使える者というのは常に見えない銃器を持っているようなものだ。

無論、銃器と違って人を助けるためにも使えるが、それでも大概の魔法が戦闘のために存在する。

だから、最近は魔法を学ぼうとする者自体も減って行っていると堅二は聞いたことがある。人によって差が出て、戦いを前提にした危険な魔法など、日常で普通に生きて行くには、魔法機が発達した今の世の中には必要無いからだ。

だから魔法を学ぶ為にこの学園に通ったり、様々な権利やサポートが与えられる『特別生』の資格を持つ者は、一部の人間達から差別や疎外感を受けている者も居る。

だが、今この福岡県魔法生徒育成国立高等学校に通う者達は、それでも自らの才能を使って世に出ることを選んだ。

後にどんなことが待っているのか分からない、不確かな魔法の道を選んだのだ、この学園に在学する者達は。

「だからこそ、皆には小さい頃から知ってるーなんて言って、油断しないで欲しいんです。時代が変われば、魔法の常識だって変わります。皆、思いの差はあれど、自分の才能と心を信じてこの学園に来た筈です。ですから――」

其処でルーシェは言葉を切り、表情を緩め、

「一緒に、頑張って小さな事から努力して行きましょう。将来、自分に魔法の力があつて良かった、才能を捨てなくて良かったと、誇りに思えるように」

言葉の後に訪れたのは、沈黙。

静かでないが、しかし沸騰寸前のような空気の沈黙だ。

そんな空気を察したルーシェは笑みのまま表情を固め、

「あ、あれ？ 先生何かミスっちゃいましたか？」

「いや……」

何故かぎこちない笑顔で伺う様に尋ねる先生から、生徒達はほぼ全員が視線を逸らし、

「おいおい……。何だか先生が先生らしい事言ってるぞ。明日の天

気は雨のち魔力弾か？」

「待て、よく考えると俺達に『「特別生」だからって調子に乗ってんじゃねえぞ！？ 真面目にやりやがれ！』っていうのを柔らかに言っただけなんじゃ……」

「驚きの変化だよなあ……。あの、半年前に始めてこのクラスに集まった時、教室の入り口で『あ、あれ？ ドアが押しても開きませんよ？』なんて言ってた人物と同じとは思えん……」

「私飴玉持つてるんですよー、って言われた時に差し出されたのが、汁が垂れまくってる梅干しだったっていうのは、今でも鮮明に覚えているわ……」

「入り口に黒板消しの罫を仕掛けられた時も『ふふっ、皆さんバレバレですよ』とか言いつつ、何故かそのまま喰らった時は本当に頭がどうかしているのかと……」

ボソボソと小さく呟いている自分の教え子達の姿に、ルーシェはわたわたと子供みたいに手を降って、

「み、皆酷いですよ！？ 自分割と良い事言っただけなのに！それに黒板消しはウケ狙いで……！」

「ウケ狙いにしては本気で涙ぐんで、慌てて皆で慰めた気が……」

「受け？ ルーシェ先生、同人誌に出たいんですか？ 心配しなくても先生はネタに困りませんから、近々一冊出しますよ。楽しみにしてくださいね？ ——先生、男性化してるけど」

「な、泣いてません！ 後、文ちゃんは何を言ってるんですか！？ 先生何だか寒気がします！」

このクラスの連中本気で濃いなあ、と堅二は担任の失敗談を語るクラスメイト達と、それに対して異論を述べるルーシェを思っている。

彼は教科書を持って立たされた状態のまま、

……俺は放置かよ。

一体自分が文書を音読するのは何時になるだろうと、溜息を一つ。クラスメイト達の騒がしい声と先生のもつと騒がしい声を耳に入れないながら目を動かすと、自分の周りの席に座るクラスメイト達は案外静かだった。

周りに座るといっても、堅二の席は教室の前から六列目。七列目もあるが、生徒人数三十七人のため、縦六列横七列のこの教室では、実質の最後尾であり後ろには誰も居ない。

前には長い青髪を靡かせる幼馴染の少女が居て、後ろ姿を見るに頼杖ついて教室の惨状に呆れているようだ。

左隣は無口な親友が、恐らく目を閉じて我関せずな態度を貫いている。目で見て確認した訳じゃなく、何となくだが、似たような雰囲気（きふき）を小中学時代から感じたことが何度もあるから分かる。

「……………」

だから、堅二が見るのは右隣。

其処は、昨日までは空席として扱われていた場所。席は昨日、全員がそれぞれ自由に決めたため、六列目に空きが生まれてしまったのだ。

一応七列目の者が前に出て空席を埋めるという案もあったが、結局はまあいいかということ（こと）で全員の意見が一致し、空白になった席。今は一人の少女が、その席に座っている。

席が丁度そこだけ凹むように空いていたというのと、最初の自己紹介前にわざわざ此方に来てまで会話したことから決まった、彼女の席。堅二は最初こそ緊張したもの、今はもう隣に居るのに寝てしまえる程、彼女に対する警戒が溶けている。

多旗真矢。字面だけを見れば男のような名前を持つ彼女は、自分

には合わないだろう高校生用の椅子に座り、前を見つつノートを取っていた。

幼い横顔は、真剣そのもの。

それこそ、彼女の実年齢に似合わない程に。

……意外と真面目なんだな。

横目で彼女を見つつ、堅二は内心で失礼な感想を持った。

十歳で既に『特別生』の資格を持っていて、しかも五年分の飛び級が出来る程の学力がある彼女にとっては、魔法の基礎とも常識とも言える内容のこの授業は、高校生が平仮名を学び直すような物だろう。

なのに彼女はクラスメイト達が担任をからかっているのにも構わず、黙々とシャープンを動かし、白紙のノートに文字を書いて行く。

「……………」

「……？」

黒の線を書いて行く真矢を見て、ふと堅二は疑問で首を傾げた。ノートに文字を書くという行為自体は、パソコンが全生徒に配られてもした学校でも無い限り普通なので、それ自体には何も疑問はないのだが。

何故か彼女は机にノートを二冊広げていて、片方は黒板と同じ内容が書かれた状態で開かれたまま放置されている。

今書き込んでいるのは、もう一つのノートの方で、

……術式の構成式？ いや、理論の段階か？

複雑な、所々にアルファベットや図形も見られるノートの紙面。それは魔力を制御し、変化させるための術式理論の図だと、堅二に

は軽く見ただけで分かる。だてに『特別生』の資格を持っている訳ではない。

ただ字が小さいというのと、術式理論開発の分野に堅二が詳しく無いこともあり、どんな術式がどんな理論でどれだけのオリジナリティを持っているのかどうかは、パツと見では判断出来ない。

しかし、堅二は魔法を学ぶ者として、そして無茶苦茶な初対面をかました少女への好奇心から、彼女の手元へと視線を強めた。もっと良く見ようと、無意識の内に身体が右に少し傾く。

「……………」

此方に気がついていないのか、真矢は無言で睨むようにノートへと目を凝視させ、高速でシャーペンを動かす。

それをいいことに、堅二の身体もドンドン傾いて、首も伸びて、

「……………何やってんの？」

「……………」

バレた。

真矢から不審なモノを見る目で見上げられ、傾いていた堅二の動きが、魔力エネルギーが切れた魔力車のように鈍い音を上げて止まる。

ふと、動きが止まった堅二の頭によぎる思考。

…………あれ、これ結構不味い体勢じゃ…………？

客観的に見て、自分は今口元に教科書をやって隠しつつ、年下の少女の手元を覗き込むようにしている変態一步手前ぐらいの事をしている。まあ、魔電車の中で隣の人が扱う携帯端末の画面を覗き込んでしまったような物なので、まだいい。

しかし茶色の前髪の下、緑の瞳で訝しむように見る彼女からは、

……いきなり隣の席の男が立って、教科書で顔隠しながら自分の方見てるって思うよな……！？

恐らく彼女は堅二が音読の為に立たされている事を知らない。無言で周りの音が聞こえないかのように作業していた姿を思い出す。だから、真矢にして見れば自分は手元を覗くためにわざわざ立ち上がって顔まで隠してる馬鹿か変態にしか見えないかもしれない。下手すると、胸元を覗いているなどという心外かつちよつと自意識過剰な勘違いをされている可能性もある。

……そんな誤解は受けたくねえ！

もう既に裸エプロンだの裸白衣だの、絶対に他人はバラしたくないような事柄を知られてしまっているのだ。

ここで新たに『十歳児の胸元を覗いた変態男』などと言う称号は得たくない。死んでも受け取りたくない。

ただ、そういった堅二の想像は杞憂だったらしく、

「ああ。これが見たいの？」

気軽そうに、しかし何処か気怠そうにしながら真矢は書きかけのノートを手にはヒラヒラと扇ぐ。

彼女は自分の茶色の髪を、手櫛で軽く整えながら、

「まだ構築してる最中だから、まあ今日か明日には実際に見せれると思うわよ。まっ、『目的』を果たす為には必要だしね」

「……目的……？ それって、後から話があるとか無駄にシリアスな雰囲気と言ってたヤツか？」

「無駄につて……ハア。そうよ。話があるのはアンタだけじゃないけどね」

そう言つて真矢は、自分の手元、掲げるノートの先に目を移し、

「神原千羽、斎藤黒、月夜千春^{しげちる}。この三人にも声をかけるわ。アンタに最初声をかけたのは、アンタが最優先だったから」

「……目的を知らないから最優先だの何だの言われてもよく分らんが、アホとクロと月夜つて三人とも俺の知り合いなんだが、だからか？」

辺りを見渡すと、アホっぽい大柄な少年が、隣の席に座る背の高めなセミロングの少女に叱られていて、自分の隣では親友が変わらない態度で座っている。

そんな堅二の警戒にも似た雰囲気を感じたのか、真矢は口元を緩め、安心させるように告げて来た。

「狙った部分もあるけど、実の所偶然よ。ただアタシは、生徒会にも委員会にも所属せず、実力があつて、出来ればアンタの友人及び知り合いがベスト、つて考えてただけだから、アンタの交流関係にあの三人が居たのは好都合ね」

「……………」

堅二は、思わず眉を歪めた。

生徒会、委員会といえば、この学園を運営する組織の事を指す。

詳しいことはさっぱりだが、確かこの空峰学園の運営や方針は生徒の自主性や社会性を養うという理由で八割以上が生徒達に委ねられており、生徒会などは生徒達の代表を務める組織と聞いたことがある。

各委員会が風紀、体育、生活、保険、図書、放送のそれぞれ役割

を持った六つ。そして校内や学外に置いて最大の権限を持つ生徒会は、国や教師の命令に対し『反対権限』を持っている唯一の組織だと聞いている。つまりは、生徒会と委員会は生徒達のリーダーであり、尚且つ学園運営を担う重要な役柄だ。

確か半年前、このクラスのメンバーが決まる前からそんな面倒で自分には全く関係無さ気な話があったり、立候補やら選挙やらもあった気がするが、余り覚えていない。細かい仕事内容やら規模やら決め方などは、聞いたのだろうがもう忘れている。

ちなみに三学年でバラバラに分かれているこの学園は、校舎も教師陣も生徒会も委員会も、全て学年ごとに半独立状態で存在していて、三学年通して存在するのは学園長と理事長くらいなものだ。

よって、確かに生徒会や委員会に所属するメンバーは一年生にも居るが、

「生徒会や委員会に所属してないって、それ要するに一般生徒にしか出来ない目的ってことだよな？ …… 一体何するつもりだ？」

「別に、そこまで悪いことじゃないわ。ただ一般生徒として当然の権利を使わせてもらうだけよ」

「強い方がいいなんて言っておきながら悪いことじゃないって、全く信用出来ないんだがそこら辺分かるかガキ？」

「…… 普通、ここまで言ったらアタシの言いたい事に気づきそうなものだけど。アンタこの学園に入る時説明会とかちゃんと受けた？ パンフレットとか校則集軽くでもいいから読んだ？」

「生憎と、この学園に入ることは入ったが、そういった面倒そう自分なんかと関係無さそうな話はまず聞いてないからな。パンフレットも貰った直後にゴミ箱行きだし、五百ページぐらいありそうな校則集も部屋で埃かぶってるよ」

「…… アンタバカ？」

「自分の自己紹介ほっぽりだして俺の自己紹介をしたお前程じゃねえよガキ」

下から不機嫌そうな光を持って睨まれるが、堅二は真っ直ぐ立ち直して無視する。

無視しつつ、しかし脳は今真矢が言ったことを反芻していて、

……本当に何するつもりなんだ？

分からなかった。

何やら委員会が生徒会に関係することだとは分かるが、それ以上の事が分からない。判断するだけの情報と知識が、彼に無いからだ。今の堅二に分かることは、四つ。

- 1：真矢は生徒会か委員会に関わる『何か』をしようとしている。
- 2：『何か』は実力がある者が複数居なければ実行不可能。
- 3：尚且つ、生徒会や委員会に所属していない一般生徒で無ければいけない。
- 4：そして何よりも自分が必要らしい。

分からない、と呟いてしまいそうくらい分からなかった。

特に、四番。

自分が必要、などと言われても、堅二はそんな何かのために必要と言われる類の『特別な人間』ではない。『特別生』ではあるが、それでもこの学園一年次の半数が資格を持っているし、真矢の方がそういう意味では圧倒的に特別だ。

堅二は魔法が使えるが、魔法が使える者の中で特段特別などではない。

そんな人の群れに埋もれてしまいそんな人間である自分が、彼女の目的に必要なということが、一番訳が分からない。

……まさか。

思考が、悪い方向へと一気に転落した。

さながら、大地の亀裂に足を取られ、落ちて行くように思う。

『高城堅二』は、たった一つだけ特別な物を持っている。だけど、それは――

「しょうがないわね……。とにかく、昼休みに屋上でこの学園とかについてまとめて教えて上げるから、絶対に来なさいよ？」

「……なあ、お前さ」

「……何よ」

声を持つ感情が変わったことに気がついたのか、真矢から返って来るのは疑問の声ではなく、促しの声。

今、己はどんな顔をして、どんな目をして、どんな雰囲気を滲ませているのか。

鏡が無いから、そんなことは分からない。

彼女に対し目を合わせない堅二は、一度息を吸って、なあ、ともう一度呼びかけて、

「まさかとは思うが、お前――」

「だ、だからまずは小さなことから頑張って行きましょう！ はいっ堅二君、お願いしますっ！」

質問を遮る先生の誤魔化すような声。

感情の籠らない質問をしようとしていた堅二は、その声に正氣に戻った。

視界に入るモノを見ようとして見ていなかったらしく、脳が正常の作動し始めて見たのは、此方を急かすように手を振るルーシェ先生。何やら椅子の上で正座をしてるアホ。そして周りから放たれる

急かすような視線。

……自分はこんな時に何を尋ねようとしてるんだか。

馬鹿馬鹿しいと、そう思った。自分はこの教室で、何無駄なシリ阿斯をしているのかと。

苦笑が漏れて、口の端が少し釣り上がった。

「……何か知らないけど、名指しされたわよ」
「……分かってる」

小声で告げ合つと、真矢は話を切り上げるように術式を書くノートへと右のシャーペンで書きいれつつ、左手にもう一本シャーペンを握る。

そしてそのまま、授業用だろう開いたもう一つのノートに、左手のまま文字を書き入れ始めた。

書く字に乱れは無く、右手の動きも止まらない。一人の少女から、二つの筆記音が生まれている。

……両利き？ しかも同時に授業受けながら術式理論組み立てるとか、物理の問題書きながら数学の難問解くようなもんだぞ……。こいつ本当に十歳か……？

サラリと隣で行われている超人技に驚きを突破して呆れつつ、堅二は自分の手元、手に持つ教科書に目を通す。

目に映るのはどれもこれも自分が知ってる内容ばかりだが、本気で先生が助けを求める目をしているので、素直に読み上げることにした。

「魔力は精神に反応し、様々な物理法則外現象を起こしますが、そ

れだけでは安定した力とはなりません。精神は常に不安定なもので、また魔力自体も魔力石や魔力水のように結晶体にならないと、安定しないからです。なので、魔力を魔力法則で従え扱う術式という魔力操作方法が、幾人もの研究と経験から作り出されました。世界中で魔力を持たないモノなど無いのに、どうして物質と生命体では魔力の多さが圧倒的に違うのか。どうして魔力を扱え魔法現象を発生出来るのが生命体、それも比較的知能の高い生物である人間とごく一部の動物だけなのか。それ等の理由が精神にあることも術式の研究、ひいては多旗教授による精神反応実験を代表とした数々の研究により明らかになりました」

「はい、その通りですね」

音読により、教室の中が真面目になったことに安心した先生は、ホツと息を吐き、

「昔は今みたいに魔力で術式をそのまま作っていたのではなく、武器や地面に直接術式を描いていたそうですよ。その方が昔は効率が良かったんですね」

「……魔法術式は地域や民族、国家によってありとあらゆる物が生み出されて来ましたが、主に七つの系統に分けられます。強化系、形成系、放出系、防壁系、空間系、幻惑系、儀式系の七つです。これは今現在どの国においても、ランク制度と同じくMUN（魔法国際連合）によって統一されていて、あらゆる世界各国において共通です」

文章はそこまで、続くのは各系統の説明文だ。

読み上げて欲しかった部分を読み終わったのか、ルーシエは堅二に座るよう言ってから黒板に向き直り、チヨークを手に持つ。

手に持ったチヨークが虹色だったのに気がつき、慌てて白に取り替えつつ、

「強化系は加速などの現象や物質を強化するタイプ。形成系は魔力を物理的物質などに形成するタイプ。放出系は魔力を魔力体としてそのまま放出するタイプ。防壁系は魔力を使って防壁などを作るタイプ。空間系は結界などの空間に直接干渉するタイプ。幻惑系は相手に魔力的干渉から脳を幻惑させるタイプ。そして、儀式系は大規模な術式を展開したり何かを代価に差し出すタイプ。以上が七つの系統です」

黒板に、ルーシェが言う通りの内容が白の文字となって刻まれた。チョークで字を書く慣れた手つきに、いつもそう流麗に動けたらいいのになあ、と堅二は頼杖ついて担任の綺麗な文字を見る。

内容はやはり堅二の知っている通りで、違っている点といえば、

「一応下に例を書いておきました。各系統ごとにさらに分類が分かれているので、実は強化系の加速術式もあれば、放出系の加速術式もあったりするんですよ！　そういう細かいのは、やはりその術式でどういった効果が生み出されるのかで決まるので、結局の所七系統以上に魔法を分類するのは難しいんですよえ」

強化系の下には『肉体強化など』、形成系の下には『金属生成など』、放出系の下には『レーザーなど』、と系統ごとに主な例が書かれている。

……なんでレーザーなんだ？　普通そこは光線じゃ……。

感じた素朴な疑問を、堅二は出さない。クラスメイトも何人かが首を傾げているが、誰も笑顔のルーシェに指摘しなかった。

何はともあれ、全七項目の系統による文章は、黒板の半分以上を支配している。

その文章を書き写すのを面倒だと感じつつ、堅二はシャーペンを取り出した。

「先生、儀式系の所に『契約術：例《英雄術》』とか書いてますけど、どうしてですか？」

「あつ、良い所に気がつきましたね守君！^{まもる} 実は、去年東京の天峰学園の方で《英雄術》を知らずに使ってしまったという事があってですね、今年はそんなことが起きないように、皆さんに知って置いてもらおうかと」

そんな会話を耳にしつつ、堅二はシャーペンの芯を上部分を押すことで出す。シャーペンの仕組みが一切の魔法が関わっていない、ただの技術だと知った時、幼い頃の自分は大変驚いたものだ。

「《英雄術》って確か、あれですよ？ 古代に作られた、精神に反応するっていう魔力の性質を最大限に利用した『儀式系存在強化術式魔法』って夢のような魔法」

「はっ、夢とは言いで得て妙だな。見て居る時の幸福感は凄まじいが……、覚めた時の絶望感は何倍するがな」

「代価が『感情に実力が伴う』っていうメリットデメリット複合系の代価で、昔は民衆の支持を集める王や騎士などの『英雄』が使ってたからそう呼ばれるようになったらしいけど……」

「皆、やっぱり詳しいですねえ」

……書くの辛いなあ。ノート全部パソコンとかになればまだマシなんだが。

とにかく書くのが辛い。書かなくても覚えている内容だと言うのが、余計にそれを増長する。

魔法を校舎内で使うのは原則禁止であり、故に楽は出来ない。辛

くても、頑張るしかない。

「この術式の最高な点は正に代価の部分で、簡単に言うと『勝ちた
いという方向性の感情が強くなればなる程、魔力が増す』っていう
効果、記録では魔力以外にも戦闘に関する基礎能力ステータスが一気に一、二
段階程跳ね上がったというのもありますね。ただ、問題は逆……、
『負けるかもという方向性の感情が強くなればなる程、魔力が下が
る』という点で、これは負けるかも、とか思うと力が増えるどころ
か素の力よりも下がるというものなんですよね。二つまとめて『感
情の増減に実力の増減が直結する』という効果です」

「あつるえ？ でもそれだったら、ポジティブな心を持っている人
だったら別に大丈夫なんじゃない？ ようは負の感情を持たなきゃ
いいんでしょ？」

「残念ながら、人はそう単純には出来てないさ。誰だって戦闘中に
『負けるかも』と一瞬思考が過ぎったり、戦う前に『勝てないかも
しれない』と一瞬でも感じたことぐらいあるだろう？ 《英雄術》
で強化している者はその時点で元の力よりも更に弱体化して、ほぼ
確実に負けてしまうんだよ？ だからこそ英雄と呼ばれる者達がこ
の術式を使い、民衆達はこぞって英雄が勝てるよう声援を送ったと
いう。強気になれるように、ね」

「ブローニング君の言う通りですね。しかも一旦負の感情を持った
人がデメリットで魔力が減り、魔力が減ったことに負の感情を強め
てまた魔力が減り……なんていう、泥沼に陥ったこともあるそうで
すし、最悪の場合魔力を失い過ぎて死亡なんてことも……」

何やら先生は熱心に語っているが、堅二は内容を右から左に流し
て聞かず、視線を右へ。

黙ったまま机に齧り付くように文字を書く少女の姿を見て、

……どうしてそう、詰まらないことを根気良くやれるんだろっな。

「しかも《英雄術》が『英雄』術と呼ばれるのにはもう一つ理由あって、それが『儀式系存在強化術式魔法』という過去の人々が見落としがちな、最大のデメリットなんです。分類から分かる通り、この術式は単純な魔力による強化の魔法ではなく、『人間としての存在部分から強化する』というもので、つまり――」

隣の少女に時折目をやりつつ、堅二は何やらルーシェの説明好きスキルが発動した所為で脱線した授業を受けながら、黒板に書かれた内容をノートに写して行く。

真矢の字と比べて、格段に汚い堅二の文字は、授業が終了真近になるまで説明し続けた担任の嘆く悲鳴が上がるまで、ノートのページに刻み込まれて行った。



「じゃ、屋上で待ってるから、さっさと来なさいよ」

四時限目の古典授業が終わった後に隣から告げられたのは、遊びに行くような軽い台詞。

机の上に出していた教材全てを学生カバンに詰め込み、呼びかけをし終えた真矢は躊躇なく席を立った。

そしてあれから結局授業の殆どを爆睡して過ごし、半分程意識が夢の世界へと二段ジャンプで飛んでいた堅二は、

「…………おお」

と、目元を擦りながら返事をする。

堅二が返事をするまでのノロノロとした動作による数秒の間で、彼女は体格に見合わない大きなカバンを手に持ち、此方に背を向けた。

そのまま振り返ることなく颯爽と歩いて行き、全員が何故か固まった教室を横切つて、出入り口から廊下へと消えて行く。

「…………うんむ？」

そんな彼女の後ろ姿を彼は見送りつつ、頭を振り、寝呆けた意識を回復させた。

堅二のまだ眠い脳内でまず上がるのは、真矢が言った台詞で、

…………ああ、そついや昼休み屋上に来いとか言つてたか…………。

二時限目と三時限目の間にある中休みに、神原や斉藤、月夜に話していた真矢の姿と、自分に屋上に来いと言つた彼女の姿が同時に思い浮ぶ。

ただ、

…………なんで俺だけ強制？

神原達には「よかつたら」とか「来てくれると助かるわ」と言いつつ、自分には「来なさい」と命令なのか。

扱いの差に文句を言いたくなるが、当の本人は宣言通りさつさと行つてしまっている。文句を言いたくても本人が居なければ言えない。

なので、

「行くか……」

立ち上がり、背伸びして骨の音を鳴らし、身体を目覚めさせる。カバンの中には財布や携帯魔法機と今日の昼食であるコンビニ弁当が入っており、学園の教材は既に机の中。わざわざ真矢のように持つて行く必要も無いだろう。盗まれて困る物でもない。

だから、後はカバンを持てば屋上へ行く準備は完了する。

さて、と堅二は机横のフックにかけていたカバンへ手を伸ばし、

「ちよつと待ったあああああ！？」

「おおおおおっ！？」

叫びを前面からダイレクトに喰らった。

驚きの悲鳴を上げながら反射的に耳を塞ぎ、堅二はしかめっ面の視線を前にして、叫びの主を見る。

甲高い声の響きは女性の物であり、堅二はよくその声を知っている。

小学校に入る以前、小さい頃からよく聞いて来た、幼馴染の声。

鼓膜を破ろうとしたのかと聞きたくなる程の大声をぶつけて来た彼女は、何故か息を荒げつつ、鮮やかで特徴的な青の髪を振り乱し、普段は健康そうな肌色の顔を興奮の朱に染め上げている。

彼女が何故そんなに興奮しているのか分かっていない堅二は、首を傾げて、

「なんだよ水葉^{みずは}。ゴキブリかスライムでも居たのか？」

あまがわ みずは
天川水葉。

何処ぞの和風お嬢様と言われておかしくない程の質素な美しさと

礼儀正しさを持つ筈の彼女は、何故か今まで見たことの無いような怒り顔を浮かべ口を開く。

可憐な唇から放たれるのは、最初と似たような叫びで、

「違うっ！ そうじゃなくて——」

「そうじゃなかったらなんだよ。ああ、あれか？ このまえ貸した『魔王の伝説92 勇者ゾンビ討伐編』がまだクリア出来ないのか？ あれは勇者の城に突入する前に戦士ゾンビに魔王流トリプルアクセルジャーマンスープレックスかまして、勇者ゾンビの弱点を聞き出さないと」

「もうクリアして今は最初っから勇者の城の門が開いてる『何時でもクリア出来ますけど行かないの？』モードで二週目してるから！ そうじゃなくてちゃんと話を聞いて！」

「んー？ 何だよしつこいなあ。それじゃなんだよ？ 昔お前ん家の屋根の上で神原とコサツクダンス勝負したことなら、もう謝っただろうが」

「まだ堅二寝呆けてるの！？ お願いだから目を覚ましてよ！」

カバンを手に取りはしたが、何故か両手で肩をがくがく揺さぶられていて、屋上に向かえない。

何をこの幼馴染は錯乱してるのだろうと思いつつ、熟睡後の寝起きで気だるい堅二の目はクラスメイト達の方へと行く。

が、何故かクラスメイト達の大半が教室内部にて各々スクラムを作っ

「おいおい、天川もツツコミ体質とはいえ『空峰学園週間ツツコミランキング』で二週連続一位の高城がツツコミ入れられてるぜ……」
「あのバカは九割方ツツコミ役かと思ったが、寝呆けた状態では完全にボケ役だな……」

「っーか、転入生の話といい、アイツ昔は結構なボケ役だったんじ

やないか……?」

「違うでしょ。どう見てもただのバカでしょあれ」

「寝呆けるっていうか、あれもはや夢遊病のレベルだって。本気で今朝何があっただ……」

「……ふむ、寝呆けてるだけにボケ、と。あつ、何故に全員引いてるので御座る!?!」

「忍者モドキ、世の中には言って良いことと悪いことがあってだな」
「取り敢えず罰として『ザ・ファイナル焼きそばパン』買って来いよ忍者モドキ」

「親父ギャグかどうか微妙な今の一言で売店の一番人気商品はちょっと酷いで御座るよ!?!」

……うるせえなあ。

うるさい御座る口調とその口調の持ち主に対する口撃に、頭の奥底が段々と覚めて来た。

生暖かく、ボーとしていた思考は冷たく形となり、目は目的を持って辺りの情報を取り入れる。

自分の居る教室、226クラスの光景が、はっきりと認識出来て、

……何やってんだ、アイツ等?

スクラムを組むクラスメイト達の向こう、何故か涙目になって叫ぶ天川の向こう、真矢が消えた教室の出入口に立つ影が三つある。大柄な少年と、赤髪緑眼の少女、細身の少年の三人だ。

彼等は此方に何故か頑張れとでも言いたげに親指を立ててから、廊下へと去って行く。

三人が誰なのかは一瞬で理解出来た。神原、月夜、斉藤の三人だ。なのだが、

……何か嫌な予感がする。

最後の親指と、此方を見る哀れむような目が、頭の裏側でチリチリと燦っていた嫌な予感を燃え上がらせた。

寝起きの頭が一気に冷えて、正気かつ冷静な思考がめぐるましく展開され始める。が、幼馴染は暴走し過ぎているのか、目に光が戻っている堅二の肩を揺する手を止めず、

「私が聞きたいのは！　なんでいきなり告白されるのかってこと！　ゲームの攻略法とか謝罪とかじゃないの！　ある意味攻略法だけど！　ある意味謝罪だけど！」

「……はっ？」

脳が理解不能という答えを打ち出した。

もはや残像が生まれる程の速度で揺さぶられているが、堅二はジェットコースター並の揺さぶりを気にしない程に、呆然としている。幼馴染の口から飛び出た台詞、それだけに気を取られていたからだ。

……告白う？　何をどうしたらそうなるんだ。

遂に幼馴染の頭もクラスメイト達のようにイかれてしまったかと思うが、相手は小さい頃から自分の周りで唯一の常識人だった少女。それが今日、突然何のキッカケも無しに頭パーになったということはあるまい。というより、あつて欲しくない。

だから堅二は考える。天川が勘違いした理由を。

考えて、浮ぶのは、真矢の「屋上で」という言葉。

あの言葉をよくよく普段の思考回路で考えてみると、

……まるで告白のために呼び出すような誤解招きまくりの言葉だ

漫画でよくありそうな展開と台詞だと、堅二は理解して納得する。恐らく、他のクラスメイト達もその所為で真矢の言葉に固まったのだらう。

取り敢えず、天川が勘違いしている理由も分かったため、堅二は軽く頷き、

口から出たのは、壊れた機械のような悲鳴だった。

……し、死ぬ！ 死んじまう！ 死因が『幼馴染に揺さぶられて死亡』とか、マジで笑えねえぞ！？

そんなのは勘弁と、堅二は揺さぶられる脳で考えるが、

79

の！？ どうして犯罪路線に行っちゃったの！？ 決め手は裸エプロン！？」

「まままままでででででででででででで！？」

揺さぶられ過ぎて言葉が言葉にならない。さながら超ハイパワーマッサージ機を使っているような状態だ。

一方で幼馴染は細い腕の何処にそんな力があるのか尋ねなくなる程、揺さぶって来ていて、その力は時間が経つ度に増しているようにさえ感じられる。

下手に喋れば舌を噛みそうな震動を受ける中、クラスメイトに助けを求めようと揺れる視界を必至に捉えて、

「いやあ、修羅場ですねえ」

「修羅場ですなあ。ボカア人生で始めてですよ、修羅場を見たのは」
「呑気に傍観してんじゃねえ——！」

わざとらしいクラスメイトへの怒りのパワーを軸に、天川の手を強引に振り払った。

「キャッ！？」という悲鳴を聞くも、すまないと思いつつ、揺さぶりの余波で痛む肩と首の筋肉に、しょうがないよなとも思う。

だけど一応謝ろうと、堅二はぐしゃぐしゃになった黒髪を掻きながら、

「悪い水葉大丈夫か？ そして頭は大丈夫か？ 落ち着いたか？」

「う、うん……。後半で謝罪が台無しになってるけど、一応……」

一度振り払われたことで頭が冷やされたのか、もう幼馴染の目には興奮した猛牛の如き光は無い。

それでこそ常識人代表だと、彼はうんうんと数度頷き、

「別にアイツに呼び出されたのは告白とかじゃないから、そんなに興奮しなくて大丈夫だ」

「そっ、なの？」

不安そうに尋ねてくる天川に、もう一度頷いて、

「何でも生徒会やら委員会やらが関わることだから、ちょっと手伝えみたいなこと言われてな。今日の昼暇だったし、行くだけ行こうかって思っ」

「あつ、そんな話してたんだ……。何か後ろで喋ってる気がしたけど、前で神原君がカツコつけて三回転半捻り正座とかやってから、よく聞き取れなかったんだけど」

「あのアホが……」

前の席に座る幼馴染が、自分と真矢の会話を聞いて無かったのはそんな理由があったのか。

親指を立てて行ったアホが脳裏に浮かび、後で窓から突き落とそうとため息をついて、

「そんな訳でアホとクロと月夜も行くし、告白なんてのはあり得ないからな」

「神原君や千春も？」

「らしい。だからまつ、心配すんなって。第一相手はガキだぞ？
どうこうなる筈がねえよ」

「……………」

返って来たのは、息を詰めるような無言だった。

はて？ と、何か不味いことを言ってしまったかと思いつながら幼馴染の顔を見ると、彼女はどうか心底複雑そうな表情をしている。

感情を抑えるような、疑問を抑えるような、そんな顔だ。

……というより、何で告白って勘違いであそこまで暴走したり、心配したりするんだか。

天川は子供好きで、例え飛び級生といえどそれは変わりないと思っ
ていたのだが。真矢と何かあったのだろうか。

けどまっいいか、と彼は結論を出しながら言葉を継ぎ足す。

「まあプロフィールを完璧に調べられてるくらいだから、それぐら
い俺に用事があるんだろうさ。そんな努力の方向が百八十度間違っ
てるガキの話聞くぐらい、構わないだろ？」

「……だから心配なのに」

「……？ よく意味が分からんが、そろそろ俺行くぞ」

カバンを持つ此方に、幼馴染は了承の頷きをして、

「うん……。でも気よつけてね？ この時期に生徒会と委員会に関
わる事柄なんて、ロクな事思いつかないし」

「そっいえばお前体育委員になっただったけ？ だからそんなに
心配してくれてんのか」

「昔からでしょ、堅二が私を心配させるのは」

それもそうか、と堅二は気まずそうに顔を背ける。

昔からこの幼馴染には自分の行動で心配をかけてばかりで、悪い
事をしていると思う。

自分が無茶をしたり馬鹿をやると何時も本気で怒って、心配して、
時には不安から泣く。そんな優しい少女だ。

第二の母親のように此方の身を案じる幼馴染を、堅二は有難いと
苦笑しながら感じて、

「あの転入直後にぶちかましてくれたガキだ。もう何があっても驚かないだろうよ。じゃ」

「んっ、行ってらっしゃい」

短い言葉で切って、背中を彼女に向けた。

彼女からの言葉を背中に受けつつ、堅二は屋上へと向かうために歩き出す。

上履きが歩く度に踏みしめの音を上げ、自分の身体は自分が思う通りに動き出した。

……何を言われるかどうかは分かんねえが、プロフィール列举に比べればマシだろきっと。

あの探偵でも使ったのかと言いたくなる情報の羅列に比べれば、これからの話は恐らく驚愕の度合いは少ないだろう。

だから、大丈夫だ。何も心配することも、不安になることも無い。どんなことだろうとどんと来い。

「転入生に後でインタビューしたいって言つといてー」というクラスメイトの声に手を振って答えつつ、堅二は自信を持って廊下に出た。行き先は、友人達も向かった、待ち人が居る屋上。

彼の足取りに、迷いや怯え、不安は、無い。

「どんな事だろうと、今の俺を驚かせれると思うなよガキ……！」

■

「簡単に言つとね、——生徒会を乗っ取ろつと思つのよ」
「……はい？」

どうやら今すぐ、高城堅二は発言を撤回する必要があるそうだった。

第二章・指針の定め

巨大であれば巨大である程
至る距離が遠ければ遠い程
その身を躊躇する物は何か

福岡県に、空峰市という市がある。

福岡県の県庁所在地は福岡市だが、空峰市は福岡市よりも人口も企業も多く、福岡市どころか八の県からなる九州地方で一番栄えているといっても良い程の市だ。

理由は単純で、この市には九州地方魔法生徒育成国立高等学校が存在する。ただ、それだけが原因だ。

終戦から二十年后に一つずつ建てられた、魔法生徒育成国立高等学校。十五歳以下は戦闘系魔法を学べないという日本の法律上生まれた、日本で唯一数学などと同じ『学業として』魔法を学べる学校。福岡県に空峰学園、愛知県に森峰学園、宮城県に川峰学園、大阪府に地峰学園、広島県に山峰学園、香川県に海峰学園、そして東京都に天峰学園と日本で七つしか無いこの学園は、基本的に各地方ごと一つずつ代表するように建てられている（例外は北海道・東北地方で、北海道は東北地方として扱われている。尚、現在では北海道に八つ目の学園を建てようとする動きもある）。

そして基本的に入学試験を受ける事が出来るのは、自分が住む地方の学園だけだ。例えば長崎県に住んでいる者が魔法を学びたいと思えば試験を受けようとしたら、九州地方に長崎県は該当するので、空峰学園入学用の試験しか受ける事が出来ない。関東地方の天峰学園に行く試験を受ける事が出来ないという事だ。

そのため、七つの学園の中で最大の規模を持つと言われる天峰学園に入学しようと、試験期間の間だけ関東地方に引っ越す、などという者も居る。基本的には試験に受ける間だけでもその地方に住になればいいので、短期間泊りがけで試験を受ける者も多いようだ。

そんな制度がある所為か、各学園は自分の所に将来有望な魔法生徒を入学させようと、躍起になっている。

魔法機が発達した今の平和な世の中、魔法を自ら真剣に学ぼうとする者は減って来ている。特に魔法生徒育成国立高等学校に入学した者はほぼ百パーセント魔法関係の仕事につき、大半が戦闘系魔法を使える事が前提の、危険な物が多いからだ。スポーツ用の魔法機操作方法や、必要最低限の防壁系の魔法は、普通の学校や魔力車研修などで学べるのも原因の一つだろう。

とにかく、将来国の力となる優秀な魔法生徒を生み出すためという理由や、この国が公的な外交武力を持たないためなどの理由から、学園に入学した一学年約九千人、三学年合計二万七千人にはそれなりの権利が与えられる。

それが、高い才能が国から認められることで得られる『特別生』の資格とはまた違う、一年に約三万人が受ける試験に合格した者達が無償で受け取れる、最大の入学メリット。

「——そのメリットたる権利の通称名称が『魔法生権利』。私達がこれから使おうとしている物の名前よ」

「……話が見えて来ないぞガキ。それがどう転じたら『生徒会を乗っ取る』なんて狂った結論になるんだよ」

「アンタがこの学園に対して基本的な知識を知らないからわざわざ説明してるんでしょーが！」

甲高い声と共に小さな手が宙に浮く半透明の画面に叩きつけられ、一気に砕け散った。

魔力で象る術式と同じ方法、宙に魔力で作り出した画面の残骸が、輝きながら砂煙のように消えて行く。

場所は屋上。一学年ごとに校舎が存在する空峰学園の、一年生用校舎200クラスから230クラスが利用する第三棟の屋上だ。

基本的に屋上には緊急用の給水タンクと、厳重なロックと封印が

かけられた魔力水タンクがあるだけであり、他にあるのは点々と離れて存在するベンチと、錆びて茶色の部分が多い転落防止用のフェンスだけという広いだけの屋上。

四月ということもあり、校舎の周りに植えられた桜からピンクの花びらが風に乘って空を舞っている。

昼時で意外と風が強いためか、屋上には五つの人影だけがあった。その内の一つ、黒髪で表情から察するに不機嫌ゲーがMAXになっただけいそうな少年が、カバンの中から取り出したコンビ二弁当を片手に、

「それは分かるが……、屋上に来た直後に私の目的は生徒会乗っ取りですなんて頭おかしい発言されて、説明されたのがこの学園が国にとつてどれだけ重要なのかなんて話だったら結論見えずに苛つくのは仕方ないだろ」

「直後じゃないわよ。『遅かったじゃない。昼寝でもしてたの?』」

『先に結論だけ言うわね』って先に言っただわ」

「充分直後と言っただいい気がするんだが……。そして俺の台詞の後半部分は無視かオイ」

堂々と無い胸を張る茶髪と緑眼の少女、真矢の姿に、黒髪の少年、堅二は不機嫌そうなため息をつく。

屋上の床に弁当のビニール袋を敷き、その上に座り込みながら黒い瞳を正面の真矢から右へと移した。

右にはただっ広い屋上に設置された木製ベンチの一つがあり、其処に大柄な少年と艶やかな赤髪の少女が座っている。

少女は女性にしては身長が高く、ブレザーの上から見た肉付きだけでも健康そうで、胸も大きく美少女と言うより美女と言ったべき大人な感じがするが、隣に座る身長百九十以上の巨体の所為で相対的に小さく見えてしまう。

二人は膝の上に、全く同じオカズの――だが少年の方が少女のよ

りも五倍程大きい——手作り弁当を開けながら、

「要は自衛隊とか警察とか『国を守る』ための武力しか持てない日本にとつて、教育つていう点で勝っているのを利用して『こっちは国を守る以上の立派な予備戦力が居るぞ』つて武力的に他国に対して圧力をかけたり実際に運用するために、学園の生徒にはただ魔法が使えるだけの高校生に似合わない程の権限を与えてるつて事だろ？ よく覚えてるぜ」

「うんうん、千羽君大正解だよ。でも不思議だね？ どうしてそんなに詳しく覚えてるのー？ 中学の時歴史の授業で『織田信長が編み出した、画期的な単発射撃魔法運用の仕方を答えなさい：正解・火縄三連銃方式』だったのに『妄想燃烧射撃方式』とかいう、一体その時何を考えてたのか丸わかりな解答してたのにー」

「勉強は嫌いだが、親父が学園の事ぐらい勉強しとけてるさくてなあ……。さもなければ teme の写真を合成してパンツ一丁にした後、ネットのホモ板にメールアドレスと共にアップしてやるつて脅されたら、幾らオレでも真面目にやるぜ」

「わー……。何だか見てみたい気もするけど、千羽君が新たな世界に飛び込みそうだからされなくてよかったー」

おっとり、という印象の間延び口調で言う少女、月夜の言葉に、サンキューなど言つて彼女の赤髪を力強く撫でる少年、神原。

二人の新婚ラブラブとでも言いたげな、ピンク色の空気でも漂つてきそうな雰囲気にながら思わず堅二は身を引きそうになる。

……。なんでこのアホに、こんな美人で性格もいい彼女が出来るかなあ。

神原の隣で丸っこい緑の瞳で笑う月夜千春という少女は、何処で

運命の齒車が狂ってしまったのか知らないが、今もベンチに座って馬鹿笑いしているアホの彼女なのだ。しかも聞くところによると、彼女は神原の家に住み込んでまで居るらしい。

付き合っていると聞いたり月夜から相談を受けたりしてから、もう三年ぐらいになるが、今だに堅二は容姿端麗才色兼備の彼女が神原に何か違法な幻惑系魔法が強力な薬物を使われたのでは無いかと疑っているくらいだ。

…… お似合いっていったらお似合いかもしれねえけど。

神原と側に居る月夜を見ると、よく分かる。

彼女はきつと自分の力で誰かに尽くすタイプの人間だ。そう思うと、口では絶対に言わないが他人を受け入れる事に関して異常な許容力を見せる神原なら、月夜の存在を正しく受け入れられるだろう。だから、二人が付き合っていたり、何時結婚しようか？ などという桃色トークを繰り出すのは構わない。
が、

…… 甘っ！ クソっ、何も摂取して無いのに舌が甘さを感じるぞ！？

近くに自分が居て、弁当を食う時にそういう恋愛オーラを出すのは止めて欲しい。

じりじりと距離を取りつつ、『私（僕）今幸せです！』笑顔でお互いを見つめ合う二人から目を外す。

黒の瞳が捉える姿は、屋上に居る最後の一人。

「……………」

彼はベンチ側のフェンスに寄りかかって、無言のまま口に『頑張

って早く吸えば1秒メシ』という、栄養ゼリーが入ったパックを咥えている。パックが段々小さくなっていつていることから、マイペースに栄養を取っているらしい。

ただ、その動きに音は無く、また寄りかかるフェンスからも一切の音が鳴らない。彼の身体を支えるフェンスは、軋みの一つも見せてはいない。

魔法ではなく、己の技術のみで地味超人っぷりを見せつける長い黒髪の少年、斉藤はベンチの二人に対して我関せずを貫いている。

無論、此方の助けを求める視線に対しても、だ。

「……………」

「…………クロ、お前何かこういう時ぐらい喋れよ」
「……………」

無言のまま親友に顔を明後日の方向へ向けて無視されたため、堅二の瞳は最初の人物へと視線を移動させた。

彼女、真矢は堅二と似たような、しかし困惑気味の表情を浮かべており、

「これがKATPURUのみが放てるっていう、ハートオーラっていう奴……？ 想像以上に分けの分からない空気ね……」

「何戦慄してんだお前は。いいからとっとと説明してくれ、この二人は背景とでも思ってる」

「聞き捨てならねえな堅二！ テメエはこの男の夢の結晶が背景なんていうモンになるとでも——、あっ、千春、俺が悪かった！ だから髪を引っ張るのはご勘弁を——！？」

月夜の胸元にある夢の結晶を揉んだアホがアイアンクローを掛けられているのは、視界に入らないようにした。

嫉妬深く半常識人な彼女の怒りを買ったアホのお陰で、桃色空気

は掻き消えており、見ると真矢が屋上に座り込んでいて、膝を立てている。立ちっぱなしでは疲れるらしい。

しかしふと、少女の座る掃除などされていない屋上の床を見て、

「ケツが汚れるぞ」

「形成系の魔法をシートみたいに薄く敷いてるから大丈夫よ。それに汚れても制服は替えがあるし」

「オイオイ……。確か校舎内は原則として魔法は使用禁止だろーが」

「『校舎内』はね。ここは屋上と言う名の外。校舎外よ」

「……屁理屈だな」

「実際に、校庭とか訓練場で魔法使用は禁止されてないでしょ。それと一緒に」

……真面目だが、屁理屈は捏ねるタイプか。政治家とかに向いてそうだな。

自分の中で彼女にそんなイメージを抱く内に、堅二の目の前で真矢は笑顔に青筋立てながらアイアンクローかます月夜と軋むような悲鳴を上げてる神原を適当に見やりながら、傍のカバンを手探りで漁っている。

やがて目的の物を見つけたのか、彼女の白い手に引っ張り出されたのは、細長いリサイクルプラスチック製の包装に包まれた物体。

見覚えがある。確か中身はスティックのような、

「栄養食品？ その歳でそんなもん食ってたら体壊すぞ」

「しょうがないじゃない。今日、朝寝坊して時間が無かったんだから」

「寝坊？」

堅二の質問に、真矢は何故か不機嫌そうにして答えない。

代わりとばかりに彼女はブロックタイプ栄養食品の包装先端部分を剥ぎ取り、素早く口で噛み砕く。

屋上に食事の音が追加された。

クッキーを噛むのとはぼ同じ音を立てながら、彼女は栄養食品の包装にも書かれた『サラダアイス味』に顔をしかめつつ、

「其処でアイアンクローカマされてるアホの言う通り、自主性や社会性を養うとか言いつつ、学生の権限が強い本当の理由は国が学園を利用して他国に干渉したり、公に出来ない事件を解決させたりするためよ。国が私達を利用するにしても、その私達自身がある程度の権限を持つてなきゃ意味が無いからね。……ここまではいい？」

「ああ。——オイ神原良かったじゃねえか。アホの名が定着しつつあつて」

「ふざけんなよ馬鹿良かったのはそつちかよ！？ 大体オレにや神原千羽つつー名前があだだだだだだだだつ！？」

「千羽君、駄目だよー。今は私と話してる最中でしょー？ オハナシは人の顔を見てしなきゃいけないんだよー……？」

「おごごごごごご——！？」

「……なんだか、神原千羽の首が限界稼働域を超えてる気がするんだけど」

「気にするな。何時ものことだ」
「……………」

コクリと、斉藤がゼリーのパックから口を離しながら同意の頷きをしていた。

真矢は、人体の神秘を見るような目を首から上だけを掴まれ強引に回されている神原に向けていたが、斉藤と堅二の態度にそういう物なのかと思ひ直したらしく、己の手元へと視線を落とす。

堅二も今にも首の骨が外れそうなアホと、自分の恋人に痛いオシオキをしている友人を見ずに、

「でもそんな風な権限を学生達に持たせて世間的に大丈夫なのか？ いや、今まで学園に入学してもそういうことを知らなかった俺の言えることじゃねえかもしれねえが」

「勘違いしてるっばいけど、学生達全員にそんな国家干渉クラスの莫大な権利がある訳じゃないわよ？ 自主性と社会性を養うためっていう表向きの理由があるのと、学園について新聞とかパラ見するようなレベルじゃなく、それなりに調べなくちゃ分からないことだけど、ね」

真矢はあっさりと食べ終えた栄養食品の残りカスを手から払いつつ、

「アンタも聞いたこと無い？ 学園の生徒達が外国の災害救助として派遣された、とか。学生がテロに巻き込まれて死亡した、とか。国会に学生達が参考人として参加した、とか。一般の八割近い人達はそういうのを『魔法を使える超人に経験を積ませたり、災害時に使うためだろうな』って考えてるけど、実際は国にもある程度反対出来るのよね、ある一部の生徒達は」

「……ようやく生徒会に關係しそうな話になって来たな。『反対権限』か」

随分前振りが長かったな、と堅二は思い手を動かす。

……学園の運営が殆ど生徒会とかに任されてる、ってことしか知らなかった俺って、かなり無知だったんだなあオイ。

生徒会などの名称は死にたくなる程聞いて来たが、実際にその名称がどんな力と名誉と役割を持つのかは分かっていたいなかった。魔法生徒育成国立高等学校学生達の権利とやらも、だ。

それだけでも話を聞く価値はあるだろうと、『ソーラン弁当』会社製でラーメンの味を丼タイプの弁当で再現したと評判な『みそ豚骨弁当』の蓋を開けつつ、彼は耳を傾ける。

「先に一般学生達自身が持つてる権利だけど、生徒会や委員会と違つて対した権利は持つてないわ。あくまでも生徒は生徒として、普通の高校生として扱われてるのが大半ね。それでも、戦闘系魔法が使える以上それなりの権利は与えられてるけど」

彼女の小さな手が何も無い宙にかざされ、その指の先に仄かな光が灯った。

魔力を精神で従えることにより生まれる、魔力光だ。色は濃い目の青で、昼間の今でも良く見える。

最初はビー玉程度のその光は、真矢のもう片手が指揮棒のように振られることに反応し、一気に音無く広がった。

大きくなるのではなく、あくまでも広がる。横に、全体的に長方形の形になるように、だ。

光は真矢の精神に指示された形通りに宙に広がって行き、堅二達に対して文字を作り出す。

堅二が見たそれは、箇条書きで、字は真矢とは反対側から見る此方がちゃんと文字として見えるように、鏡文字で浮かんでいた。

自分からはちゃんとした文字に見える半透明な画面の文字を、堅二は一つ一つ確認する。

【魔法生徒育成国立高等学校所属学生が持つ魔法生徒権利・『五大権利』】

- 一：訓練及び自己防衛において魔法を行使する権利。
- 二：自分にあつた資格や仕事を獲得する権利。
- 三：生徒会及び委員会に所属する権利。

四：生徒会及び委員会からの決定に対し反対する権利。

五：魔法生徒育成国立高等学校を辞める権利。

【上記の権利は学園在学中において、あらゆる国家及び勢力の干渉を受けても剥奪されることはない】

「一般学生が持つてる権利の中で一番大きいのはこの五つね。魔法行使とか事件事故、国家問題とかに関するもつと細かいのになると呆れるくらいあるけど、とりあえずこれだけは覚えておきなさい」

真矢の言葉を聞きつつ、堅二は思考しながらも割り箸を割る。

木製の物が割れる乾いた音を聞き、綺麗に真つ二つに分かれた箸を見て、

……『特別生』の資格権利と違って、正当防衛じゃなくて自己防衛なのか。

自分が持つ『特別生』の資格でも『訓練及び正当防衛において魔法の行使を許可する』という物があるが、学生達が持つのは自己防衛、つまりは自分に攻撃された後では無く、攻撃されるだろうと感じたら魔法を使用して構わないということだ。

ちなみにここで言う魔法というのはあくまでも戦闘系魔法のことを指し、尚且つ『他人に危害を加えるもしくは加えた』魔法のことを言うため、真矢が現在日常において普通の魔法を行使しているのは褒められたことではないが、厳密には違反ではない。

だから真矢も、遠慮無く魔力が込められた右の指を振り、

「そして、一般学生の権限自体は、学園内に置いて低いわ。勿論、生徒会や委員会の決定に反対出来る権利はあるけど、それでも教師や国に逆らう事は出来ない。だから、あくまでも学園に置いて教師

や国に対する『反対権限』を持っていたり、学園の殆どを運営しているのは」

「その一般学生に選ばれた生徒会及び委員会……、確か生徒会の正式名称は『生徒統括委員会』だっけか？」

「正解よ」

答えに対し、真矢が返して来たのは齒を剥く笑顔。

男がやれば野獣のような、と形容が付きそうなそれは、彼女がやるとませた子供のような笑顔になる。

彼女はその笑顔のまま、宙に浮かぶ画面を手で横薙ぎに撫でた。

直後、画面に浮かぶ文字が変わる。

色は変わらず、しかし文字だけは変わり、そこには、

「生徒会説明……？」

「さっきの授業中、術式構成の片手間に書き上げた物よ。斉藤も、その奇怪なオブジェを作り上げようとしてる二人も、こっち見て確認して。無いとは思っけど、内容が間違ってる可能性もあるから」
「オブジェ作る、ってかオレがオブジェになりかけてんだが……」

首をしきりにさすっているアホは、全員が無視した。

そのアホも含めて、全員の目が宙の画面へと向かう。

書かれているのは堅二が呟いた通りの題と、その内容。

【生徒会説明】

生徒会とは、学園において各六つの委員会の上に位置し、最上級の権限を持つ学生組織である。

運営においてはそれぞれの役割を持つ委員会が存在するため、生徒会が担当するのは予算や仕事、学園の基本方針などの制定。

生徒の中で一際ずば抜けた力を持つ者としての、事件事故問題に

おける武力行使、及びその権限。

そして他学園や、他国などとの交流交渉の学園代表役。

言わば、あらゆる活動の原点部分の役割。学園をほぼ強制的に動かす『統括権限』も、非常時のみ行使する権限を持っている。

学園運営には年中幾度も委員会を交えた運営会議があるが、それ等運営会議において最も強い権限を持つ。

生徒会は五役の合計五名、もしくは各役員の補佐最大五名、最大で合計十名の小規模組織である。

委員会には直接の部下となる委員が何名も在籍しているが、生徒会は最大の権限を持っている統括組織としてそれが無い。

役員は九月から四月までの立候補で決まり、立候補者多数の場合は一般学生からの投票で決まる。尚、その際に立候補者同士の選挙戦を行う物とする。

補佐は生徒会役員の任命のみで決まる。尚、役員が居ない状況では、補佐がその役員と同等の権限を持つ。

五役と主な役割は以下である。

会長：生徒会での最大権限持ちで役員の纏め役。生徒会長の宣言のみによって、生徒会は『反対権限』を行使出来る。

副会長：会長の補佐、及び交渉役。会長に次ぐ権限を持っているが『反対権限』を行使することは出来ない。

書記：記録、及び国や教師に対する報告書などの管理作成役。権限は高く、大規模戦闘下において命令を下せる。

会計：予算、及び金銭関係全般の管理制定役。学園運営において必要不可欠な予算管理の役割を持つ。

庶務：雑用、及び他役員の補助役。特に決まった役目を持たず、他役員の補助や治安維持が主な仕事。

生徒会各役員の権限は各委員長・副委員長クラスであり、状況次第では教師よりも大きな権限を持つ。

役員を選出する際最も重視されるのは実力、続いて人柄、役割に対する適性である。

「と、まあこんなところね。権限の優先順位に関してはまた無駄に細かいし、委員会の役目も説明しなきゃならないからすつ飛ばすわ」「飛ばすってことは、それ等の情報は必要無いってことか?」「少なくとも今はね。今大事なのは、生徒会についての知識よ」

ふーんと、画面を見ながら適当に返事をする堅二。

尋ねておきながらその気の籠って無い返事は何だという真矢のジトツとした瞳が画面越しに見えたが、堅二はそれを見なかった事にした。

少なくとも今は、内容を理解するのに意識を集中したい。

……ようは、生徒会は学園の中心、生徒達の中で唯一国に逆らえる重要組織ってことか。学生だけの組織とは到底思えないな……。

生徒会がどんな物か、大体理解出来たと堅二は思う。

恐らくはもつと細かく、顧問の教師や委員会とやらの兼ね合い、一般学生からの反対に対する決まり、更には反対権限の行使方法などあるに違いない。

だが、真矢が作った画面の内容によって、知らなければいけない最低限のことは分かった。

そして尚且つ、真矢がここまでの内容のみが必要と言っているのならば、

……コイツが『生徒会を乗っ取る』って言った言葉に繋がる内容が、長い説明の中に存在するって訳だ。

味噌と豚骨の脂っこいコラボレーションを生み出している何とも
言えない焼肉を、白米と共に口に放り込みながら推測し終えた。
さっさと喰ってしまつて、真矢に問いかけをしようと普段の三倍
速で掻き込んでいると、

「えーと、真矢ちゃん。質問いーいー？」

「いいけど……、真矢ちゃんは止めてくれない？ 流石にこの年にな
るとそうゆうのは馬鹿にされてる気が……」

「うん、分かった。多旗ちゃん、質問いいかなー？」

「いや、名じゃなくて姓で呼べとかそういう事じゃないんだけど……」

お前も自分の実年齢踏まえて発言しろよ、と苦い表情の大人びた
少女に言いたくなつたが、先に食事の方が重要なので口は肉と米を
噛むのに忙しく、発言は不可能だ。

ふと視線を動かすと、何処か天然気味の言葉を言う質問者、月夜
の隣では神原が此方に張り合うように弁当へとがつついている。

折角の手作り弁当なんだからもっと味わえよ、と堅二は呆れ、無
言が常の斉藤でさえ呆れたように首を振りながら、

「……月夜が報われない」

「ふもごつ、もぐつがぐつ、むぐ？」

「何言ってるのか分からねえよアホ」

「……………ふっ」

口へと弁当を掻き込む箸を一瞬止めた神原は、ただニンマリと明
らかに彼女を持つ者のみが見せる勝ち組の表情で笑つて、食事へと
戻る。

何となくその笑顔がとてとてもイラつく堅二は、青筋を立てつ
つも箸を投げつきたい衝動を必死で押さえた。

斉藤は変わらない神原の食事風景に何を言っても変わらないと思
ったか、ため息ついて腕を組んで目を閉じ、フェンスに音無く寄り
かかっている。

「で、真矢ちゃん。聞きたいのはね、真矢ちゃんの目的についてな
んだけどー」

「……もう、いいわ……」

そんな男のやり取りをしていると、もはや『真矢ちゃん』と呼ば
れる事に抵抗を諦めたのか、酷く疲れたような真矢の顔と対照的に
光でも出そうなニコニコ顔の月夜の会話が続けていた。

月夜は己の赤髪を、軽く払いながら、

「私の勘違いだったら悪いんだけど、もしかして真矢ちゃんの目的
って生徒会に『私達』で立候補するってことー？」

「ん？ 多旗はさっき『乗っ取る』って言ってたぞ？ 立候補がど
うして乗っ取るって事になるんだ？」

恋人の発言に疑問を持ったか、食事の手をピタリと止めた神原が、
口の周りに米粒を付着させた状態で首を傾げる。

間抜けにしか見えない恋人の顔に苦笑しつつ、月夜は指で頬につ
いた米粒を取ってあげながら、

「乗っ取るって言葉の意味は取り方によって様々だけどさ、ようは
誰かが所有したりコントロールしている何らかの組織を、自分達の
支配下に置く事を言うよねー？ だから真矢ちゃんが言いたいのは

……」

「あー、……つまりあれか。オレ達五人で生徒会に立候補して、現
在の生徒会を乗っ取っちゃうってことか。どおりでオレ等五人な訳
だぜ」

「そう。生徒会の役員は五役。故に、アタシ達五人で生徒会選挙に立候補して、そして全員で勝って私達だけの生徒会になる。それが、アタシの目的よ」

「オイ、ちよつと待った」

ここで堅二も箸を置き、口元を拭いながらストップをかけた。膝の上に乗った井の中は、既に食べ終え空っぽだ。

何？ と促して来る真矢に、堅二は納得行かないという曇った顔で、

「一年生徒会とかのメンバーは、半年前の九月辺りにもう全員決まっちまってんじゃねえのか？ 確か、投票ももうあった筈だ。だとしたら、今更俺達が立候補したところで乗っ取りなんて――」

「……可能だ」

意外な事に、返答をよこしたのは真矢では無かった。

返答をよこしたのは、目を閉じたままの斉藤。その藍色ブレザー制服の背中はフェンスから剥がされており、彼は黙ったまま指で指す。

指したのは、真矢が持つ画面。

彼は目を閉じているというのに、まるで読み上げるような調子で、

「……『役員は九月から四月までの立候補で決まり、立候補者多数の場合は一般学生からの投票で決まる。尚、その際に立候補者同士の選挙戦を行う物とする』……。……今日の日付は四月七日。……四月まで、で五月になるまでの間ならば、一般学生の『生徒会及び委員会に所属する権利』がある限り、立候補が可能だ」

「……？ でも、確かに投票はあったよな？」

どういう事だ、と堅二は思う。

選挙など自分は全く興味が無かったのでスルーしていたが、選挙投票などがあつたのは覚えている。

演説のような物もあつた気がするし、選挙用紙も受け取つた記憶がある。白紙のまま投票したため、無効票となつただろうということもだ。

その疑問に答えるのは斉藤では無く、ベンチで神原の食べ終えた弁当を片付けている月夜で、

「覚えてないかな堅二君！。今年は去年の先輩達と違って『生徒会立候補者一名だけ』とか言う不作じゃなかったけど、それでも今年は各役員ごとに一名づつしか立候補しなくて、投票はただの信任投票だつたんだよ。だから」

言葉を切つて、彼女はぼやんとした笑みで、

「私達が生徒会を乗っ取るつてのは『理屈上』では可能だよー」
「理屈上じゃあ、か……」

……なるほど。

本日数回目になる納得を得つつ、堅二は顎に手を当てて思考する。理屈上は確かに、自分達が生徒会に立候補してしまえば信任投票でしか無かつた投票はやり直しになるだろうし、うまく行けば『今頃生徒会に立候補した奴ら』として、対等以上の立場で選挙に行けるかもしれない。

そう、考えていると、アホが弁当の片付けを月夜に任せつつ、ふと思つたとばかりに言つた。

「つていうか、去年生徒会立候補者が一名つてどんな状況だったんだよ……。もうちょい『俺が学園のトップになってやるぜ！』とか

言う馬鹿は居なかったのか？」

「……仕方がない。……一昨年が一昨年だったから、比べられたい無いるが多いといつても不思議では無い」

「そつだねえー。大体、魔法生徒育成国立高等学校に通つてゐる時点で、テロの対象になつたり身に降り掛かる火の粉が増えたりで怪我したり死ぬ危険性が高いのに、生徒会に入つたら倍増どころか測定不能領域にまで至りそつだしー」

「去年の不作は別に自己主張の弱い人間ばかりだったから、という訳では無いわ。一昨年、世界最強の魔法使いが入学して生徒会会長になつてたからよ。普通の人間なら、あれと比べられそつで生徒会なんかなりたくないでしょうね。今年は、去年に比べると幾分増しよ」

真矢が相槌を打つように、すぐさま答える。恐らく、事前に調べていたのだろう。

その声に、神原は怪訝な表情をして、

「世界最強の、魔法使いい？ 何だよそれ？ 新手のお調子者系馬鹿か？」

「……日本魔法生徒交流大会、全世界魔法生徒交流大会、世界魔法個人戦大会、あらゆる戦闘系魔法使いの大会で優勝し、起こつた事件の悉くを己の力で叩き潰し……。……戦闘ランクA+の資格を十五歳にして手に入れた天才魔法使いだ」

「実際に世界最強！ とか認定された訳じゃないし、戦闘ランクA+って人は他にも居るけど……。ダントツの実力だからねー。自然と世界最強って誰もが認めてゐるの」

「有名よ？ 日本の最強兵器、来年からは日本の対外交戦力の一つになるだろつて言われて、一時期ニュースにも取り上げられた筈だけど。ほら、夕方ニュース番組『リアル・カンニング』とかで」

「……、ああ！ 思い出した思い出した！ そついや一回、大会か

なんかで見たことあるな！ あの軽く人間止めてる先輩のことか！」

其処で神原は、思い出しのジェスチャーである手を打ったまま、何かを思い出すように宙を眺めた。

彼の血が固まったような目の焦点が、自信なさげにぐらつき、

「えーと、確か名前が……、あ——」

何かを言おうとして、止まった。

その停止の仕方は突然という言葉が似合う、中途半端な物で、『あ』の発音を言いかけた証拠の大きく開けられた口が、閉じられずに停止している。かといって、そこから声が出る訳でも無い。

普段は陽気で快活な神原の表情は、完全に「しまった」とでも言いたげな表情になっていて、それは感情が顔に出にくい斉藤も、感情を誤魔化すのが得意な月夜も一緒だった。今、自分達が言おうとしていたことがマズイことだと、瞬時に気がついたかのような表情への移り変わり。

気まずそうな、何かを失敗したような、触れてはいけない物に触れてしまったような、そんな表情から生まれる、重い沈黙。

黙りこくった彼等。しかし、

「……で、さつきからアンタは何を考えてるのかしら？ 予想としては『生徒会になるのは理屈上可能ではある、が』って感じじゃない？」

多旗真矢だけが、沈黙を気にしなかった。

彼女は宙に浮かぶ画面を右手を振って削除しつつ、左手にカバンの中から栄養食品を取り出させている。

ざつくばらんなその態度には、此方への気づかいなど欠片も感じられない。

が、

……ありがたい。

声に出さず、堅二は何故かそう思っ、口を動かす。

「理屈上は確かに乗っ取れるが、かといって俺達が一体どうやって既に暫定とはいえ決まっちゃっている生徒会に選挙で勝つんだ？相当不利なのは変わりないぞ？」

「そう言っちゃ事は、乗り気なのね？」

「乗り気かどうかはともかく、実際の勝負方法とか計画とか聞かないと判断出来ねえだろ」

堅二の返答に対し、暫し無言になる真矢。

恐らく彼女の脳内では、堅二がどれだけ乗り気で、どれだけの情報を与えて、どんな事を言えば自分の望む方向に誘導出来るのか、計算されているのだろう。カバンから抜き取ったブロック状栄養食品『カロリーブレイカー』の包装にも、彼女は手をかけていない。

そして、現実時間にして僅か数秒程度の間が空いてから、再度、高い少女の声が響く。

「……生徒会は、まだ本格的な活動という物をしていないわ。つまりは、実績がゼロ。マイナスな評価は無いけれど、プラスの評価も殆ど無い。完全真つさらな、白紙にも近い状態よ」

「だから？俺達が立候補したら、俺達には『また投票することになった、面倒くせえ』っていう生徒達のマイナスな評価を持たれると思うが」

「マイナスな評価っていうより、イメージよそれは。そしてイメージは、言葉と行動、そして結果で変えられる。そして言葉はともかく、行動と結果で今回はイメージを一気に変えることが出来るわ。」

何せイメージっていうのは、人がその人や団体に抱く第一印象が殆どで、第一印象は第二印象第三印象に触れて変わっていく物だから」「じゃあ聞くけどよ、その行動と結果ってのは何だ？ 言葉は、この場合は演説だろう？ それじゃないってことは、行動に何を、そしてどういう結果を持ってして選挙に勝利するつもりなんだ？」

言いながら、堅二は目の前で口を開く真矢の姿に、苦笑が浮かぶ。他にも黙ったままの神原、斉藤、月夜、が居るのだが、彼女はまるで自分と此方だけしか居ないような喋り方をしていると。

これはまるで、

……交渉、だな。少しばかり違うが。

説明では無い。

話し合いでも無い。

相手に己の知っている内容を話し、心や感情、思考や思案を動かさせて自分の利益を掴み取る交渉。そして、此方にも相応の利益を与えるのが、交渉だ。

向こうの目的は何故なのかは知らないが、自分にこの生徒会乗っ取り計画の一端を担わせる事にある。

理由は分からない。だが、堅二としては別に生徒会に入るぐらいどうということはない。

別に生徒会自体に悪印象は無いし、部活にだって入って無いのだから困ることもなく、そして別に命の危険があることぐらい、魔法を学び始めたその時から覚悟している。学園で目立つのも今更だし、面倒そうな仕事があるというのも、将来の為を思えば軽い物だ。暇な高校生活を送るくらいなら、生徒会に入って仕事でもした方がマシだ。

だから、問題があるとしたら、

……コイツに後二つほど聞かなきゃならねえな。

そう思う内に、手に持つブロック状栄養食品の包装を剥ぎ取った真矢が、傍目からも分かる自信を持って声を飛ばして来た。

「それは簡単よ。つまり――」

それは、

「立候補者多数の場合に行われる『選挙戦』、それにこの場に居る全員で完勝する。それが、アタシの持つ計画であり計算よ」

■

ここが、少年を生徒会への立候補に進ませるターニングポイントだと、多旗真矢は理解する。

彼、高城堅二の行動は感情任せに見えてその実、その感情が関わらない所ではかなり冷静に物事を判断していることを、真矢は事前の調査によって分かっていた。

彼の親友からの情報だ。まず間違いは無いし、そして今彼を目の前にして見ると調査内容が合っている事は簡単に証明出来る。

よって真矢が抱く感情は、

……やっかい、ね。

この世で最も扱いやすい人間は、利益に飛びつき欲望のみで動く類の人間だ。目先の利益に後のことを考えず飛びつく馬鹿、遠い利益に対して慎重に相対する策士。どちらにせよ、そのタイプの人間は扱いやすいし利用しやすいし、裏切られやすく尚且つ切り捨てやすくもある。

だが彼はそんな人間では無いし、そんな人間を彼女は信用しようとは思わない。

「……計画と、理由は説明出来んのか？」

同じ屋上の床という高さに座る黒髪の少年から、質問が来た。膝を利用して頼杖つく彼の近くには、蓋を閉じられた空のコンビ二弁当が放置されている。

風に舞う桜の花びらに意識を多少やりつつ、一息。

何かマズイことでも起きたのか、今だに堅二以外の三人は沈黙を守っている。

好都合だ、と真矢は思った。

今は、横合いから言葉を飛ばして欲しくは無い。

彼に対しては、

……利益やメリットに目を向けさせようとするのでは無く、その計画がどれだけ勝算が高いのかを示す！

押して押しまくるのが一番だ。

相手は、この申し出に不可解を抱きつつも、興味が無い訳では無い。

生徒会というものに興味を示し、『入ってやってもいいかな』という、そういうレベルだ。

だからここでアピールすべきなのは、

「そうね……。まずは、計画の方から行きましょうか」

そう言つて、持っていた栄養食品を口に含む。

すぐ口内に広がった『にがり青じそ味』に顔をしかめてしまいな
がらも、空いた両手の五指を開いた。

「まず、行動についてだけ……、さっきの生徒会説明に出た通り、
立候補者多数の場合には『選挙戦』を行うことが出来るわ」

開いた五指から浮かぶのは、自分の頭の中で思い描いた通りの魔
力光による文章。

濃い目の青に象られたそれは、堅二のみに対して向ける。他の者
達には、見せる必要は無いだろう。どうやらそれどころでは無いよ
うだ。

画面の内容はあくまでも説明を補助する程度の物で、目立った効
果は無いだろうが、

……それでも、情報という名の裏付けと調査結果は、勝算の信憑
性を高める。

クッキーのような栄養食品を噛み砕き、飲み込みながら思う。

ただこう殴ったらダメージが通る、と簡素に教えるより、ここを
こうしてこう殴ると相手がこうなつてダメージが通る、とキチンと
説明された方が理解しやすいのは当たり前のことだ。

だから、そういった細かいことを知らずとも己の知識と勘だけで
納得するような相手以外では、自分がその答えに至った理由や情報
をなるべく提示すべきだ。

多過ぎると多過ぎるで相手が此方について来れなくなる可能性が
あるが、この程度ならば大丈夫だろう。

「『選挙戦』っていうのは『生徒会及び委員会における選挙活動の一環として、立候補者同士による対決』のことで、内容は魔法戦だけに関わらない。場合によっては演説、議論、学力、魔法実技とかの対決もあるわ」

あえて真矢は、画面に映る内容を己の口から相手に伝えた。

あくまでも画面に映るのは箇条書きの情報であり、簡単に纏めなければ話が進まない。

尚且つ、言葉に言うことで、相手の理解を深めることになる。

「本来なら、相手や教師陣との会議で対決方法が決められるんだけど……、アタシは魔法戦闘による選挙戦を提案して、そしてほぼ百パーセントそれが通る」

「根拠は？」

「生徒会がそういう組織だからよ」

一息つき、真矢は堅二が画面に書かれた選挙戦に関する内容を見ているのを確認して、

「生徒会は学園の顔であり、そして権限を一番強く持つが故に騒動に関わることが多い、というより関わらなくてはならない組織よ。だからこそ、生徒会役員においてまず何よりも優先されるのが本人の実力。わざわざ危険な仕事に立候補するだけの勇氣と正義心と覺悟も必要だけれど」

「実力が伴ってなければ意味が無い、っーことだろ」

「正解。だから、お互いにぶつかり合って強さを競う魔法戦が、一番選挙戦で使われているのよ」

「基本的に一般学生も、勝った方を選ぶのか？」

「そりゃあね。だって死ぬかもしれない仕事を、弱い奴にさせるの

は居ないでしょ」

堅二は、此方の言葉に軽く頷いた。
その動きは、

……此方の言葉に納得した、っていうことよね。

確証は無い。だが確信はある。

大体、言った事は単純だ。強い者が生徒会になるべきで、だからこそ魔法戦による選挙戦が実行出来ると、それだけの話だ。

そして流れて、勝った方がほぼ確実に投票においても勝つという、理由も説明出来た。

これくらいは理解出来るだろうし、出来てもらわなくては困る。
なので、真矢は次の内容に移る言葉を、口から発した。

「魔法戦の種目は、役員立候補者同士による一対一の個人戦闘。あくまでも二つの団体としてではなく、同じ役員の立候補者同士で戦うわ」

此方の声に、彼は黒髪を掻き、画面を見ながら、

「総当たりとかじゃなくて、役員候補同士の一騎打ちか。終了条件は降参及び戦闘不能。模擬術式を完全使用しての模擬戦ってところは普通の模擬戦とかと変わらないな」

「違うのは戦闘フィールドが直径五百メートルの内外閉鎖型結界空間の中ってことくらいかしら？ それ以外に特にルールの違いなどはないわね」

「……………」

そこで画面の内容を全て読み終わったのか、堅二は画面を見てい

た顔を上げる。

黒いその瞳は、真っ直ぐ此方を見ていた。その瞳からは、感情を読み取ることが出来ない。

来る、と真矢は思った。

彼からの、何らかの言葉が。

直感でも、予感でもいい。

とにかく来ると、真矢には分かった。

そして、彼は息を吸い、

「二つほど聞きたいんだが」

……来た！

予想が現実となり、彼の問いかけは此方に来て、

「まず、何でお前は生徒会になりたいんだ？」

その言葉が、鼓膜を震わせた。

■

堅二が尋ねたことは、計画と勝利方法が分かった今、ある意味至極当然のことだ。

模擬戦の一騎打ちで全員が本当に勝てるのか、とは尋ねない。彼

女はあらかじめ言っていたのだ。自分を含む神原、月夜、斉藤の四人を、生徒会などに所属せず、実力がある者だと。つまり、

……コイツは俺達が勝てると思ってる、もしくは勝てるだろうと計算している。

調べ上げたのは、自分だけで無いのだろう。

自分達の実力、そして生徒会や委員会に所属していないか、それ等を調べてから、自分達を呼んだに違いない。

だから、勝算についての話はもういい。
今、堅二が聞きたいのは、

……コイツがここまでする理由だ。

彼女が生徒会を乗っ取るうとする理由、それが知りたかった。

理由も分からずにただ面白そうだから、と生徒会に入るのは、生徒会という組織が持つ役目と権限に対して余りにも覚悟が足りておらず、相応しくも無い。

だから、何か理由を提示してもらわなければ、堅二は生徒会立候補に乗り気になれない。

プラス、単純に堅二自身が彼女の理由という物に興味を持っている。真矢がわざわざ四人のデータを調べ、交渉紛いの説得までして、生徒会を乗っ取るうとするその理由を。

「……生徒会の権限自体が魅力なのと、裏に関わりたからよ」

答えは、少しの無言を挟んで返って来た。

若干俯き、表情をあやふやにしている真矢は、前触れ無く右手の指を鳴らす。

乾いた音が一つ鳴り、此方に向けられていた魔力光の画面が反応するように、静かにゆっくりと消滅していった。端から光の欠片を零して行く、緩やかな消滅だ。

青い光の残照を眺める真矢は、深緑の瞳を何らかの感情で細め、両手を後ろにつく。更に足を伸ばしたそれは、だらけているとも言える楽な体勢。

それが示すことは、

……これが俺に対しての交渉じゃなくて、俺達四人に対しての話にシフトしたってことか。

辺りに視線をやれば、黙っていた三人も今は普段通りの表情をしており、真矢の話に耳を傾けている。

何故生徒会を乗っ取るうとするか彼女の根本的な理由を知らないのは三人も同じであるらしく、月夜と神原は互いに顔を見合わせ、斉藤も動きこそ無いが、内容を聞き取るうとする気配が感じられた。彼等を適当に見やりながら、彼女は体勢が変わった所為で音程が変わった声で言う。

「学園での権限は、さっき説明した通り相当な物よ。更にそれに加えて、公に出来ない事件とかも学生としての身分を利用するために舞い込んでくることも多いから、一般で認識されてる倍以上の影響がある。それに、卒業した時に生徒会に所属していたってのはそれだけで就職には困らないし、重要視もされやすい。生徒会に入らないと出来ないことも多いし。だからアタシは現在と将来、両方のために生徒会に入りたいのよ。……別に、他の理由もあるけど」

一気に喋る彼女は、僅かに朱に染まった顔といい、何処か恥ずかしげだ。今の発言に恥ずかしがる点があるとは堅二には思えないが、やけに長い台詞といい単に自分の事を話するのが恥ずかしいタイプな

のかもしれない。

思えば真矢は、生徒会や此方の事は多く話しているというのに、自分の事に関しては殆ど喋っていない。出会ってから数時間程度ならそれも当たり前なのだろうが、プロフィールを羅列された堅二としては疑問に思ってしまう。

しかも、あまり喋っていないのはそれだけではなく、

……生徒会に入ることと得られるメリットやデメリットを、あまり言っただけで来なかったな。

不利益な事柄——この場合は生徒会という役目が持つ危険性——は言わないのは分かる。言ったところで、マイナスなイメージにしなければならないからだ。なるべくそういったデメリットはを主張するのは避けるべきであり、もしくは彼女が直接言わなかったのは月夜などがデメリット部分を言ったからなのかもしれない。それとも、デメリットである危険性については此方を信用しているか、もしくは何かあった場合責任を取るつもりなのか。

しかし、だとすれば生徒会に入ることと生まれる将来的な利益、今言ったようなメリット部分を言わなかったのは何故か。

事前調査で自分がそういった物になびくような者で無いと判断されたのか、それとも、

……俺にそんな利益とかの自分本意な理由で、生徒会に立候補して欲しくなかった……？

予想が出来たのは其処までで、声が思考を遮る。

神原による、追求の野太い声だ。

「他の理由ってなんだよ？ 何か家庭の事情でもあんのかよ？」

「一応アタシは『多旗』の姓を継ぐ者だし、それも確かにあるとい

えはあるけど……」

「……理由としては弱く、軸となる理由はまた別にある、か」
「うっ！」

フェンスに寄りかかる親友の抑揚のない声には、副音声で失笑がついているような気がした。

同じようなイメージを堅二だけでなく真矢も抱いたのか、あからさまな動揺の呻きを見せ、

「べ、別にいいでしょそんな細かい理由なんて！ ただアタシは『自分の力でこの国をいい方向に変えれたらなあ』とか『折角才能があるんだから、それ相応のことをやりたい』とか、そんなことを考えてるだけで、悪巧みでも何でも無いんだから！ アタシだって自分にそんな理由が似合わないって分かってるから言わないのよ！ 恥ずかしいんだから言わせないで！」

「……真矢ちゃん、一応言っておくけど、盛大に自爆してるよー？」
「——ッ！？」

苦笑ではなく、意地の悪そうな微笑を浮かべる月夜の言葉に、血液が沸騰でもしたのかと思う程真矢の顔が羞恥で赤くなった。

慌てて彼女は自分の小さな手で自分の小さな口を塞いぐも、一度放たれた言葉は元に戻らない。

真矢の緑の瞳は動転したようにキョロキョロと周りを見渡していたが、やがて同じ目線の高さで座る堅二の方へと視線は固定される。

「へえ……？」

そして堅二はニヤニヤとした、直接的に言うならば人の不幸を楽しむ悪人の笑みで自爆した少女を見ていた。

朝は己が目の前の少女に自爆させられたが、こうして他人が自爆

したのを見ると、何故自爆した時に周りが騒ぐのかが分かる気がする。この相手の弱点を握ったような、圧倒的優位の感覚は爽快と言うに他無い。

……しかし、随分とまたお人好しな理由だったな。誰の影響を受けたんだか……。

屋上の床上で羞恥の余り「ぬあああああ！？」などと叫びながらゴロゴロ転がっている少女を見つつ、内心で思う感情は苦い笑み。

転がっている所為でスカートがめくれ、中身の白い下着がチラチラと見えているが、指摘しても火に油を注ぐだけだろうから気がつかなかったことにした。

そしてベンチ側から上がる目潰しの音と少年の悲鳴も気がつかなかったことにしつつ、心は真矢の言葉を復唱し、

……自分本意の理由、生徒会という肩書きが欲しいだけかと思ったら、人のため国のため、か。

嫌いでは無い、と堅二は感情で判断した。

正しいことに憧れる年相応な子供らしい理由で、尚且つ笑ってしまっ程の純真な理由。

本人自身も理由のあまりの幼稚さに羞恥心を隠し切れず、だが恥ずかしがりながらも否定はしない。

元より堅二は、理性で行動するのは苦手なタイプだ。

こういった、感情でそのまま力になってやれそうな理由は、理性よりも感情を優先する堅二にとっては、とてもやる気を増幅させてくれる。

……流石にこれがデマってことは無いだろうしな。

床を蹴り飛ばされたドラム缶のように転がる姿からは嘘は感じられないし、ここまでオーバーかつ真に迫った演技が彼女に出来るとは到底思えなかった。

言うつもりがなかった理由を言ってしまい全身で悶える真矢へ、
堅二はようやく口を開く。

「オイ、ガキ。こっちにケツ向けてないで顔向ける」

「うう……、アタシのイメージが木っ端微塵に砕けた気がする……」

「イメージが移り変わる物って言ったのはお前だろうが。いいからケツ振りダンスやってないでこっちを見ろって」

「ううううう……」

子供らしい、いじけたような呻き声を上げながら、しかし彼女は此方へと向き直る。

向けられた表情は今だ赤いものの、瞳や口元は引き締まり、真剣そのものだ。

その切り替えの速さは、やはり外見と精神の年齢があっていないと感じる程、大人らしい。

自分としてはもっとガキっぽい方が気楽なんだが、と堅二は思い、

「さっきお前が言ったことは、本気で本気なんだな？」

「……そうよ。悪い？ アタシだって、馬鹿らしい夢だったのは分かってるわよ」

フンツ、と鼻息でも聞こえて来そうな開き直りだった。

羞恥の感情が増したことが顔色から判断出来るが、堅二はそこには突っ込まない。

代わりに、

「別に悪くねえよ」

「……………」

その一言が意外だったのか、少女は背けていた顔を戻して来て、まじまじと此方を見る。

興奮で若干涙ぐむ瞳に混じりし感情は、呆気という名の一つのみ。魔力が切れた魔法機のように固まった彼女に、堅二は眉を上げて、

「なんだよ、そんなに俺が悪くねえって言ったのが信じられなかったのか？」

「ええ、まあね……。てつきりアンタのことだから『なんだそのお人好し全開夢見る子供的な理由は！？ 一昔前のスーパマンとか英雄にでもなるつもりかよ？ やっぱりなんだかんだ言ってもガキだな！』とか言うと思ってたのに」

「あのなあ、お前の中で俺はどんな人間って登録されてるんだ……」

あんまりと言えばあんまりな評価に、自然とため息が零れる。

一息ついてから、

「だが確かに似たようなことを思いはしたけどな？ 生憎と、そういう夢とかに対する理性的な観点での意見はともかく、俺自身は割といいと思うぞ」

「……そうかしらね。アタシ自身、あやふやで、ちゃんと定まってる訳でもない夢なんだけど。ただ何となく何かしたいってだけだし」「そりゃそうだろ。誰かのために自分の才能で働きたいって言ったって、この時点で何をどうしてこうするとか、そこまで明確に考えてるやつの方がおかしいんだから」

ましてや、と堅二は続けて、

「お前は実年齢十歳だろ？　だったらまだまだ答えを出すのには早い。方向性が決まってるだけでも対したもんだ」

「……ガキだから、そんなあやふやな夢を見るのは仕方ないってこと？」

「違う、もっと気楽に行けって言ってるんだ」

堅二の目は、真矢から周りへと移る。

見るのは自分と似たような顔をした、三人の姿だ。

彼等は堅二の視線に応じるように、それぞれの口を動かす。

「悪くはねえんじゃないの？　いいじゃないか、純粹で。オレとか堅二が言い出したら問題かもしれないけどよ」

「うんうん。ちょっと真矢ちゃんって大人過ぎるかなーって心配してたけど、そういう心を持っているうちは大丈夫だねー」

「……随分と成長したものだ。……前なら、そんなことは死んでも言わなかっただろうに」

言葉こそ違うが、込められた感情はほぼ同一だ。

関心と、感心と、歓心。

彼女の夢に興味を持ち、彼女の夢に心を動かし、彼女の夢を歓迎する、そんな感情。

「……アタシも随分甘くなっただって思ったけど、まだまだ普通ね」

「どーいう意味だよ」

「そーいう意味よ」

呆れたように言葉を返す真矢は、ちいさく笑っている。

苦い笑みではなく、内心に隠そうとした喜びが漏れ出たような、そんな笑顔。

「手伝ってくれるってことでいいの？」

「話も聞いちまったし、もう片足分くらい乗っちゃった船だからな……面倒だけど、付き合ってやるよ」

「付き合いでやると、後悔するかもよ？ それに下手すると死ぬかもしれないわ」

「今更だろ。第一、魔法が使える時点で生死の境界線に踏み込んでるようなものなんだから、死ぬの自体は別に怖くねえよ」

「そう」

彼女は一旦、言葉を切り、

「……アンタやっぱりお人好しね。勝算や利益で決めるんじゃないで、ガキらしい理由一つであっさり決めるんだから」

「悪いかがキ。俺は自分の感情で動く人間なんだよ。バカと言いたきゃ言え」

「悪くは無いわよ、バカ。アンタがそういう人間だから、アタシはアンタに生徒会になって欲しいんだから」

バカとか言われるのに、随分と自分は買われてるなと思う。

大体、幾ら事前の情報があるとはいえ初対面の相手にその信用はどうかと思うが、彼女の笑顔に不安などの負の感情は無い。

ならば、わざわざその笑顔を崩すことも無いだろうと、堅二はらしくないことを考えて、

「言っとかが。生徒会になるって提案したのはお前なんだから、しっかりリーダーらしく頼むぞ」

「分かってるわよ。選挙戦に勝って生徒会になるためにも、しっかりとやらせてもらうわ」

「オレも手伝うぜ。どうせ高校生活は馬鹿と馬鹿やって千春とイチヤつく意外は暇だしな」

「もう千羽君……。でも私も手伝うよ。生徒会には、学園に入る前から興味があつたし」

「……俺の剣が役に立つと言つのならば。……未熟な身ながらも、協力させて貰おう」

この場の全員が顔を見合わせ、笑う。

もう既に、四人が四人とも真矢の計画に乗る氣だつた。

そして真矢自身も、それが分かるからこそその笑みを見せている。

……自分と違つて、全員やつぱりお人好しなんだな。

同じような内容を、皆心中で考えているのだろう。

証拠たる浮かぶ笑みは、全員同種の物だ。

場に満ちる雰囲気には、奇妙な一体感がある。

オリンピックなどの国際的スポーツ大会でも感じる、年齢、性格、国籍、身長、人種、魔法使いかそうでは無いか、そういったあらゆるものを無視する赤の他人との同調した感覚。

その感覚を、堅二は笑いながら感じて、

……やれやれ、忙しくなりそうだ。

そう、これから先の事を思っていると。

「いい空気のとこ悪いが、少しいいか？」

「何だよ神原」

自然と出た言葉は、雰囲気に触発されてか邪氣の抜けた物だつた。堅二が神原に目をやると、何故か彼は笑顔を消し、曇つた顔をしている。

そして神原はあー、と言葉を伸ばしながら天を見上げ、意を決し

たように顔を正面に戻し、

「なんかボケてもいいか？」

「死ねよ」

「——ノ、ノータイムで切り返して来やがったぜコイツ！」

いい空気が、アホによって霧散した。

同調感が消え、心に残るのは一体感の余韻ではなくアホに対する普段通りの感情だ。

だから堅二は普段通りに、

「いや、お前さあ？　口で言った訳でも無いのに、全員が全員同じことを思いつていうシリ阿斯感動場面にさあ……、それはねえよアホ」

「し、仕方ねえだろ！？　オレこういう雰囲気苦手だしよ！　心の中で『あれ？　何時の間に立候補決定事項になったんだ？』とか考えてたんだぜ！？　我慢した方だろ！？」

「いや、そこら辺はお前空気読んでたじゃねえか……。頼むからさ、せめてボケてもいい？　とか一々聞くのはやめろよ。——お前は存在自体がボケなんだから」

「デメエは本当にオレの固有名詞を変えようとしてるよな……。！　それに存在自体がボケってなんだ！？　それを言うならギャグだろうが！」

齒軋りする神原だが、彼は気がついていない。

堅二は睨んで来る彼の隣、赤髪を震わせている少女を見て、

「後でオハナシか？」

「うん……。今ここでしよつか悩んでる所ー」

「やるなら向こうの給水タンクの裏でやれよ。あそこは影になって

いるから。それと、後始末もきつちりな」

「おいゴラ馬鹿、テメエ何ぶっそうなことを――、千春、空気読まなくてすまなかった。だから肩を骨粉々にするような力で握るのは止めてくれ……！」

耳に響く肉と骨を軋ませる音は無視。

呆れかえりながら堅二が目を動かすと、斉藤もやれやれと言いたげな顔で、フェンスに寄りかかり直している。

真矢は、顔をしかめて、

「何時もこんな感じなの？」

「何時もこんな感じだな」

彼女もアホが空気を壊したのには、それなりに不快だったようだ。悲鳴を上げる神原を「もっとやれ」とでも言っていそうな目で見て、肩を落とす。

……そういえば、コイツは学園に入るまでどういう学校生活を送ってたんだろうな。

何となく疑問を持ったが、気軽に尋ねることでも無いだろうと即座に思い直す。

ただ、もう一つ疑問に思うことがあった。

最初に持った二つの疑問の内のもう一つ。それをまだ聞いていない。

「そっぴゃあ聞いてなかったが」

「……何？」

「どうして俺なんだ？ 何か、俺が感情で動く人間なのがいいとは言ってたけど」

「ああ、そのこと？　簡単よ」

真矢が想像していた問いとは違ったのか、声のトーンが上がる。躊躇わず、彼女の口が答えをよこして来た。

「アタシが信用出来る人間で、生徒会や委員会、出来れば部活やサークルにも所属してなくて、十分な実力があり、そして尚且つ『男』であること。それ等諸々の条件に完全一致して、アタシ自身も認めたのがアンタだからよ」

「……男であることって、どういう意味だ？」

声の調子から、まだ他にも選びの条件がある気がしたが、それより気になる部分があった。

男でなければいけないとは、どう意味なのだろうか。

その堅二の、何故か嫌な予感を抱く疑問にも、真矢は正確かつ高速で答える。

「そりゃあ、空峰学園の生徒会会長は男しかねないからに決まってるじゃない」

あつさりと、明日の天気を述べるように、そんな重大なことを言われた。

「……………はっ？」

「いや、はっ？　って言われても、意味が分からないんだけど……………」

驚きのあまり屋上に来た時と似たような反応をしてしまうが、相手は此方の態度の理由が分かっているらしい。

堅二の灰色脳細胞が首を傾けて固まってしまった彼とは裏腹に、電気信号の速さという超高速を持ってして今の言葉から分かる情報を推測し始める。

真矢は、男でなければ生徒会会長になれないと言った。そして、自分を選んだ理由の一つには男である、というのが存在するのも、彼女が言ったことだ。

つまり、それは、

「まさかとは思うが、もしかして会長に立候補するのって……、俺か？」

「……今更何言ってるのアンタ？」

「いやいやいやいや！？ その反応はおかしい！俺はそんなこと聞いてねえぞ！？」

手を思いつき振ってツツコミを入れ、抗議する。

堅二は、会長には真矢自身が立候補するものだと思っていた。だからこそ彼女をリーダーと呼んだし、方針を任せもしたのだ。

精々自分は庶務か会計、よくて副会長の位置だと考えていた。だというのに、

……俺が会長！？

無理だ！と即座に堅二は思考する。

一年生徒会とはいえ学園の顔であり、一学年の最高組織である生徒会の会長。国にも反抗出来る権限を持ち、学年最強を示す役職に自分なんかがつくなど、とてもでは無いが考えられない。

そうやって心中で否定する堅二に気がつかない真矢は、顎に手を当てて空を眺め、

「……ああ、そう言えば誰がどの役職に立候補するのかはまだ言っ

てなかったような……。まあいいでしょ？」

「よくねえよっ!？」

平然と言う真矢のにこやかな笑みに触発されたように、勢い良く堅二は立ち上がった、

「俺なんかが会長になれる訳ねえだろ!? 頭も実力も平凡の域を出ない俺が、よりもよって『反対権限』とか国家クラスのふざけた権限を持つてる役職につけるか!」

「そんなに心配しなくても、アタシが副会長になって九割方サポートするから大丈夫よ。戦闘とか自体はアンタ自身に任せるしか無いけど、アンタの実力は充分会長になってもおかしくないクラスだしね」

「だったらお前自身が会長になればいいじゃねえか……!」

「だから、空峰学園は設立からずっと生徒会会長が男なの。最初は偶然だったかもしれないけど、今ではもはや不文律になってしまつて今更どうこう出来ないわ」

「男女差別とか言つて立候補すれば」

「そんな変革紛いのことしたら反感買つて票が集まらなくなる可能性が高いから無理よ。前例があつたら話は別だけど、今まで女子が生徒会会長になったのは一度だけで、しかもそれはその時の会長が死んで副会長が成り上がったからだし、特例過ぎて女子が生徒会会長になる理由には使えない。だから余計な波風を立てないためにも、アンタが会長になるべきなのよ。男のアンタが」

「くっ……!」

「……分かる、分かるが……! クソ、そんな不文律なんざ何であるんだよ!」

真矢の言っている意味は分かる。

あくまでも、最終的に立候補者が選ばれるのは投票だ。選挙戦があるにしても、強い者が選ばれるにしても、それ等は結局選挙の大勢を決めるものであり、選挙の勝敗を確実に確定させるものではない。下手なことをして一般学生達の評価を落としたら、選挙戦で圧勝したとしても選挙で負ける可能性が出てくる。

そういった可能性を、真矢はなるべく作りたく無いのだろう。なにせ、勝負は一回。逃せば後は無いのだから。

だが、それでも会長などになりたくない堅二は、

「ハッ！ そうだ！ 男であればいいんだったら、クロが会長になれば――」

「……生憎、自分は書記だ」

いい逃げ道だと思ったが、すぐさま潰された。

逃げ道を潰した親友は、前髪の隙間から瞳を覗かせて、

「……悪いな、堅二。……昨日の内に、誰がどの役員に立候補するかは既に決めていてな」

「いやクロ、お前なら書記とかじゃなくて会長も充分務まる……、って、昨日の内？」

役職を交換してもらったために説得しようとして、堅二は聞き逃さないワードに言葉を止めた。

疑問に答えるのは親友でなく、座ったままの少女で、

「斉藤のこととアタシのこの家系はちょっとした縁があつてね。この学園に来る前から話をしてたのよ」

「……なにいいいいいっ！？ あっ、だからクロお前さっきコイツに向かって『前なら』とか言つてたのか！？」

「ちなみに、朝言つたアンタの情報の八割は斉藤から聞いたものよ。」

特に後半の昔の話とか。目撃者の情報は、やっぱり信憑性が高いわね」

「クロ貴様アアアアアア！？」

「……すまなかった」

親友に裏切られ、叫び揺する堅二。まさかアホならともかく、唯一の親友とっていい斉藤に裏切られるとは思ひもなかった。

後でどれだけ情報を真矢に流したのか問い詰めようと、堅二は心に刻み、脳みそをシェイクさせまくった無言でフラフラしている斉藤から手を離す。

向き直るのは、真矢の方だ。

「オイ、俺が書記でクロが会長じゃダメなのか！？」

「ダメね。書記に求められる能力で言えば、斉藤がこの中で一番向いてるし、何より選挙戦を考えると斉藤がアタシじゃないと、下手したら負ける」

「……どういうことだ？」

動きを止めた堅二へと、真矢は唇をゆっくり動かして、

「相手の……、というか現在の暫定生徒会書記の名前はレイネ・E・レギナ。特殊魔法武装に認定されてる『破壊槍』^{ブレイカーランス}の使い手で、武器接近戦闘ランクA-と特殊魔法兵器操作ランクA-の資格を持っている、天才女よ」

「……武器接近戦闘ランク、A-……！？」

第二次世界大戦後の会議で決められた、世界共通の基準数値であるランク。国際間でのやり取りを円滑に進めるために作られたランクは、FからAと、+・-の記号による十二段階評価となっている。アルファベットのAに近ければ近い程ランクとして高く、-よりも

＋の方がランクとして高い。

つまり、A－というのは最上級の一步手前であり、十二段階評価の内の二番目という、超高ランクだ。

そして近接戦闘ランクA－というのは、日本で十人程度しか持っていないはずの資格。例えば総合的な実力を測る戦闘ランクと違い、武器による接近戦闘のみを測定したランクといえど、簡単に取れるようなものではない。むしろ特化的な能力を測るため、戦闘ランクよりも才能が物を言うことも多い。

不満で沸騰していた筈の頭が急激に冷め、冷水でも浴びらせられたように冷静になる。

それだけ、真矢が言ったそのランクは、凄まじいものだ。

彼女が『天才』と躊躇無く言い切ったのも頷ける。

「所詮ランクはある程度の目安だし、A－だからって斉藤以外の奴が勝てない訳じゃないけどね。ただ万が一があるし、なるべく勝つ確率が一番高くて相性的にもよさそうな斉藤に出てもらっわ」

「……『破壊槍』は前に一度戦った事がある。……莫大な瞬間的破壊力と、槍ごとに登録された特殊破壊魔法が特徴の武器だ。……初見で戦うのには厳しい相手だ」

「……じゃあ、書記はクロじゃないとダメってことか」

「役職にあつてるかどうかの前に、負けたら本末転倒でしょ？」

そう言われたら、堅二としては納得せざるを得なかった。

斉藤と役職を代わってもらったというのは、どうやら諦めるしか無いようだ。

だが、まだ手はある。

「そして他の役職は会計に月夜千春、庶務に神原千羽。これで行くわ」

「ちょっと待った！ 確かにクロはダメだったがな、だったら神原

と交換すれば……」

抗議を言つて、堅二は顔を動かす。

見るのは真矢と同じ方向。ベンチに座る二人だ。二人は、お互い違つた行動を取つていた。

ベンチに座る月夜はニコニコ顔で弁当箱を片付けていて、ベンチに正座している神原は首から『反省中』と書かれたボードをぶら下げている。

暫し、堅二は無感情な瞳で二人を眺め、

「……やっぱアホはダメだ。コイツを会長にするくらいなら一日寝まくつてるコアラでも会長にした方がまだ増しだ」

「寝てるってか！？ アホなことやるくらいなら寝てるってか！？」

「分かつてるなら二度も言うな鬱陶しい！」

「……オ、オレは今、相当理不尽な逆ギレをされたぜ……」

アホは無視。

だが、これで逃げ道は完全に絶たれてしまった。

が、堅二は、

……それでも会長になんかなりたくねえ……！

何かやらなくて済む方法は無いか。何か百パーセント勝つ証拠を出して、斉藤と交換してもらうか。最悪、罪悪感が凄まじいが神原と交換するか……などと、考えられる方法全てを、額に手を当てつつむきながら真剣に探す。

興味のあることや自分のことに関しては、人間は普段以上の力を発揮する。何らかの危険であれば、尚更だ。

堅二もそれは変わらず、目を閉じ、先程見た生徒会や選挙戦、学生権利の情報から何らかの抜け道が無いか探すが、

「……そんなに、嫌？」
「っ？」

寂しそうな、悲しそうなトーンの声に、反射的に顔を上げていた。声のした方向、前に居るのは床から立ち上がった普段通りの顔をしている真矢で、傍目からは彼女の声と表情があっていないように見えた。

もしくは自分が彼女の声を聞き間違えたのかと、勘違いしてしま
いそうだ。

……えっ、あっ？

だが堅二には分かる。さっきまで彼女は笑っていた。なのに笑っていないということは、気持ちが下へと落ち込んでいるということだ。

そしてよく見ると眉尻は下がっているし、肩は身を縮めるようにすぼめられ、口も言葉を言いにくそうに小さめに開かれ、目線は此方からズラされている。

完全に落ち込んでいるのが、目に見えて分かった。

「えっ、いや、その……？」

彼女のそんな先までの強気と我儘さが嘘のような態度に、思考が全て吹き飛んだ堅二は何かを言おうとするが、年相応の落ち込み方をしている真矢には聞こえていない。

「……そうよね。いきなり会長になれなんて言われて、嫌にならな
い奴なんて……」

声は小さく、内容も堅二への物ではなく自分に対しての独り言。薄暗い、擬音で言うならどよーん、とても形容されそうな暗い雰囲気纏う彼女は、ほうつておくとか今にも泣き出しそうだ。

いや、今までの彼女を見ているため、そんなことは意地でもしないだろうと思うが、実際に動揺せずに接することが出来るかはまた別のことで、

「ちょ、ちょ……」

そして堅二は落ち込んだ少女に対する対処方法など知らない。というより、そんな状況に自分が合うことなど無かったし、これからも無いと思っていたのだ。

そんなオロオロする彼を裏切るように、より深く俯く真矢は、

「アタシが会長になれば……話は早かったのに……、やっぱり、去年の内から分かってれば……諦めずに探してればよかった……」

自己嫌悪らしきセリフを、自嘲の笑みで呟き続ける真矢。十歳の少女がそんな顔をして、しかもその原因が自分ともなれば、魔法が使えるだけの男子高校生である堅二はただただ慌てるしかない。

……ど、どー！？ どー！？ どーすんだこれえええ！？

心中で奇声を上げ、頭を抱えていると圧力を感じた。

変わらず落ち込む真矢を視界に収めつつ圧力の元を見ると、そこには人間の屑を見るような目で睨んで来る月夜、斉藤、神原の三人が居た。

人間の屑を見るような、というのは言い過ぎかもしれないが、彼等の目はこう言っている。

男が女を泣かせるんじゃないやねえ、と。

……どーすりやいいんだよおおおっ!?

強くなるための方法や、アホをぶっ飛ばす方法、バリバリ体育会系の幼馴染に付き合う方法は知っているが、自分より年下の少女を慰める方法など堅二は知らない。
しかし、

「……っ、……っ……」

……ええええい！ もう、どうにでもなれ！

堅二はあらゆることに妥協することにした。
彼女が落ち込んでいる理由は分かっている。自分が本気で生徒会会長の座を嫌がっているからだ。
だから、

「会長になる！ 会長になるから泣くなっ！ なっ!？」

「……泣いてなんか、ないわよ」

「あー！ じゃあ泣きそうになるな！ 俺会長になるからさ！ なっ、なっ!？」

言い方が悪いのか、月夜を中心とした視線の圧力が高まったが、
気にする余裕は無い。

とにかく意味も無いのに手を振り回し、引き攣った笑顔で真矢にフォローの言葉を言う堅二。

そして、必死の言葉が功を奏したのか、彼女はゆっくりと顔を上げ、涙目の上目遣いで、

「でも、……嫌、でしょ？」

……ぐわあああああつ！？ 良心があああああああつ！？

堅二は少女愛の趣味は無いが、それでも見た目美少女の上目遣いにはとんでもない破壊力があつた。

狙ってやっているのかと思うが、泣きかけで乱れた息遣いなど到底演技には感じられない。

この上目遣いを受けて「はい、嫌です！」などと叫べるバカが居たらそいつは人間では無いだろうとさえ思った。

なので堅二は、首を横に慌ただしく振って、

「大丈夫だ！ 今考えてみたらどうせ書記とか庶務でも生徒会に所属する以上似たようなもんだし！？ アホや剣自慢の役目取ったらマズイしな！？」

「……で、も……」

自分で言っていてよく分からないが、二人分視線の圧力が増したの
は確かだが無視して真矢を見る。

彼女は自分の所為で此方に嫌なことをさせている、という自覚があるためか、先よりも落ち込んでいるようにさえ見える。

本当に変な所で子供ばかり大人っぽいな！ と堅二は叫びたくなるも声には出さず、代わりに、

「そ、それに……」

小さくない躊躇いが生まれたが、己が正直に抱いた気持ちだろうと
考え、声に出す。

「お前が、副会長になってサポートしてくれるんだろ？ ……だって
たら大丈夫だろうって、たった今思い直したんだよ」

「……………えっ？」

いきなり顔を跳ね上げた真矢の表情は、驚きの一色。
その表情に続きを言うのに羞恥心が湧き上がるが、どうせ二度は
言わないのだからと、堅二は心を決めて、

「一人じゃ確かに厳しいかもしれないが、それでもお前が会長って
役割が持つ重みを支える手助けをしてくれるって言うなら、大丈夫
かなって思ったんだ」

空気を一度吸い込み、呆然という顔の少女へ、堅二は告げる。
上から見下ろす形になりながら、

「信じていいか？ お前が、俺を助けてくれる、手伝ってくれるっ
て。そして、お前が信じていいって言うのなら――」

言葉を続ける内に、自然と動揺していた心は落ち着きを取り戻し
ていた。

不思議だと思しつつも、堅二は笑う。
見上げて来る彼女へ、自然な笑顔を見せるために。

「俺は、お前のために生徒会会長になる。どうだ？」

「――」

少しの間、真矢は無言だった。

放心したように此方の顔を見上げて来る彼女の顔は、赤い。
原因は泣きそうになっていたのと、堅二の言葉のためか。
だが彼女は、何かを言おうとして、

「……っ」

今更気がついたように、制服の右袖で目元を拭う。

ゴシゴシと強く、見てる方が心配になる程強く拭ってから、彼女は顔を上げる。

そこには泣きかけの、溢れる感情を堪えるような悲しみの顔はない。

そして、彼女は、勢いよく息を吸い込んで、

「——当然よ！」

真矢は腰に手を当て、朝から常に見せていた強気的笑顔で、そう宣言した。

声には隠さない自信で満ち溢れていて、堅二の言葉に絶対的な力で答えている。

だから周りの視線という圧力から解放された堅二も、

「そうか。なら……、問題無いな」

笑って、そう答えた。

……セーフ！ セーフだよなこれ！？

内心は真矢という年下の少女を泣かさなかったことに、安心の叫びを上げまくっていて笑ってなどいなかったが。

「……ッ！」

堅二のそんな内心など分らない真矢は、笑う彼の顔を見て照れたように顔を逸らす。

今度はまた違う意味で顔を朱色にしながら、早口で、

「で、でも暫定生徒会会長のブローニング・シエルエリアも『破壊槍』みたいな特殊武器こそ無いとはいえ、戦闘ランクA-の資格を持つてる天才児なんだから、油断しないでよね!？」

「油断なんかしねえよ……。その変な名前の奴がどういう奴か知らねえけど、お前は俺が勝てるって思ってるんだろ？　だったら大丈夫じゃないのか」

「……う、ううゝ！」

照れが限界に達したか、真矢は堅二に背を向けた。

声をかける間もなく、肩に必要以上の力を込めて、彼女は足音を無駄に立てながら早歩きで歩いて行く。行き先は、屋上の出入り口。硬く閉められた、鋼鉄のドアだ。

揺れる小さな背中、大人っぽさなど欠片も感じない子供の背中だった。

「あつ、オイ——」

その背中に声をかけようとして、

「……後で」

ドアノブに手をかけ、歩みを止めた彼女から声が来た。

声は照れという興奮で震えていて、場合によっては風邪でもひいたのではないかと思う程、熱っぽい。

「後で、生徒会の立候補書類をスカイ先生に提出して、訓練場で訓練するから、放課後付き合いなさいよ」

「あ？　……ああ、分かった」

一瞬何を言っているのか分らなかったが、直ぐに了承の言葉を返した。

また下手に拒絶して、泣かれでもしたら折角のフォーローが台無しになってしまう。

それに、一度協力すると言った以上、ここまで来て断る気も無かった。

……男が言ったことを撤回するのも情けないし、な。

自分の思考に納得している内に、背中を向けたまま真矢はドアノブを捻り、扉を開く。

少しばかりガタが来ている金属製の扉が、扉枠とこ擦れ合う甲高い音を鳴らし、

「……ありがとう」

「……んっ？」

その音の中に隠れるように、何かが聞こえた気がした。

堅二の気のせいではなければ、音は声で、声は女の声で、女の声は真矢のものだったように聞こえた。

ただ何を言ったのかは分らないし、彼女に声をかける間もない。

開かれた扉を閉めずに、真矢は出入り口の影で生まれた暗闇に姿を消し、金属製の扉は開かれたまま風にそよぎ、揺れる。

場に残るのは春風の風音と、揺れる扉の軋む音、そして天高く昇って行く桜の花びらの音だ。

「……不機嫌になったり、怒ったり、我儘言ったり、笑ったり、落ち込んだり、喜んだり……急がしい奴だなオイ」

彼が半分呆然となりながら出入り口の扉を眺めていると、

「おらよ、モテ期到来の男」

「モテ期ってなんだよオイ。……って、これ」

右側から神原の手によって投擲された物を掴み取り、堅二の頭に疑問が生まれる。

掴み取ったのはカバンで、それは屋上に持って来た自分のカバンよりもやけに重い。

まるで、わざわざ教科書などの学習道具を全部詰め込んでいるかのような重さだ。

「これ、アイツのじゃ……」

「どうやら感情が昂ぶりすぎて忘れて行ったみてえだな。テメエが持って行ってやれよ」

そう言って神原は大きな欠伸を一つ。

ベンチから立ち上がった巨大な身体を、両腕を上に向けて伸ばす。動きの一つ一つに大きな音が含まれる彼は、ふと此方を見て、

「これからオレはちよつと売店に行くけどよ、その前に一つ言っといいていいか？」

「……なんだ、アホ」

「『俺は、お前のために生徒会会長になる』」

「……………」

「いよつ！ 会ったばかりの少女にんな齒が浮きそうなこと言えるなんて流石ロリコンツ！ 友達辞めてもいいかガッ！」

顔面を蹴り飛ばすのが遅れたため、ある程度言わせてしまった。最後のガッは悲鳴だ。

右足で顔面を横から蹴り飛ばしたため、さながらサッカーボール

のように神原は空中側転しながら吹き飛んで行く。

何ものにも遮られることなく吹き飛んだ彼は、そのまま扉が開かれたままの屋上出入り口に飛び込み、暗闇に消えてから数瞬して肉が壁に激突する轟音が響いた。

生まれた衝撃で出入り口と屋上全体が地震のように揺れる。

「扉を開けっ放しで行ったのはナイスだったな」

「あははー……。堅二君も、やり過ぎるのはダメだよ？ 魔法だって、校舎内では使用禁止なんだからー」

「『校舎内』はな。ここは屋上と言う名の外。校舎外だ」

アホを蹴り飛ばした足を床に下ろしながら言うと、月夜は苦笑する。

堅二自身もその反応は予測していたので、似たような苦笑いで返した。

「じゃあ、私は行くけどそのカバン、真矢ちゃんにちゃんと届けて上げてねー。それと、自分のも忘れないようにー」

「了解」

月夜はもう一度此方を見て笑って、そのまま屋上出入り口へと小走りで駆けて行く。

恐らく吹っ飛んだ神原を回収し、一緒に売店に行くのだろう。

邪魔するのは野暮だろうなと思い、自分のカバンを左手に持つ。

左手と右手の重さの違いに戸惑いつつ、教室に帰るため屋上出入り口に行くこうとして、

「……堅二」

「あれ、クロまだ居たのかお前」

気配を感じさせないままかけられた声に多少驚き、背後を見る。驚くのは気配を感じないというのもあるが、神原も月夜も居ないのに、まだ彼が屋上に居たことに対する驚きが殆どだ。

そこに立つのは斉藤黒。彼はそこに立っているのに居ないと勘違いしてしまいそんな程気配を感じさせないまま、

「……すまない、アイツは昔からああでな」

「アイツって……ああ、別にお前が気にすることじゃねえだろ」

「……それでも、迷惑をかける。……あれでも、前より大分マシになっではいるんだが」

……あれでマシ、かあ。

斉藤の言葉に、堅二はそう思わざるを得ない。

あの少女はそれだけ色々ぶっ飛んでしまっている。あれがマシなと言われると、昔はどうだったのか怖くてたまらない。

「とてもマシだとは思えないが……。昔に誰か悪い奴の影響でも受けちゃったのかもな。運が良ければ、もう少しマシだったろうに」

「……………そうだな」

「？」

気のせいかな、少しばかり親友の沈黙が長かったように感じた。

違和感を覚える堅二だが、黒髪に瞳を隠す斉藤は軽やかぶりを振り、

「……………カバン、頼んだぞ」

瞬時に、消えた。

ブレザー型制服に包まれた細身の肉体が、視界から忽然と姿を消

す。

彼が居た場所には緑色に発光する円陣型術式だけがあり、それも一秒と経たずに碎けて消えた。

術式は肉体を加速するタイプの物で、音無く消えたのは純粋な彼の技術だろう。

魔法使いの見ても充分に超人と言える技だが、昔から何度も見ているので堅二は今更驚かない。

なので、鳥頭になっている黒髪を掻く彼の口から漏れた言葉は、

「何で俺がカバンを持って行くことで決定してるんだ？」

答える者は居ない。

全員同じ教室だろうに、とため息を零しつつ、彼は歩き出す。

重心が右手の重さに引かれて傾きつつも、堅二は真っ直ぐ屋上の出入り口へと歩いて行った。

空は雲が殆ど無い青空で、春であることを示す桜の花びらが舞っている。

「本当に、忙しくなりそうだ」

花びら舞う暖かな屋上に別れを告げ、堅二はもう一度だけ呟いた。

第無章・昔の深夜

何かを思うのは簡単なのに
何かを言うのは難しいのは
自分が馬鹿か餓鬼だからか

「その女の子！ お前だよ、茶髪の女の子ー！」
「……………」

この時。

最初は人違いか、恐らくは別の誰かを呼んでいるのだと思った。でもいつも通り歩きつつ、後者は無いと断定出来た。何故なら今の時間は深夜の十二時。つまりは、日付が変わる瞬間の時間帯。周りは魔力街灯の光のみがぼや々と照らす住宅街で、人も魔力車も一つたりとも居ない。完全な無人、という訳では無いのだろうが、少なくとも自分の周りにはほぼ無人だった。だから自分の近くに他の誰かが居て、そちらへと声をかけているという訳では無いだろう。となると、前者なのかと思うが、人違いをしているのなら探し人の名前で呼ぶはずだ。わざわざ『茶髪の女の子』などという此方の特徴で呼ばないはず。

………つていうか、よくまあこの薄暗さの中で髪の色なんか判別出来るわね。

視界が暗闇によって完全に潰されている訳では無いが、それでも色を判別するのが難しい程の暗闇であることは確かだ。

視界を補強するなんらかの魔法でも使っているのか、などと考えているうちに、呼びかけて来た者の足音が後ろから近づいて来る。距離は、近い。

……逃げると面倒、か。

大声を上げられたりしても面倒だ。なので、ゆったりと速度を落として後ろを振り返った。街灯の下に移動したため、ここからは向こうの姿が夜にしてはよく見える。

此方へと歩いて来るのは、この近くにある中学校のブレザー型の制服に身を包んだ十二、三歳程度だと推測出来る少年。

靴は学校指定であろう黒の革靴。自分よりも背の高い体躯に、闇闇の中に紛れそうな黒髪と黒目。手入れなどされてなさそうな髪の毛と、面倒そうに吊り上げた目からは馬鹿不良の雰囲気 が全開で放たれている。

乱雑そうでいて、しかし何処か恐怖を拭い去る姿。平凡そうでありながら、深夜の夜空を背景に佇む少しズレた異常さ。

ああ、

……考えると、まだパターンあったわね。

自分としたことが、失念していた。

一応生物学上女である自分に、夜道で前触れなく声をかけてくるような男が居るとしたら、理由はほぼ確定されるではないか。

つまり、

「あのさあ……、一応言っておくけど、アタシ七歳よ？ 流石にちよつと性癖が五百四十度カーブして無いかしら……？」

「いきなり最初の言動がそれかよ……っ！？ しかも例えがよくわかんねえ！」

なんだこの色々ぶっ飛んだガキ……、とでも言いたげな目で見下るされ、むっとなる。

此方だつて夜道で突然喋りかけて来やがってこの不良男、と思っ

ているが表に出さないようにしているというのに。

だがここで怒鳴りかかっても仕方がない。ここは落ち着いて、さっさと用件を話させるべきだ。

「で、夜道で突然喋りかけて来た怪しさ全開の不良男さんの用は何？」

「お前は俺になんか恨みでもあんのか……」

怒りはあるが、恨みは特に無いと思う。しいて言うなら、帰路を邪魔されたことだろうか。

街灯の下。肩を落としてため息を吐く少年は、頭髪をガシガシと右手で掻いて、

「こんな時間に外歩いている八歳児なんか見つけたら、普通は声かけるだろ。常識的に考える常識的に」

「なるほど。自分で幼児狙いのロリコン不審者宣言するなんて、流石本物は違うわね」

「………なあ、お前本当に七歳か？ 幻術とか身体変化とかの魔法使って誤魔化してねえよな？」

「まあ、大人びてるとかは普段から言われなれてるけどね。ちゃんとした七歳児よ、一応」

こんな七歳児が居るとか世も末だな……、と呟く少年。

「こんな」という表現に多少イラッ、と来たが、あまり突っ込んでいては話が進まないなので、取り敢えずスルーして口を開く。

早く済ませて、家へと帰りたい。

……もつとも、帰りを待ってくれてる人が居るわけでも無いけど。

「で？ 実際、何の用なのよ？」

「……別に何か用がある訳じゃないけど、こんな時間帯に外歩いている子供が居たら、よっぽどの馬鹿か悪人でも無い限り心配で声かけるだろ？」

「……………」

……なるほど。

そういうことが、と言葉を聞いた脳内で答えが一気に組み上がる。ようするにこの少年はお人好しと呼ばれる類いの人間で、一人夜道を無防備に歩く赤の他人である年下の存在を見逃せなかったと、そういうことなのだろう。自分の予想はまるつきり逆だった訳だ。だからこそ、

「——はあ」

自分は呆れた。

呆れて、少年に背を向けて、

「別に、心配されなくても家にくらい一人で帰れるわよ」

「確かに、ここまでの会話で正直心配とか不安とかそういうのが軒並み減って行ってるが……、でも最近こちら辺で犯罪者ランクぐぐらいの通り魔が出てるって話だし、やっぱ心配だから家まで送ってく」

「……それ、勝手な善意の押し付けか、もしくは都合のいいストーリーのセリフだってこと、分かって言ってる？ 分かって言ってる無かったら、アンタ天然系ストーリーカーよ」

「どうしてこの幼女はこうねじ曲がった返答をしてくるかなあ……！？ そんなに俺を性犯罪者にしたいか？」

怒り爆発一歩手前の少年を見て、だったら早くアタシを見ないふりして何処となりと行けばいいのにと心中で呟く。

暴言を吐く、怖い物知らずの自分などほつつて置けばいいのに。
一つガツンと言ってやろうと唇を湿らせて声を放とうとした直前に、呆れと疲れとをミックスさせた声が背後から一つ。

「たつく……、あのなあ、とにかくお前ん家まで俺が送るか、もしくは交番に直行するか。ほら、二つに一つ。早く選べ」

「……はあ？ なーんでアタシが、んな選択を迫られなきゃならぬいのよ？ 第一ねえ——」

「じゃあ送ることに決定な。とつとと帰るぞ」
「きやつ！？」

向こうは自分の話を欠片たりとも聞いてなかった。

瞬時に、まるで荷物を抱えるように小脇に胴体を挟まれ、そのま
ま此方の重さなど感じられないかのように軽い足取りで歩いて行く。
視界が不規則に揺れ、地面のアスファルトに埋め尽くされている
のを認識し、

……——やられた！ つて、コイツ、結構やる……！

見事なまでに油断していた自分への叱責の念と、鮮やかかつ無駄
の無い少年の手管に驚愕の念が生まれる。

慌てて腰に回された手を外そうとするのだが、少年が歩く度に身
体が揺れるため、上手く四肢を動かすことが出来ない。

そうこうしているうちに、少年は自分を抱えたまま、深夜の街中
を颯爽とかつ素早く歩いて行く。此方の同意も何も受けずに。

視界の自動通路のように流れて行く真っ黒な地面から、それを感
じ取って、

「ちょ、離しなさいよ！」

「うるせえ！ ぶっちゃん俺も十三歳で未成年だから、こんな時間

に交番行ったら注意とか持ち物検査とか学校連絡とかされて面倒なんだよ！ 中学の説教担当体育会系教師がどれだけ怖いのか知ってるのか！？ 主に筋肉ムキムキマツチヨ汗ダラダラ系的な意味で！」

「いや、そんな自分勝手な中学事情話されても知らないわよ！ い

いから離しなさい！ 別にほついても……」

「だからうるせえ！ お前は俺を今日寝れなくするつもりか？ 俺に安眠妨害したくなけりや、今すぐお前の家が何処なのか教えろ！ 後三十秒以内に答えなきゃこのまま俺の家に行くからな！ 其処で朝まで監禁拘束決定だ！」

……コイツ、無茶苦茶——っ！

先程お人好しなどと言ったが、あれは訂正する。

この少年はお人好しなどでは無かった。善意の押し付けどころか、沸点低い現代風若者、簡単に逆ギレぶちかます自分勝手な独裁者。ツンデレ不良と言うのもはばかられるレベルだ。というかうるさいというのはなんだ。お前の方がうるさいわ。

いや、ここまで横暴かつハイテンションな態度をとって来るのは、自分の罵倒が原因でもあるのだろうが。だがそれでもここまでされてしまえば、もはや呆れる以外の感情が出て来ない。

「……あのね？ 一つ言いたいんだけど、いきなり喋りかけて来て返って来た返答にキレて、更には人攫いみたく小脇に自分の身体を抱えている人間なんか、自分の家の場所なんか教えると思う？」

「じゃ、どうしろってんだよ？ 言っとくが交番に行くなんて選択肢はもう無しだぞ。俺が困る」

……——本当に勝手かつ最低ねコイツウ！？

己も褒められたような人間では無いことは分かってるが、それで

もそう感じざるを得なかった。

もう本気で抵抗してやろうかとも思うが、やり過ぎてこの少年の言う通り警察などが出て来ても面倒だ。流石に、年齢的に警察の世話になるのは早過ぎる。

だから、

「……………はぁー」

仕方がない、と盛大にため息を吐き出した。

あからさまな此方の態度に、少年の眉が不機嫌そうに釣り上がるが、

「……………そっちの道を右」

「おう」

「……………」

ぼそつと小さく呟くと、明らかに歩くスピードが跳ね上がる。聞き取るのが難しいくらいのもとても小さな声だったのだが、聞き取るとはやはりこの少年はただ者では無い。

前へと身体が進む動きも、前へ前へ進む足の速さにくらべて、やけに全体の速度が早かった。背後からは普通は足音としてある訳のない『ピシッ』という亀裂の音が聞こえる。

これは明らかに、魔法を実戦レベルで扱える者の動きと力だ。しかしそれだとかしいことになる。確かに魔法は、練習と才能次第でこの世の誰もが使える技術だが、

……………普通、日本は一九四六年に第二次世界大戦敗戦後、作られた平和条約として『日本は必要最低限以外の魔法武力を持たない』つていうのがあるから、アタシみたいな特別なケースでも無い限り、魔法生徒育成国立高等学校か、警察及び自衛隊などの職業以外にお

いて戦闘系魔法の習得は殆どが禁止されてる筈なんだけど……。

世界法則の一つである魔法は、才能も関係するが基本的に個人が扱える最大の武器だ。

古来、まだ神々がこの星に普通に存在していた頃の時代より受け継がれし、魔力という精神感応素粒子を利用した魔法という技術は、使う者によつては国の一つや二つ傾かせるほどの力を秘めている。中では島を消し飛ばしたり、一対万の戦闘において勝利したなどという者も歴史のページには刻まれている程だ。

そんな、使い方によつては人をアリのように殺せる魔法。この技術をむやみやたらと今の平和に慣れ切った人々に教えてしまえば、間違いなく過去の再現とばかりに神話のような戦争が起きる。無論、国内、国外に関わらずだ。

しかも昔の、世界大戦などがあつた時代の場合、そういった幾つもの大きな争いがあつたために、開発された魔法兵器だけでなく、個人個人の一騎当千の力量も必要だった。が、平和を目指す現代社会において、大方の人々の生活に必要なのは人によつて力量や効率が変わる魔法ではなく、魔石や魔力水という魔力結晶体によるエネルギーで動き、誰が使つても安定した性能を持つ、魔法術式技術によつて作られる『魔法機』方面の力。

個人で、しかも殆どが戦闘にばかり特化している魔法は、世界の大方向が平和を目指す今では昔程の重要性和必要性を持たない。

なのでそういった魔法や魔法兵器に関する規則が緩い外国はともかく、平和条約がある日本においては戦闘系魔法を学ぶことについてかなり厳しい制限がついている。

その一つに十五歳以上という年齢制限があるが、

……といつても、才能と人格次第でそんな規則なんか幾らでもスルー出来るけど。

小さな声で少年に指示を飛ばしつつ、思う。

日本には、幼い頃に大量の魔力を持って生まれ、扱う術を知らないがために『爆死』したという記録も残っている。

人によつては、魔法という危険な力を学びたくなくても学ばなければそれはそれで危険だという、まるで運命に縛られているかのような者も居ることだ。

つまりは自分もその一人で、しかしどちらかというと自分は自分の為に学びたくて学んでいる。

彼はどうだろうか、と視線を上げて此方の指示通り歩いて行く少年の顔を見た。

黒髪黒目、平凡な顔立ちの彼は、どうなのだろうか。

「……アンタさあ」

「なんだよ、世間話か？」

此方の問いかけに、打てば響くとも言いたくなるくらい早く返答が帰って来る。

深夜の世界、少年の足音とお互いの息遣いの音しか存在しない中、彼の声は耳に強く響いた。

声の調子からして、機嫌は上々のようだ。素直に従うと機嫌が戻るとは、何処までも馬鹿正直な少年だと思う。

……バカね、本当。

夜道を歩く此方を心配して声をかけて来たというのに、早く家に帰りたく面倒なことをしたくないという自分の心を隠しもしない。此方の言葉にだって、子供だからとヘラヘラした笑顔の仮面を見せることなく、ただ率直に感じた言葉と行動で返して来る。

お人好しでありながら、しかし自分勝手。だがその自分勝手さが、彼のこの行為が善意からのものだと思分に教えてくれる。

本当に自分勝手、自分が最優先ならば、生意気な此方のことなどさっさと見捨てる筈だ。こんな面倒で接するだけで不快な幼児の自分を家まで送ったりする必要はない。

今までの人生で初めて見るタイプの人間だった。

七年という短い人生の中で、自分を前にこんな態度をとる人間を他に自分は知らない。

此方を子供だと思い、笑顔の仮面を被っている訳でもない。子供にしてはおかしい思考と言動に、気味悪げな態度を見せる訳でもない。完全に大人として、一人の魔法使いとして接する訳でもない。上から年下だと見下しながら、しかし自分を隠さず、正直であり続けている。

「アンタ、どうして戦闘系魔法が使えるの？ それ、この近くの中学の制服でしょ？ どう見ても十五歳以上には見えないけど」

だから、だから尋ねた。

この少年のことを、自分に闇の中話しかけて来た不思議な彼のことを、好奇心と別の何かの所為で知りたかった。

彼は、此方の問いに一瞬驚いたように固まり、

「……そんなこと分かったか、本当にお前七歳かよ。全く、将来が別の意味でちよっと心配になって来たな」

見せるのは、苦笑。

先までの馬鹿正直で面倒そうな顔ではなく、痛い所を突かれたという、誤魔化しの顔。

彼のその顔を見て、自分でも驚くくらい自然に口が動く。

「何よ、そんな顔も出来るんじゃない」

「お前から見て俺がどうという顔をしていたのか猛烈に気になり始め

たが、まあ、な。というかお前から見たらただのロリコンにしか見えないと思ってたから見抜かれるとは思わなかったぞ、ガチで」
「見抜かれたくないのなら、日常的に魔法を使うのは止めときなさい。動きとか言葉とか纏う魔力とかで直ぐバレるわよ」
「そういうことが言えるってことは、やっぱりお前も『特別生』の資格持ちか……、七歳にしては言動おかしいし、こんな時間に堂々と外歩いてるから多分そうだろうとは思ってたけどよ」

彼は前へと顔を向け、歩く速さを落とさず、

「しっかし七歳でか……。俺は十歳の時だぞ？ 国から『特別生』の資格貰ったのは。七歳なんていつたら俺が知る限りでも最速。まさかうちの家族以上の天才が居るとは……」

「別に。アタシだけの力じゃないわ。家が昔から魔法使い兼研究家の家系なだけ。まっ、アタシが天才なのは違い無いらしいけどね」
「……天才、天才か。全く、俺みたいな凡人には遠い言葉だな」

何気ない一言に含まれた何かに、前へと向けていた目線を上へ上げる。

そこにあるのは、前へと歩き続ける少年の横顔だ。平凡で、黒髪が歩く度に空気に揺らされてる普通の横顔。

だというのに、表情は臃げな街灯の光に照らされているのに、よくわからない。七年という年月でしか生きていない自分は、彼の表情がどういふものなのか理解出来ない。

若くして『特別生』になった者ならば、自分を含めて大量に見て来た。高い才能を持ち、何らかの理由から魔法という力を学んでいる。

だが、彼の表情に浮かぶ表情の理由が、自分には理解出来ない。見たことが無いから、分らない。

顔に浮かぶのは、怒りだろうか、不満だろうか、欲だろうか、喜

びだろうか、不幸だろうか、幸福だろうか。

ただ、どうも理解不能な表情の理由は彼にとっていいもので無いことくらい、馬鹿正直な癖に苦笑で誤魔化そうとする似合わない姿から分かる。

「——ごめん」

「……いきなり何謝ってんだよ、ぶっちゃけ怖いぞ。気持ち悪い」

顔は此方へと向けられ、浮かぶのは潰れた毛虫でも見るかのような気持ち悪そうな表情。

うるさい自分だって謝るなんて行為が似合っていないことくらい分かっている。殆ど無意識で出たんだから、仕方がないじゃ無いか。心の中だけで言い訳しつつ、此方をさりげなく心配そうに見てくる彼から、何故か熱を持つ顔を強引に逸らし、

「右！」

「へいへい」

やれやれ仕方ないとばかりに此方の怒鳴り声に応じる少年の態度に、頬が更に熱くなる。

どうしたことだ、と自分でも思っていた。自慢ではないが、他人に謝罪するなど生まれてから三度程度しかしたことが無い。

なのに、この少年は表面上怒っている訳でも不機嫌になっている訳でもないのに、自分は相手の顔色を伺う弱気な人間のように、無意識で謝っていた。

……ダメだ……。

どうもこの少年の前だと、調子が狂う。

そして、その調子が狂うという人生始めての現象を悪くないと思

う自分が居る。今まで考えたことも、想像もしなかった感情が胸の中に生まれていた。

ダメだ、と無意識で感じる。

この感情は、ダメだ。この感情は、一人で生きていくことには重みとなるものだ。この感情は、目的を果たすことには邪魔となるものだ。

故に、ダメだ。

……。

だけど、と無意識で感じる。

この感情は、必要だ。この感情は、誰かと生きて行くためには必要となるものだ。この感情は、願いを果たすためには必須となるものだ。

故に、だけど、だからこそ、

……なんて、言ったら

何か言わなければ、と思い、しかし答えが浮かばない。

七歳とはいえ、そこらへんの大人の数倍は知識と人生経験があると思っていた。生まれも育ちも特殊な自分は、大人と呼ばれるただの肉体が大きなだけの者たちよりも上、天才と呼ばれる存在感なのだ。

しかし、それは間違いだったのだろう。

何せ、今自分は、この感情を言葉という形にすることすら出来ないのだから。

「――」

だから、言葉が出ない。

口を開いて、閉じて、その繰り返し。

水の中で必死に息継ぎをするような、間抜けな行動。
そんなことしか、出来なかった。

「おい、何難しい顔してんだお前？」

「！」

声に心臓が跳ね上がった。

慌てた目で見れば、上から怪訝そうに少年が此方の顔を見てきている。

マイペースに進んでいた彼の足は止まり、二人の息遣いの音以外には無音の世界が生まれていた。其処まで考えて、自分が長い間思考にふけていた事に気がつく。

一人ならば黙って考え込むのもいいのだろうが、人が居たら話は別だ。特にその人物が、他人のことを心配するような者であれば。突発的（少なくとも自分にとっては）な返答を求められ、慌てた唇から勝手に言葉が飛び出る。

「べ、別に何でも無いわよ！　ただ、何時までこんな人を荷物扱いする気なのとかなんか制服から変な匂いがするとか髪の毛サボサじゃないのもつと気を使えとか本当に平凡な顔ねえとか歩いてる最中に強化魔法ミスってこけそうねえとかコイツマジ目がバカっぽいとかそんなことを考えてただけで……！」

「罵倒のオンパレードだなオイ！？　お前今俺の外見と内面の殆どを貶して潰したぞ！？」

別の本心が飛び出してしまった。

僅かに仰け反る少年の態度に、また新たな感想が浮かび、

「リアクションが一々大袈裟で芸人みたい」

「この腹黒幼女は本当に容赦ないな……！」

「お笑い芸人の『ユニバースフェアリー』だったけ？ あれにそっくりじゃない」

「あんな四十代後半なのにピチピチのビキニ着て『ユニバアアアアアアアスッ！』とか夕方バラエティ番組のステージど真ん中で叫ぶオバサンと一緒にすんな！ 俺はあそこまで頭パーンになるわけじゃねえよ！」

「……じゃあ少しは頭おかしい自覚があるのね」
「……………」

返って来たのは冷や汗を垂らし頬が引き攣る少年の顔と、
自分を支える力の消失だ。

自分の身体は腰を横から抱えられていた状態、四肢は重力に引かれて宙ぶらりんだつたため、まず身体が落下すれば一番長い足が地面へと着くことになる。

力が抜けた今の状態では、手で身体を支えきれず地面に上半身と顔面が叩きつけられる。

「——よ、つと」

だが、自分とて国から戦闘魔法を学ぶことを認められた『特別生』の一人だ。

このくらい、どうということはない。

まずは足裏のつま先だけを伸ばし、地面に着ける。其処から踵を着け、膝を曲げ、背中を後ろへと動かし、勢いのまま腰を下げ、重心を中心に持つて来て体勢を整える。こうする事で手を態々着かなくても綺麗に着地し、尚且つ両手がフリーとなり、直ぐに立つ事が出来る。筋力さえあれば、後ろに跳ぶ事も可能だ。視界も前へと上がっているため、前方不注意になることもない。

魔法ではなく、戦闘において小さく簡単で地味な、しかし重要な

動きの一つだった。

両足を今度は伸ばし、地面に対して垂直に立つ。
流れる動きで人を荷物扱いしたかと思えば、いきなり放置するよう
に手を離れた少年の顔を睨んで、

「もうちょつと丁寧に下ろせないの？」

「離して欲しいって言ったのはお前だろ？」

生意気な、とは言わないことにした。言っても無駄だし、無理矢
理誤魔化そうとしている雰囲気からして、スルーされるだけだろう。
ふんつと鼻息を鳴らし、少年より前に出る。

コツコツ、と自分の足音が鳴り、カツカツ、と後ろからの足音が
耳に届く。どうやら少年は一步後ろからついて来ているようだ。

何か言つてやろうかと心中に考えが浮かぶが、面倒なことになり
そうだと口を引き結ぶ。

そのまま無視するように、無言で前だけを見て進み続けた。

二人分の足音だけが、深夜の風に紛れて消えて行く。

無言のまま、三十歩程歩いただろうか。

背後から声が飛んでくる。

「そうそう、一応言つとくが」

「何よ？」

つまらなさそうに返して、返答を歩きながら待つ。

今更何を言おうとしているのか気になったが、態々止まって振り
返るほどのことではないだろうと足を前に、

「あんまり、簡単に他人を信頼すんなよ」

「……はっ？」

立ち止まって振り返った。

動きを停止させた此方に合わせるように、少年の足も止まる。

彼は何を考えているのか、虚空を眺めながら右手で頭を掻き、

「ようするに信じきれない奴に対して不用意に背中を向けたり、自分の家の場所なんか教えたりするなってことだよ。……それだけだ」

「………はつきり言うけど、アンタ頭壊れてる？ 神経回路イかれた？」

「うるせえ」

自分でもおかしいことを言っている自覚はあるのか、少年は否定の言葉を発しない。追求を逃れるかのように視線を逸らすだけだ。

気に入らないと、今度は心が素直にそう感じる。

だから、わざと顔をおもいつきり顰めて言っただけだ。

「いきなり喋りかけて来たかと思ったら、家までついて行くから家の場所教えるとか言い出して、文句言ったら人攫いみたいに連行して行って、今現在も一歩後ろからストーカーみたいについて来てる男のセリフじゃないでしょ。まさしく『お前が言っただけ』ってやつよ」
「俺だってそれぐらい分かってるよ馬鹿。ようは『俺だからこそ』ってやつだ」

彼は視線を此方に、やけに真面目な顔で、

「その年で『特別生』、しかも結構な実力を持つてるのは分かる。ただとお前はガキだ。自分では分かってねえかもしれねえけど、お前はガキだ」

「………」

ガキガキ連呼されて非常に五月蠅いが、彼の真剣な瞳を見て沈黙

を続ける。

鋭い刃のような視線を飛ばし、彼は言葉を紡ぐ。

「力があるなら、俺っていう不審者に会った時点で逃げるなりすればよかった。けどお前は逃げも隠れもしないで、あまつさえ挑発してみた言動までしやがる。プラスその後のお前が言う人攫い行動に対しても、お前は本気の抵抗をしないで家の案内までし始めた。……もし話しかけたのが俺じゃなかったら、お前どうなってたか分からねえぞ？　今の世の中、どんな奴が居るか分かったものじゃないしな」

「……まず、話しかけたのがアンタじゃなければ、それ等問題の殆どが起きない気がするんだけど……」

はあ、と今度はあからさまにため息を吐いてやった。

面白いくらいに彼は眉を上げ、不機嫌そうになる。

目も細められ、睨むと表現すべき視線が突き刺さるが、構わなかった。

言葉を、叩きつける。

「自分じゃなかったら、なんて何度も何度も言ってるけど、ようは他の奴は危ないけど自分は大丈夫って言いたいのか？　だから安心しろとでも？」

「……別にそういう意味で言った訳じゃねえんだけど……、お前がそう思うならそれも含みていいや。とにかく、今度から……いや、違うか。『今から』夜は特に気をつけろよ、まだガキなんだから」

そう言っただけで彼は足を進める。

ガキという単語に嫌味を返そうとした此方の傍を通って、自分の家へと通じる道の方へ。自分よりも前へと。

置き去りにするようで、その実、動きは先導の気配を持っていた。

動きの理由は分かる。
つまり、

「……隙を見せないように、背中を不用意に向けるなってこと？」
「そういうことだ。改めて考えると、こっちの方が安心出来るだろう？ 抱えられるよりも、後ろをついて来られるよりも。何故なら、背中を向けられるっていうのは相手が反撃をしにくいのに対して自分は攻撃がしやすいという、優位な立場だからだ」

さて、と彼は一息入れる。話は終わったとばかりに、お互いに背中を向けあったまま、一歩進む。

「お前の家が何処なのか、簡単に頼む。適当なところまで言ったら俺も家に帰るし、今度からは俺みたいなお節介野郎が得体のしれない不審者に住所知られたくないなら夜中気をつけとけ」

台詞が切られた。どうやら彼の中で、『お前が言うな』説教タイムは終わったらしい。

自分は背中を向けているから、彼がどんな顔をしているのかは分からない。向こうも背を向けているから、自分の顔の表情は分からない筈だ。

だが、自分で自分のことは分かる。今心に浮かんだ感情も、先のととは違って言葉に出来る。比較的簡単に。

……………何よ、それ。

この、思わず銃でもぶっ放してしまいたくなる熱の感情は。

「…………じゃあ一つ聞くけど、アンタはなんでアタシに背を向けてるの？ 夜道で背中を向けるのが不味いっていうのなら、アンタはど

うしてアタシに背を向けるのよ」

「そりゃ——」

「言っとくけど、アタシがガキだからとか、横に並ぶのが気恥ずかしいとかいう理由だったら速攻で叩き潰すから」

「何をだよ……」

何やら苦々しい、躊躇を含む言葉が返って、

「……譲歩だよ譲歩。背中向けた方が不利で危険なんだ。こっちが背中とつてお前に警戒されるより、自分から背中向けた方が面倒も少ないだろうが」

「アタシから攻撃されるとは思ってないの？」

「一応これでも近接系統の『特別生』資格持ちだぞ？ 不意打ちくらい対処出来るし、それに……」

「それに？」

おうむ返しに呟いて、身体を反転。彼の方へと、正面から向き直る。

対して少年は身体の向きを変えず、ただ此方へと背を向けて頭を掻いているだけだ。彼のブレザー型制服の真っ黒な背が、闇夜と同化しかけつつもなんとか視界に認識出来る。

彼は、言った。

「お前は、赤の他人を怪しいからっていう理由でいきなりぶっ飛ばすような奴じゃねえだろ」

反射的に、ああ、と呟きが漏れかける。

背中姿から感じる苦笑と照れの気配に、不思議と心が熱を持つ。熱に、今度は逆らわない。

「……分かったわ」

言って、前に出た。

ズンズンと足を無駄に力を入れて進めて行くと、あっという間に立ち止まっていた少年を追い越し、彼に背を向ける形になる。

おい、と咎めの響きが、自分の背後となった空間から来た。

「お前何やって――」

「アンタと同じよ」

言葉を被せて、遮る。

顔は見えないが、顔に浮かんでいるであろう感情は予想出来る。

きつとそれは、困惑。そして困惑の理由は此方の行動。

ならば、と思う。

答えをあげてやる、と。

「……『特別生』で結構な実力があるのかもしれないけど、だけどアンタはバカよ。自分では分かってないのかもしれないけど、アンタはバカ」
「……………」

呟く。背後に届くよう、声を大きくして、

「いきなり夜道を歩く赤の他人に話しかけて、自分が怪しいモノじゃないという証明すらしないで家までついて行くって言って、勝手に決めて人を荷物みたいに抱えて、更には無理矢理人の家まで案内させて。……アタシじゃなかったら、逆に犯罪者として捕まってもおかしくないわよ？ 最近は性犯罪の法律も厳しいんだから」
「……………」

背後からの響きはない。

息を詰めるような沈黙だけが、其処にある。

当然だ。何故ならこれらの言葉は、ワザと彼の言葉と似せたのだから。少しは驚いてもらわないと、困る。

自分は彼からの沈黙に満足感で頷いてから、

「でもね」

首だけを振り向かせ、背後へと視線を向けた。

振り向いた先にあるのは、やはり困惑の顔を見せる少年。

予想が当たっていたこと、そしてその何処か間抜けそうな顔に、唇の端が釣り上がった。

無意識で笑みが表情に出るなど、いつ以来だろう。

感慨深い気持ちになりながら、唇を動かす。

「さつさと家に帰りたくて、その気持ちを隠そうともしないで、でも夜道を歩いてるガキが気になって、面倒だとか何で自分がとか思いながら、それでも知らないふりをするのは目覚めが悪くて、ガキだガキだ言っただけの他人を親みたいに心配して、似合わないで自分で思いながらも年長として色々馴れないこと説教して」

顔だけを後ろへとやる自分を見ている少年の顔が、困惑から驚愕へと移り変わって行く。まるで、冬の雪が春の風に溶かされて行くように。

彼の内心を正しく示す表情を見て思うのは、

……分かりやすいのよ、バカ。

バカ、ともう一度心中で紡いでから、

唇から声と言う名の意思を込めた空気の振動を、発生させる。

精一杯の、

「しかも、こつちを、出会ってから数分程度の相手を勝手に『攻撃しない』なんて信頼して」

態度と、

「アンタはそんなバカなお人好しだから、アタシが今まで見たことが無かったバカなお人好しだから」

笑顔で、

「アンタの行動と、言葉。それ等全部を含めて」

宣言。

「——アンタのこと信じてやるわ」

背中を向けるという、信頼の証たる状態で、言い終わった。

腰に手を当て、なるべく呆れたように言ったつもりだが、どうだろうか。自分は、今、それなりの威厳を保てる姿だろうか。

……いや、ダメだ。

と自分の夜風に靡く前髪と服を視界の端に収めて知る。前髪は茶色の色が分かるくらい輝いているし、服だって蛍光色ではない装飾の細かな色まで分かるくらい明るい。これでは、此方がどんな顔をしてるか相手に丸わかりだ。頬の朱色も、恐らくばれた。

よく見ると、頭上に浮かぶ月が青白い月光を太陽の如く撒き散らしている。先まで雲に隠れていた月が、今ようやく夜空に出て来たのだろう。

なんというタイミングの悪さだと舌打ちしたくなるが、逆にいいタイミングだと心が感情を打ち消し合い、相殺する。

なにせ月光のお陰で、放心状態となつた少年の馬鹿顔をじっくりと見れたのだから。

それは、少年の前で無いのなら腹を抱えて笑える程の物で、顔に浮かぶ笑みが増す。

しかし少年は反応を見せない。ボーとした視線を、此方の顔へと釘付けにしているだけだ。

「……………」

「……………何よ」

暫しの沈黙の時間の後、問いかけた。

少年は放心状態のまま、未だに口を開けて馬鹿顔を晒している。眉をひそめた。放心状態がやけに長い。自分のセリフはそこまで

少年にとって驚くものだったのか。

否、恐らくそれだけではない。

一体どうしたのだと、問いをもう一度放とうとした時、彼が動いた。

「…………いや、始めてだったからな」

目を細め、太陽を見るように、まぶし過ぎるモノを見るかのような目。

黒い優し気で儚げな瞳が此方の全てを捉える。やはりこの瞳も、自分が人生で始めて見るものだ。

自分は、逃げない。反射神経が羞恥という感情によって首を前に

動かしかけるが、意思で押さえ込んだ。

ここは逃げては駄目な場だ。彼に、問いという自分の知りたいという欲求を満たすための行為をしなければいけない場だ。

だから、自分は尋ねる。

変わらない、背中を向けた態度で。

「何がよ」

簡素な言葉に、彼はああと深夜の暗闇を月光がライトスポットのように照らす中、頷いて。

「——信じてやる、なんて言われたのがだよ」

言葉にどれだけの感情が含まれているのかを知るのは、苦手だ。しかし、苦手だが、無知ということではない。故に分かる。彼が言った一言に、どれだけの感情と過去が押し込まれていたのかを。自分が、彼に会って数分程度の自分が、そう簡単に触れてはいけない事柄だろうということも。

「……………」

なので自分ができることは、彼から完全に背を向けることだ。

部外者が見てはいけない彼の顔から前へと、自分の家へと通じる道の先に視線を移す。

月光が照らす道を、一步踏みしめ、

「……………気持ち悪い顔してないで、早く行くわよ。きつちリエスコートしてくれるんでしょ？」

「ああ」

返事と数瞬違わず、ついて来る彼の自分とは違う足音が鳴る。
心なしか、返事には先よりも力があつた気がした。足取りも、軽い気がした。

それがもし、此方が信じていると言つたからなのだと思うのは、傲慢なのだろうか。

……どうなんだろう。

二人分の心地よい足音と、ひんやりと涼しい夜風、身を輝かせる月光を浴びながら、思考する。

出会つたばかりの彼のことをもつと知りたいと思うのは、自分がガキだからなのか。それとも、バカだからなのか。それとも、この数分の間に始めての連続で思考が麻痺しているからなのか。

そして、何よりも。

自分で、出てしまっている答えが一つだけある。

……我ながら、ガキっぽくて、バカっぽいわね。

——彼と自分が出会つたことを『運命』など考えるのは、自分の中の言葉に出来ない感情の所為だということ。

月と星の夜空。風と信頼する者の音を聞きながら、つくづくそう感じた。

この時まだ西暦二〇〇八年。

誕生日もまだ来ていなかった、とある夏の夜のことだった。

第三章・夕刻の剣劇 前半

ぶつかり合うということは
気持ちを代弁する
最強の肉体言語であり

「——さあ、始めましょうか」

……どうしてこうなった。

訓練場に張られた魔法機式内部空間拡大型結界の中で、彼はため息をついた。

己の手には、一本の丸い銀色の筒。丁度両手で握れるくらいの長さであるそれを一瞥し、視線を前へ。

間合いにして十メートル先、堂々と立つ少女が居る。

訓練場の巨大な窓からさす夕日に照らされた、茶色の髪と緑色の瞳を持つ少女。

左の胸元に空峰学園の校章が刺繍されたブレザー型の制服を着た、身長百四十程度しか無い彼女の両手には、大きな黒い塊が握られている。

黒い八角柱の金属体に、同色の小拳銃型グリップが取り付けられた物体。

魔法銃。しかも現代の流行りである火薬を使う物理武装の銃を真似た外装ではなく、無駄を削ぎ落とした根っこからの魔法銃だった。射撃術式が制御出来なければ暴発の危険性が高いと言われる上級者用の黒い実戦向け魔法銃を、彼女は二つも持っている。

……どーしてこうなったんだ。

そんな物騒な物を持って訓練場などに来て、更にはお互いに対峙している時点で、何をするのかなど既に分かり切っていたが。

「勝敗条件はどちらかが先に相手に有効な一撃を当てたら勝ち。模擬術式だから曖昧になるかもだけど……、お互い、それくらいの判断は自分で出来るわよね？」

「ああ……、分かった。分かりたくないけど分かった……」

「それじゃあ、模擬戦を開始するわよ！」

どうしてこうなったんだ、と彼、高城堅二はもう何度目か分からない言葉を心で呟いた。

相手は既に両手を胸の前に構え、臨戦体勢を取っている。

やれやれと思いながら、彼は前へと一歩踏み出した。

話は、少しばかり前に戻る。



「えーと……、はい！ これで登録完了です！」

何時も明るい担任教師の言葉が、やはり何時も通りハキハキと響いて、彼女の前に立つ堅二の脳内で駆け巡った。

場所は空峰学園一年校舎職員室。時間は陽がそろそろ地平線へと眠っていく一歩手前の頃。放課後の時間帯、堅二は担任に会いにここに来ていた。来る原因、自分を連行した少女は先生に書類を渡すため堅二よりも先生の近くに立っている。

職員室は教室三十個分程の、広々とした空間だ。入り口も奥行きも、教室の比では無い。

壁はベージュ色の壁紙が貼られているが、ボードやプリント、口ツカーなどで殆どが隠されている。

職員室の大部分を占領するデスクは幾つかごとに綺麗に固めて並べられており、一つ一つのデスクが教師にあてがわれているため、一つ一つに差異があった。

デスクの中心にノートパソコンは基本的にあるとして、書類を隅から隅まで積んでいたりと、教材であろう七色の金属球が置いてあったり、野球のバットが立てかけられていたり、作りかけのフィギュアが放置されていたり、そのデスクを使っている教師の人格が分かりそうな程の様々な差異がある。

その内の一つ。縦横斜めと統一性無く適当に積まれた教科書やプリントが特徴的なデスク付属の椅子に座る、226クラス担任、ルーシェ・スカイ先生はニコニコと、何がそんなに楽しいのか尋ねたくなる程笑って、

「これで真矢さんを代表者、堅二君を副代表者として生徒会立候補の登録を完了しました。選挙戦のルールは役員候補同士による個人戦。投票は役職ごとの個人投票。選挙戦及び投票は四日後の四月十一日！……で、問題ないですよね？」

「……問題ありません。承認、ありがとうございます」

まず彼女より立つ少女の礼儀正しい礼の言葉が述べられてから、堅二も連なるように、

「何で俺が副代表者なんだ、とか言いたいことはありますが問題ありません」

「あははー、そーですよ。一応会長候補は堅二君なのに、副会長候補の真矢さんが代表者なんですから」

「いや、先生そうじゃなくて……、いえ。何でも無いです、はい」

「ど、どーして堅二君はそんな哀れむような目で私を見るかなあ！

？」

……言っても無駄だろうなあ。

哀れみでは無く、言っても理解出来ないだろうなという諦めの目だったのだが、勘違いされた。

だが誤解を解くのも不可能だろうと思い、諦める。

黙ってはあ、とあからさまなため息を吐くと、下げた視線によって、左斜め前に立つ少女と目があった。

彼女は此方の顔をこっそりと伺っていたらしく、少しばかり思い悩むような皺が表情に浮かんでおり、

「……！」

此方の視線に気がついた彼女、真矢は慌てたようにルーシェの方へと向き直す。

はて？ と、先生からの抗議の声を聞きながら、堅二はその真矢の不思議な態度に首を傾げた。

……まだ屋上でのこと、引きずってるのか？

だとしたら本当に変な所で子供だなと、堅二は苦笑しなくなる。

さっきまではそんなそぶりなど見せ無かったくせに、とも。

屋上から戻ってカバンを手渡しした時には朝から見ている強気に釣り上がった目が特徴的な顔に戻っており、生徒会の立候補登録を五人分纏めてすると言われ、授業が終わった瞬間にほぼ強制的に連行された。

クラスの間中是一部除き全員啞然としていたが、今頃好き勝手に噂されているのだろうか。特にあの幼馴染は何故か暴走気味なので、今も暴走していなければなと願う。

そんなことをしでかしてしまっているというのにこんな変な所で気をつかわなくてもいいだろうと、何だかんだ言って付き合っている堅二は思う。

そして思いながら、ぐちぐちと抗議をして来るルーシェに疑問を投げかけた。

「先生、そういえば他の三人の分も俺達が書類提出しちゃって大丈夫なんですか？」

「そもそも先生はですね——、えっ、はい？　なんですか？」

「……大丈夫じゃないですね。先生が」

「し、失礼な！　私一応先生ですよ！？」

「……はあ。そうよアンタ、止めときなさい」

「ま、真矢さん！　いようし、真矢さん堅二君に言ってやって下さい！　私がちゃんとした先生だつてことを！」

「例え自分のこと自分で一応先生とか言ったり、自分を客観的に見れてない哀れな人だったとしても年上で教員、しかも担任教師だからそれなりの態度で接しないと後々面倒になるかもしれないでしょ。こつというのは表向き言っちゃダメなんだから」

背中から追い討ちをかけられたルーシェは、外の桜とオレンジの色が混じり始めた空を達観した表情で眺め始めた。

そんなルーシェの精神状態など知ったこつちやない真矢が、堅二の顔を大人が見せるような鋭い目付きで下から見えて来て、

「立候補登録は五人分纏めたものだからね。そりゃ希望の役職がダブってるならバラバラにしなきゃなんないけど、今回は五人一組だから問題無いわ。むしろ、下手に偏りがあるより綺麗に分かれていた方がチームみたいに扱える分、学園にとってもやりやす——、何よ？」

「えっ？　いや、まあ、何でも？」

「何故に疑問系なの……」

不可解そうに眉を上げた真矢の表情から逃れるように、あらぬ方向に視線をさまよわせる堅二。

頬を掻きつつ、心に思うことは、

……涙目の時の方が、年相応で良かったんだがなあ……。

神原辺りが聞いていたら「何がだ！？ 何が良かったんだ！？」と突っ込まれそんな思考をしていると、追い討ちから復活したらしくルーシェが、

「ついでに言うと、個人投票ですから役職一つにつき立候補者二名の中から各役員を一人ずつ決める訳ですが……、多分ブローニング君達の暫定生徒会グループか堅二君達の立候補グループ、どちらかに一括投票する人が多いと思います。だから、きっと半分チーム戦みたいになりますよ」

「？ そうなんですか？」

「ええ。幾ら種目が個人戦とはいえ、殆どの生徒は暫定生徒会と立候補生徒会の二グループのどちらかとして今回の選挙を見るので、どちらか一方の勝利になるでしょうねえ。そっちの方が、先生も楽でいいですが」

生徒の前で教師が楽とか言っているのかとツツコミを入れたくなるが、グツと堪える。

だから代わりに、という訳では無いが、堅二は口を開いて、

「……やっぱり先生達にとっては、今回の立候補って迷惑で」
「そんなことは無いんですよー」

言葉は、直ぐに遮られた。

反応の早さに軽く驚いている堅二に対し、いいですか？ とルーシエは指を立てながら前置きして、

「生徒会や委員会に立候補するのは貴方達が持っている当然の権利であり、先生達がその権利を行使した貴方達を手伝うのは当たり前のことです。そこに迷惑だとかそういったものはなくて、言わば先生達の義務。この学園に勤める以上、当然のことなんですよ」

それに、とデスク付属の椅子を軋ませる彼女は一息ついて、

「堅二君達が生徒会に立候補してくれたのは、先生達にとっても学園にとつても、逆に喜ばしいことなんですよ？」

「……？」

「簡単に説明するとですね、今回は選挙戦も無しに信任投票だけですんなりと生徒会役員が決まってしまった訳ですよ。それは、実はあまり良くないことなんです」

「……去年の教訓、ですよ？ 去年は生徒会会長だけが信任投票で決まってしまうって、後に役員も全員揃いましたが、去年の内は生徒会に対する反発や反対が幾つも起きたと聞きます」

「真矢さんって、本当に勉強してるんですね」

「？ 先生、つまりそれはちゃんとした選挙をやらないと、後々一般学生による反対や反発が多くなるってことですか？」

「堅二君って、本当に話が早いですねえ」

感想を述べ、更に彼女は一息ついて、

「これは去年、空峰学園が生まれてから初めて、いや他の全学園においても初めての異例の事態のお陰で理解させられたことですが……、立候補が一名だけということは、生徒達は自分達の学年の生徒

会を決めたくても選択肢がまず一つしか無いんですよ。投票は信任投票で、一票でも入ればその人が役員になりますし、そもそも選ばなかったら選ばなかったらで代わりがいる訳でも無い。よって自分の嫌な人だったとしても、その人がほぼ確実に生徒会役員になっちゃう訳です。……当然、そういう『自分の選んだ者では無い』という要因は、一般学生の不満を増幅させる原因になります」

「加えて、選挙戦が行われていないから実力に対する信頼も弱いわけだから、信用出来ないという負の要因が生まれ、そこから一般学生の反発を促進させるのよ。本来なら対したことではない小さな反対運動でさえも、大事になる程に、ね」

ルーシェの説明に追加するように呟く真矢の口調は、堅二に対して言っているからかタメ口だ。

高い声の言葉に対し、彼は、

……一応、俺も先生と同じで年上なんだけどな。

だが、今になって急に敬語を使われても気持ち悪いだけだなと思いき直し、うんうんと納得して、

「つまりキチンと何人かの立候補者の中から選び、選挙戦を行って実力を示しておかないと、後から一般学生達の不満や反発が増幅する可能性がある、と。そういうことですね」

「アンタ……、今何か別のことに納得してなかった？」

いやいやいやいや、とジト目で睨みをきかせてくる真矢に対して、適当に誤魔化しながら、

「だから先生達は、今回の俺等による立候補が良いコトだ？」

「そういうことですねえ。今年は五役が全員揃ってるとはいえ、去

年が去年でしたから。でも選挙戦をしようにも他の立候補者が居ないとダメですし、生徒に立候補しろとか強要は出来ません。だから、この降って湧いたような立候補は他の先生達も喜ぶと思いますよ」

その言葉にふと思考が浮かび、視線を真矢へと合わせ、堅二は尋ねる。

「……まさか、そこまで全部計算してたのか？」

「さあね。想像に任せるわ」

問いかけに、確かな答えは返ってこなかった。

普通に考えるならば偶然だろう。しかし堅二は腕を組み、凛々しい顔を見せる真矢を見てみると、どうも全て計算して実行しているのでは無いかと勘繰ってしまう。

……気にしても仕方ないか。

例え必然であれ偶然であれ何であれ、彼女が天才で年齢に似合わない程大人びているという事実は間違いない。

だからそれ以上考えるのは止めにして、堅二は前へと視線を戻す。彼の視線の先に座るルーシェは真矢から渡された書類を封筒に入れ、デスクの上にあるノートパソコンと宙に浮かぶ半透明の魔力画面を交互に見ていた。恐らくは、立候補に関する内容と自分の本来の仕事をしているに違いない。何せ、総クラス数230クラス、人数は約8850人という学年の一教師なのだ。幾ら教師の数も多いとはいえ、新学期が始まったばかりの今の時期、忙しくない筈がない。

……用も済んだし、そろそろおいとまするべきか。

用は終わった。もう職員室に居る理由はない。
だから堅二は一步下がり、

「俺達はそろそろ退出――」

「あつ、堅二君はちよつと残ってもらえますか？ 立候補とは別件で用事があるので」

「……了解しました」

言葉の途中で遮られ、怪訝になりながらも頷く。

別件とは、一体何だろうか。特に何をした覚えも無いのだが。朝の飛び起きが原因かとも思うが、たかがあの程度のことでは用がある
と残らされるだろうか。

終わりの見えない推測をする堅二。そんな彼の傍を、退出するべく
出入り口へ歩く真矢が過ぎ去り、

「訓練場ね」

眩きを残して、退出していった。

職員室の雑音内においてその声と音は聞き取ろうと思わなければ
聞こえないレベルだが、それでも充分堅二の耳には届く。

……せめて返事くらいさせてくれりゃいいのにな。

それとも、用事のある此方へ気を遣ったのだろうか。

彼女が消えて行った扉を眺めながら考えていると、背後から小さな
笑い声が聞こえた。

真矢の背中を見るために目を逸らしていた前を見直すと、そこに
手を口元に当て身体を前に傾ける女性の姿がある。

「……、先生？」

「あ、ああごめんなさい。ちょっと、堅二君の笑い顔が良かったので」

「……はい？ 先生どうしました？ とうとう脳の配線が致命的にイカれて、俺の顔が福笑いみたいになっても見えませんでしたか？」

「堅二君……、堅二君は本当に、先生を先生だと思ってるんですか？」

突然の問いに、そりゃあと堅二は前置きして、

「先生は確かに先生らしく無い所も多いですしぶっちゃけ初めてあった時は運が無いな俺、なんて思ったりもしましたが、先生が先生として最低限の仕事をしたり、生徒達の力になってるのも確かです」

「なんでだろう……、先生、褒められてる気がしないんですが」

「自業自得かと。主に朝のHRに遅刻するのとか、学園見学の時に二年校舎に行き間違えるとか、そういったのが。まさか初っ端から新米教師らしい失敗をかましてくれるとは思ってませんでした」

「クリティカルに痛い所を！ 痛い所を！ 本当に容赦無いですね！？」

「だけど、そもそも226クラス自体イカれた連中で構成されたイカれたクラスなので、それくらいなら大丈夫かと。充分、先生は先生らしいと思いますよ」

「へっ？ 226クラスの子達はたまに元気が良すぎますが、基本いい子達ですよ？」

「……………」

大丈夫じゃないかもしれない。

不思議そうに首を傾げて来る担任の姿を見て堅二は戦慄と共にそう思ったが、冷や汗を垂らしつつ話を逸らすことにした。

「と、とにかく、先生の用事ってなんです？ 自分、何かしました

か？」

「何でそんな風に挙動不審なのかが先生は一番知りたいですけど……」

ふう、とルーシェは息をつきながら手に持っていた書類の封筒をデスクに起き、ノートパソコンを取り敢えず一時停止させて、宙に浮かぶ魔力による画面を掻き消す。

その忙しい筈の仕事を中断する行為にあれ？ と堅二が疑問を思いう前に、

「実を言うと、特に用は無いんです」

女性用仕事着のスカートに隠されていた足を組みながら、ルーシェはそう言った。

……はい？

堅二の心中に浮かぶ疑問の声が現実に出る前に、金と黒、二色の髪を持つ彼女は此方を懐かしそうな、嬉しそうな顔で見ながら、

「ちょっと話がしたくて。実はこれでも私、結構堅二君のこと心配してたんですよ？ 半年前、初めて見た時からこの子は危ないなって」

「危ないなって……、いきなり不良扱いですか、俺」

「そういう方向の危ないって意味じゃなくて、何の目的も希望も無さそうで、人生つまらなさそうだなって。そういう危ない、ですよ」

反論の言葉が、出てこなかった。

口を閉じた彼を見ながら、ルーシェは言葉を続ける。

「残念なことに、先生は堅二君の事情を知っちゃってますからね。あまり干渉するのもあれだと思って、千羽君達とはしゃいでる堅二君をチラチラ見守ってたんですが」

「先生。アホとはしゃいでるんじゃないですか。付き合ってたってんです、俺が」

「堅二君って意外と素直じゃないですよねえ」

不機嫌そうに眉を寄せるが、ルーシエは苦笑しているだけだ。訂正が出来ないまま、彼女の言葉は紡ぎ出される。

「それはいいとして、刹那的な生き方を選ぶようとしている堅二君を見て先生は思った訳です、この子をどうにかして前に向けさせられないかと」

「先生が俺の事情を知ってるなら、分かってるでしょうに。俺の心に、そんな前向きに突き進んで行くような気力がもう無いってことくらい」

「うん、そうですね。先生もそう思います」

教師としてはどうかと思う同意をして、しかし彼女は一息。

「でも、じゃあ何で真矢ちゃんに付き合ってるんです?」

「――」

言葉は、出てこなかった。

ルーシエは尚も、此方に笑いながら語りかけて来る。

「生徒会立候補なんて、つい数時間前の堅二君なら信じられないくらい前向きな行動です。しかも、将来に多大な影響を与える、ね。そんな行動を、どうして将来へのやる気を失ったらしい堅二君がするんですか？ あ、入学した時にはこのまま平和に学園生活を送ればいいなんていう、適当なことを言っていた堅二君が」
「……それは、あのガキが強引だから……」

言っていて、それが言い訳や誤魔化しでしかないことを理解する。真矢が強引だった？ そんなの自分なら簡単に振り払えるし、今までだってそうして来た。こんな将来に関わる大きな事柄を何となくや一人の少女のためにやろうと思える程、自分は前向きでは無かったではないか、と。

大体、自分は高校生活を適当に過ごして行くつもりでは無かったのか。何故あの、茶と緑の少女の手助けを、こんなにもしようとしたのだろうか。しているのだろうか。

本当に自分は、ただあの少女の理由が気に入ったから手を貸しているのか。そこに、もっと別の理由は無いのか。

学園入学時とは明らかに違う、自分という存在の変わり様への思考を張り巡らせる彼に、ルーシエは、

「堅二君、気がついてましたか？」

何を、と尋ねるまでも無く、彼女は答えをよこして来る。

「さっき真矢ちゃんの背中を見送った時にですね、仕方ないなって自然な笑顔を見せてたんですよ」

「……………」

「笑っちゃったのは、その笑顔が私の尊敬する人にとってもよく似てたからなんですよ。自分のやるべきこと、やりたいことに対して見せる、男の子の笑顔。つまり、前へと踏み出すための何かを持って

いる人の笑顔」

言葉を切り、ルーシェは目を細め、

「水葉ちゃんにも、千羽君にも、黒君にも、千春ちゃんにも、その他諸々の人達にも出来なかったことを、真矢ちゃんはたった数時間でやってくれたんですよ？ 私は半年、他の皆が二年以上かけて出来なかったことを、堅二君に前を向けさせるという行動を取らせたいんです。バカやって笑うのとは違う、優しい笑顔を」

「……………」

「最初に堅二君の所に行ってストーカー発言したのはびっくりしましたが、それが堅二君を動かす最初のキツカケになったのなら喜ぶべきことなんでしょうね……、ちよつと悔しいですけど。きつと水葉ちゃんも」

「………… 本当に、何故か俺の周りはお人好しばかりですね」

………… 自分には、勿体無いくらいに。

本当に悔しそうにしている担任教師の姿に、心底そう感じる。何で自分何かの周りに、こんな良い人達が居るのだろう。何で自分の周りには前に笑いながら進める強い人達ばかりなのだろう。

堅二の自問は、昔から幾度となく繰り返されて来たものだ。

だから経験上、悩んでも悩んでも終わりが来ないことは分かっている。

終わりが来ない悩みは、少なくとも今は考えない。

なので話を変えるように、

「それにしても、先生のことだからアイツのことも『ちゃん』って言うかと思いましたが、『さん』っていう予想外の選択じゃないですか。どうしたんですか先生？」

「そこでどうしたんですか先生って頭を心配するようなイントネーションで尋ねられるのって、結構イラツと来ますね！？ フレンドリーさで有名な先生でも初対面の相手にちゃんは無いですよ！？」
「俺はいきなり初対面で『ケンちゃん』とかいう昔からの友達みたいな呼び方されたんですが……。後先生が有名な理由はフレンドリーさでは無いと思います」

「ま、また堅二君は私の過去失敗を掘り返して……。でも先生が有名なのは分かっているようなので大目に見て上げます！ もっと褒めてくれるともっとよし、ですよっ？」
「はははっ」

……『有名』良いことで』って訳じゃないんだけどな！。

勿論言える筈が無いので、適当に笑ってごまかした。

ごまかしが通じたのか、ルーシェは此方の前で胸を張って、

「では、そんな先生から真矢さんに関してアドバイスです」

「はははっ、はい？ 何でしょう？」

「ちゃんと真矢さんに感謝すること、その真矢さんを悲しませるような真似をしないこと、そして何より自分の気持ちに嘘をつかないこと」

「……？」

「アドバイスってよりも忠告、っていうかお願いですね。さっきみたいに真矢さんを不安させるような問いかけはダメですよ？ 女の子は意外とデリケートなんですから」

「さっきの問いかけて、先生達にとって立候補が迷惑かどうか尋ねたあれですか？ あれくらいであのガキが……」

「もう！ 堅二君は本ツ当に女心が分かかってないんですねえ」

ふう、とあからさまにかぶりを振りながら呆れるようなルーシェ

の態度に、堅二は口を不満気に窄めた。

反論したかったが、事実なので反論出来ない。

それを彼女も分かっているのか、一際強く此方へと指を突き付けて、

「とにかく、真矢さんに感謝しつつ、傷つけないようにして下さいね！ 肉体的にも、精神的にも！」

「感謝はともかく、まあ了解です。精神的には無理かもしれませんが」

堅二は言葉を止め、苦笑いして、

「流石に肉体的に傷つけることは無いと思いますよ。幾らこの俺でも」



……と言った直後に模擬戦だからなあ……。

訓練場の一角、結界内の西側において堅二は光剣の柄を握り締めながら、憂鬱とした気持ちのまま全身へと力を行き渡らせていた。

憂鬱の原因はいきなりの有無を言わさない模擬戦、そして一着しか無い制服のままそれをするということに対する物が主だ。もしかしたら、職員室からここに来るまでに何故か運動場に首から下を出

した姿でめり込んでいたラグビー部メンバーとか、『豚骨ラーメン研究会　塩ラーメンは敵』が豚骨ラーメンが入った青いポリバケツを廊下に次々と生産していたりとか、そういうのを見たのも原因かもしれない。

……　そういえばなんか屋上から土下座しながらバンジージャンプしてた奴も居たが、バンジージャンプ部は一体何処に行こうとしてるんだろつな……。

今更なので、深く考えず前を見る。

空峰学園は上から見ると『凹』の形をした校舎が三つ、各学年ごとに建てられ、少々離れた三つのそれを大き目に覆うように巨大な円状の壁が作られている。その円状の中には、校舎だけでは無く部活棟や体育館などの建造物、プールや運動場などの場所もだ。

そして魔法を学ぶ場として当然のように、普通の学校には無い施設も多数存在していた。

その内の一つとして、訓練場と呼ばれる物がある。

約百メートル四方の、それなりに巨大な体育館にも似た建物だ。弧を描く丸っこい屋根に、なるべく上側に取り付けられた幾つもの窓によって太陽の光が取り入れやすくされた真っ平らな空間。ワックスを塗られツルツルになっている床は、しかし完全に真っ平らな訳では無い。所々に、灰色の光を放つ丸い石のような物が埋め込まれているからだ。

魔法機。それも一度術者の手によってチャージされた魔力を使って、一定の現象を起こし続ける半自動術式魔力型の魔法機。

堅二の後ろにも二つ、そして反対側にも二つ、その魔法機が込められた魔力と入力された術式通りに稼働していた。

稼働の効果は、灰色の壁として現れている。四つの魔法機を繋ぐように、灰色の光が壁となって存在しているのだ。

その壁、結界の効果は、

……決められた領域内の空間を拡大する、空間系拡大術式。

色が濃すぎて壁の向こう側は見えない。

だが見えていたら、歪曲した不思議な空間が見えていただろう。

何せ光壁に囲まれたここは本来ならば十メートル四方の空間だが、その十メートル四方を確立していたであろう機械の力により、空間が広げられ五十メートル四方の空間となっている。単純に計算して、二十五倍の空間拡大だ。

これは地下にある三学年共用の超巨大訓練場とは違い、一学年ごとにある地上訓練場を効率良く扱うためにある。

魔法を発動し訓練する、ということにおいて空間は広い方がやりやすいし、結界によって封鎖することで仕切りの一つも無いこの訓練場内で事故を起こしにくくするという狙いもあるだろう。それに、光によって中と外を遮って中の光景を見えないようにするという理由もある。最も、今訓練場を使っているのは二人だけなため、その機能は必要無いのだが。

そんな広くなった空間の十メートル先に、彼女は居る。

空峰学園の制服に身を包み、両の手に黒き鋼の塊を持つその姿は、不動と形容していい程堂々としていた。

茶色の前髪の下から覗いて来る翡翠の瞳は、迷うこと無く此方の顔へと向けられ、小柄な身体は屈んで重心を下げることに抑え、まず小さく見える。

彼女、真矢の構えは真っ直ぐに重心を落とし、彼女から見て右手を胸と首を守るように斜めにかざし、左手は更にその下で腹辺りに持ち上げられたものだ。足も肩幅分開き、右足はべったり地面に足裏がついているが、左足はつまさき立ち状態だ。

それ等が示すのは、

……全方位、何処にでも跳べる構えか。

銃使い、それも双銃使いとなれば至極当然の構えだ。

銃という武器を扱う者にとって、間合いというものは途轍もない意味を持つ。それはありとあらゆる戦闘方法において言えることだが、銃使いなどの飛び道具使いになると重要度は跳ね上がる。

ある程度調整が可能な魔法や、最初から合った間合いが決まってしまうている剣などと違って、飛び道具は何かを飛ばすという攻撃手段上、間合いの取り方次第で実力が大きく変わってくる。

近過ぎず遠過ぎず、自分に最もあった距離で戦う銃使いこそ一番強い。そして彼女の場合は、此方が先に動くことを考えての身構え。此方の動きに対応するための構えだ。

……こつちから見て右方向には動きにくそうだが、それくらい足さばきでどうにでもなるか。

彼女の構えを冷静に分析しながら、堅二は足に力を入れ直す。

此方の構えは真矢とは異なり、基本的に前傾気味だ。

右足を前に出し、体重も右半身側に集めて左足は蹴り足として後ろに下げる。

そして光剣は刀身を出現させずに正眼に構え、両手で握る。

堅二の戦い方は光剣という武器からも分かる通り、殆どが接近戦だ。勿論、魔法による飛び道具が無い訳では無いが、それでも近中距離戦闘が最も実力が出せる間合いなのには違いない。

なので必然的に、堅二はまずこの十メートルの間合いを一メートルから二メートルくらいにまでに縮めてしまいたかった。

だからこそその前寄り構えであり、切り込み姿勢だ。

……こつちは光剣だが、向こうはパワー重視の魔法銃か。

真矢の手の中にある八角柱の銃身を持つ魔法銃は、銃方面に詳し

く無い堅二から見ても扱い辛い代物であろうことは理解出来た。

普通、魔法銃というのは術式をあまり刻まない。魔法銃本来の仕事は術者の精神イメージを高めることと射撃の連射性を高めることであり、それ以外の術式を詰め込むと安全性が失われて行くのだ。

引き金を引けば撃てる物理武装の銃と違って、魔法銃はあくまでも術者が魔力を練り、術式で変化させた魔力弾をコントロールするのも術者。

だから、魔法銃は本来術者の補助としてしか使われない。そのため、現代の火薬式の拳銃に似せた外装や機構、または実際に物理武装としても使える魔法銃が多いのだ。

だが軽く見ただけでもあの銃は、外装にすら単体では目に見えないレベルの細かい術式を刻みまくっている。恐らく、内部はもつとだろう。

近代の魔法機は日用品や兵器を問わず、機体に刻むのは回路や回線としての術式であり、術式の本体はチップと呼ばれる金属に圧縮して刻み込まれている。それにより、術式への外部干渉を抑えたり耐久度を上げたりもした。

なのに外装にまであれだけの術式を刻んでいたら、本来術式を内蔵すべき内部はどうなっているのだろうか。

「その銃、なんかえらく射撃強化や射程強化とかの威力を上げるための術式しか刻まれてないっぽいけど、暴発したりしないのか？」

「あら、アタシがこの程度のじゃじゃ馬を扱い切れないと思ってるの？ 仮にも、生徒会副会長を目指す身なのに」

自信たっぷりの返答が、芯の通った声で返ってくる。

彼女の薄いピンクの唇は軽く吊り上がり、好戦的な笑みを象っていた。

その笑みを見て、やはりあの魔法銃は完全に上級者向けのオーダメイド品だと確信した。

……だとしたら、それを扱えるだけの实力があるってことだな。

口だけの上辺を取り繕うような人間で無いことは、半日にも満たない付き合いだが既に分かっている。

故に、武器相応の实力があると判断していいだろう。

そもそも、彼女は僅か十歳にしてこの学園に転入し、『特別生』の資格まで持っているのだ。

実力自体も天才という言葉が似合う物だと、そう考えていい。

……そしてそんな奴が、俺が暫定生徒会会長に勝てると思ってやがる。

今一度、その事実を確認して、真っ正面から彼女を見返した。

丁度いいと、そう思う。彼女の实力がどれほどのものか、彼女の戦術眼は信用に値するのだろうか、これで確認出来るのだから。

互いの視線が交差し、訓練場の結界内に張り詰めた空気が満ち始める。

目に見える変化が起きた訳ではない。ただ二人の間の空気の質とも言つべき何かが変わった。

踏み込むのを躊躇わせる、戦場の空気。

「一つ聞きたいんだが、暫定生徒会会長って、生徒会が強い奴じゃないかならないって条件から考えるとんでもなく強い奴だよな？」

「そうね。多分、現時点でのこの学園内において一番強いんじゃないかしら？ オールラウンダーなタイプだし、断定は出来ないけど」「そうか」

ありのままの事実を返して来た彼女に、堅二は頷き、始まりの合図の代わりに、

「だったら、行くぞ」

全力で跳んだ。

第三章・夕刻の剣劇 後半

「っ！」

堅二は初歩から手を抜かなかった。

彼女がどういう理由で模擬戦をしようとしたのかは分からない。分からないが、堅二にとってこれは彼女を確かめるための模擬戦だ。手を抜くつもりはないし、油断するつもりもない。

だから、跳ぶ。

後ろに下げていた左足が蹴り飛ばすのは大地と、水色の加速術式。円陣型のそれを学校指定の革靴で蹴り飛ばせば、砕け散った術式の力が肉体を前へと加速させる。

本来ならば五メートルも跳べば一度足を付くべきだが、彼の加速した身体は十メートルの距離をたった一歩で詰めきった。

人によっては消えたように見えるだろう高速のひとつ飛びの終わりとして、堅二は滑るように右足を訓練場の床へと食い込ませる。普通の地面ならば急な停止の反動に耐え切れず砕けるか最低でもヒビは入るだろうが、魔法による衝撃を前提として作られた床はビクともしない。

着地の轟音が耳に響く前に、堅二は光剣を左手だけで持ち、右肩上に上げた。腕はバネを溜めるように曲げ、光剣の黄色い刀身は既に展開済みだ。

だから、

「おお……っ！」

背に沿わせていた光剣を、一気に振り抜いた。

軌道は右上からの袈裟斬り。右足が前に出た今の状態では、無理矢理とも言える身体の捻りを伴った斬撃だ。

だがこれにより、加速による慣性力は消失し、左足は床へと体重を乗せて叩きつけられる。振り終えたら、肩幅で揃えた両足により次の動きを簡単に取れる体勢だ。

……さあ、どう凌ぐ！？

動きは既に音速を突破している。

そんな高速の世界で、堅二は己の魔力による剣が黒の双銃を構えた少女に迫るのを見ていた。

普通ならこのまますっぱりと彼女の此方から見て右肩から左腰まで音も無くスパツと切り裂くだろうが、生憎と今は模擬戦中だ。模擬術式がある以上、大事には至らない筈。

模擬術式というのは普通の魔法術式に付加するように備え付ける術式であり、この術式を用いた魔法攻撃は殺傷力が一気に落ちる。

第二次世界大戦後、平和を目指す日本が主導となって開発した全魔法威力変換術式である模擬術式。だがそんな模擬術式も、万能では無い。

あくまでレーザーなど魔力の塊による攻撃は純粹な衝撃と精神へのダメージに変えるだけだし、打撃的、物理的な物はクッションのような魔力の膜で覆うだけなので、状況次第では相手を死なせる可能性も勿論存在する。

現在堅二も光剣に対し模擬術式を使用してはいるが、固体状態の光剣がただの棍棒になったようなものなので、ぶつけ方と力次第で相手を潰れた果物のようにすることくらい簡単だ。

そしてこの一撃は、正しくそういった一撃だが、

……だが、躲すか！？

かわされた。

防ぐのではなく、此方の右側に飛び込むように。

半分程横身のまま銃を持った腕を伸ばし上半身を前に出した状態で彼女は宙を飛ぶ。

いい判断だ、と堅二は思った。もし防壁系の障壁で斬撃を防いだら、障壁ごと右拳で殴り倒す予定だったのだから。

しかしながら少々、

……強く飛び過ぎだろ！？

飛ぶ真矢は、速さから見て此方の右斜め後方、五メートルの位置に『落ちる』。

着地ではなく、墜落だ。

何故なら彼女の姿勢は横向き、水平になり過ぎている。そして尚且つ、早過ぎる。このままでは、頭から地面に飛び込むことになるだろう。

此方の右足からの蹴りを警戒しての水平飛び込みだろうが、着地に失敗しては意味が無いが、しかし彼女のことだ。なんらかの魔法で墜落を緩和させるか、立ち上がるに違いない。だが、墜落の可能性も無い訳では無い。

その生まれるかもしれない墜落の瞬間を狙おうと、堅二は光剣を振り切る勢いのまま、左回転で後ろへと向いて、

「っ、と！」

「なっ！？」

クルン、と頭から墜落せずに体術だけで一回転する真矢の姿を、其処に見た。

それも頭が付く前に空中で縦に回転して足から着地したとか、そういう話ではない。彼女は確かに、堅二の予想通り頭から飛び込んでいたのだ。

ただし先に左手に持つ魔法銃を床に押し付け、それを支えにしながら、だ。そして彼女はまるで曲芸師のように腕を伸ばし小柄な身体を瞬時に持ち上げ、足から床へと着地し直す。動きに、制服のスカートが花びらのように舞った。

堅二が驚いたのはその手際の良さだけで無く、

……両手が塞がってるから、そういう動きは出来ねえと踏んでたのによ……！

双銃使いの最大の弱点は、両手が塞がるということだ。

これは殆どの武器に言えることだが、大剣やライフルなど少しの間なら片手だけでもいい武器と違い、双銃や双剣は常に両手が武器で塞がっている。

だからこそ、両手を使った身軽な行動が取りにくいのだが、それを彼女は銃を手のように使うことで乗り切ってきた。

よく見ると、魔法銃は全体を黒の金属で構成しているが、銃口付近が灰色の強化ゴムで覆われている。恐らくは、こんな状況下で使うことを想定した作りだ。

両手を使わなければやられる、そんな状況に彼女は見事対応して来た。

そして、反撃が来る。

「上等ッ！」

光剣を振り抜き、左回転で背後へと身体を向けて背中側から襲われるのを防ぐ。

しかし振り向いた時には、真矢は両足で地面を蹴り、此方へ向け

駆けて来ていた。距離を取るのではなく、近づいて来る。

……銃使いなのに、接近戦を挑むつもりか！？

加速魔法で一気に距離を零にした堅二と違い、彼女は肉体強化による力だけで地面を蹴り飛ばし足音を複数上げながら走る。肉体強化をしているにしてはゆっくりなそれは、彼女が何らかのアクションを移動中にする証拠だ。

その堅二の推測を裏付けるように、

「行くわよ……！」

高速の、音を超える速度の魔力波による魔力音声を紡ぎながら、彼女は此方に向かって駆ける。

真矢の走り揺れる小さな身体の重心は前寄りで、武器たる銃を持つ手は風に靡かせるように後方へとやっていた。

彼女に握られる、銃口を完全に後方に向けた二つの魔法銃。その魔法銃の銃口前に黄色の魔方陣が音無く展開し、

《形成系光固術式：名称『魔法銃刃』》

二つ展開されたひし形魔方陣の内部には、そんな日本語が書かれていた。

四辺の長さが十センチ程度の黄色に光る、ひし形の魔方陣。黄色の残照を散らしている魔方陣の上に重なるように、更に四角い魔方陣が出現。

真矢の精神に反応し、象られた術式が、

《発動》

魔方阵を砕いて、銃身の先にその力を出現させる。

堅二は術式の効果を、身に迫る脅威として目撃した。

長さにして八十センチ程。縦幅が二十センチはありそうな、黄色い光の塊。それは薄く、長く伸び、先端を鋭く尖らせている。

光の刃。堅二の持つ光剣と同等の物が二つ、黒の魔法銃を基準として生まれていた。

「……！」

光刃を伸ばした銃を手に、真刃は緑の瞳を大きく見開きながら特攻して来る。

動きは軽く、力強く、速い。

堅二から見て胸元よりも下という体の小ささも、一層その動きを捉えにくくした。

……わざわざ近接戦を望むなんて、こっちを試すつもりか！？

真矢の方に、ここで接近戦を挑むメリットは無い。

寧ろここで近接戦を挑むのは、愚策としか言いようの無い類いの選択だ。何せ彼女は、自分が接近戦主体の魔法使いであることを知っているのだから。

これは、戦いを有利に運ぶための選択では無い。此方の接近戦という得意分野を試す選択だ。

現に、真矢の顔には笑顔が浮かんでいる。此方がどう動くのか、観察するような笑顔が。

「データだけじゃ、分からない所を見せて貰うわよ！」

一声と共に、斬撃が来た。

初撃は堅二から見て、左の光刃から。一度右側にやり、薙ぎ払う

ように振るう足下への横薙ぎの斬撃だ。

光刃は銃身の先に真っ直ぐ伸びているため、グリップは光刃に対して垂直となっている。

その構造上、斬撃は剣というよりも鎌から放たれるような物だった。

弧を描き、刈り取るように振るわれて来る黄色の刃を、堅二は床を蹴って跳んで躲す。

直後。床を軽く蹴り、飛び越えるように躲した彼に二撃目が突き込まれた。

左の刃の反対側、右の刃による突き。それは空気の層を音すら間に合わせずに突き抜け、両足を浮かせる堅二の胸元に刃を突き立てようとしていて、

……双剣はこーいう連撃が面倒なんだよな！

堅二はそれを、光剣の刀身を突きの軌道上に被せることで防いだ。直後、一拍という時間すら置かずに互いの光刃がぶつかり合い、魔力の火花を散らして、

「つと!?!」

空中に居た堅二が、物理法則通りに吹き飛んだ。

余程突きの威力が大きかったのか、彼の体は数メートルの距離を飛び、そのまま両足から飛行機のように滑り込むように着々する。耳鳴りの悪い摩擦の音と、電気でも流されたかのような光剣からの振動が、身体の間から隅まで震わせていた。

「チツ……!」

舌打ちして、光剣の柄を両手でしっかりと握りしめ直す。

その動作の最中に間髪入れず、真矢が前方一メートルの位置にダッシュで踏み込んで来た。

今度は右の刃が振り上げられ、真上から一直線に振り下ろされる。身長差があるため、完全に頭上からという訳では無い斜めからの斬撃だが、それでも高い所からの真つ正面の一撃。

対して堅二は左足をずり下げ、身を半分ひねって光刃を避ける。

「ふっ！」

追撃は横から。避けられることを想定していた、左の刃による薙ぎ払いの斬撃が半身になった此方の胴体を両断しようと放たれ、

……防げる！

瞬時に光剣を手の中で逆手に持ち代え、向こうの刃に噛み合わせるように直撃させる。

拮抗は一瞬で、轟音と共に互いの身体が弾かれた。

その伝わる力の衝撃に、堅二はやはりという言葉がついた驚きを得る。

……見た目からは想像出来ないレベルの、身体強化だな……！

さつき片手突き威力だけで吹き飛ばされた瞬間から分かつてはいたが、彼女の肉体にかけられている強化系魔法の出力が堅二の方よりも大きい。

同レベルの身体強化ならば体格上、此方の方が圧倒的に有利な筈だが、剣戟の中に置いてお互いの力はほぼ互角か、真矢の方が上回っているくらいだ。

理由は彼女の身体強化魔法の出力が高めか、もしくは術式の運用が堅二よりも効率的に出来ているからなのか。

どちらにせよ、

「大したモンだよホント……っ！」

これで十歳だという事実に感嘆しつつ、堅二は逆手の光剣を再度元に握り直し、振るう。

左から右へ。横の斬撃が狙うのは、真矢の顔面だ。

一メートルの光刃による一撃。輝くそれを、彼女はきっちりメートル分後退することで躲し切った。

はらり、と模擬術式の魔力膜の対象に含まれていない茶色の前髪が幾本か切られ、舞う。

舞う髪を吹き飛ばすように、

「これなら、どう！？」

高い一声と一緒に、大回転の斬撃が飛んで来る。

彼女の身体は此方に背を向けつつコマの如く回転し、光剣は裁断機のように振るわれる。

遠心力を使い、流れるように振られる二刀は、それぞれの狙いが違う。

最初の刃は足下、それも足首辺りを狙っているのに対し、二つ目は腰辺りを狙って来ていた。

その斬撃は強力といえど、身体を回すという動きである以上、無防備な背を見せることになる。

だから、隙をつく一撃を背中に叩きつけるべきかとも思うが、

「……！」

本能に従って、彼は後ろに下がった。

直後、本能の判断が正しかったのを示すように、

……速度が、上がった!?

剣を振り回す真矢の動きの速度が、一気に加速した。急激と表せるその動作は、明らかに故意による狙った動作だ。全身を旋回させる彼女の横顔を見ると、

「……チッ!」

……今コイツ舌打ちしやがったぞおおおおっ!?

狙いが外れたという事に、割と本気で苦々し気な表情を見せる十歳少女。

その苛立ちのままに、旋回の二連撃が風切り音を発しながら空を切った。堅二が予測していたスピードよりも速く、だ。

動きに緩急をつける事で此方の躲すタイミングから攻撃のタイミングをずらす、動作のフェイント。

接近戦ではよく使われる手だ。自分もよくクロと切り結ぶ時によく使ってる、と堅二は思い、

「っ!」

彼女としては、今の回転斬りを此方に当てるつもりだったのだらう。

表情に此方の実力に対する感嘆と、僅かな悔しさが浮かぶが、直ぐにそれは戦闘者としての表情に切り替わる。

後ろに下がった堅二を追って来るように彼女は前に踏み込んで来て、

「!」

突き。

手首は必要最低限の動きしかせずに、肩から手首までの関節と腕を利用した光剣の突きが放たれる。

それも今度は一発では無い。反対側の刃、二発目が続くように構えられている。腰への力の入れ方も、左右への踏ん張りに集中しているから、

……連打か！

その通りの行動が、彼女の挙動を観察していた彼を襲った。

速い、速い、突きの嵐だ。

下手な弾丸の数倍近い速度による突きの連打が、堅二の全身を穿つために繰り返される。

どれも一発当たれば、動きが止まって残りの全てが直撃しかねないだけの威力がある。

まるでマシンガンを連射されているような錯覚を覚え、

……クロの突きやアホの砲弾に比べたら、まだまだなんだよ！

だが堅二は慌てなかった。

幾ら速くても、所詮は剣を突き出すという単純な攻撃であり、そして同時攻撃でも二発までしか来ないことが分かっているからだ。よって向こうの突きと同格の速度で堅二は動き、

「らっ……！」

耐える。

顔面へと突き込まれる光剣の先端部。鋭い刃に対し己の光剣を当て擦過させることにより、あらぬ方向へと突きの刃をずらす。

大量に生まれる魔力干渉の火花に意識を向けず、堅二は次の動きを取った。

二撃目、腰辺りを貫くように放たれた突きを、防御に使った光剣を戻す動きの中で体勢を整えつつ避ける。

こつすること、

……次の突きを、直ぐに光剣で防げる！

足の踏み込みを調整し、光剣の動きを阻害しないように肉体を整える。

そしてそこへ三撃目、四撃目が止まること無く此方へと放たれた。全ては高速、流星群の如き突きの連続。

それ等全てを、堅二は一撃目二撃目と同じ要領で防ぎ切る。

光剣と光剣が衝突しあう轟音と、高速の突きが巻き起こす轟風が、連続して空間を震わせた。爆心地のような戦闘音が上がる中、火花を掻き払いながら二人の動きは止まらない。

「……ッ！」

真矢が光剣を突き出せば、

「おらよっ！」

堅二がそれを光剣で逸らす。

「ふっ！」

その隙をつくようにもう片方の刃を出せば、

「よっ」と

殆ど足の運びだけで躲す。

そんなやり取りが幾つもの轟音と火花を生み出しつつ百合も続けば、

「——ッ！」

新たな動き、拮抗を変える動きを真矢が実行して来た。躲した二撃目の突き。それをそのまま横に振ったのだ。

刃が突き込まれたのは堅二の右腕脇下。このまま横に振られれば、胸元を真つ二つに切られる。肺と心臓があるため、模擬術式でも喰らえばただではすまない軌道だ。

一瞬の内に、堅二は彼女の真剣な瞳を見て判断して、

……だからこそ！

前に出た。体勢は両手で光剣を持ち、左上の突きを防いでいるという大上段の構えに近い姿。

普通なら隙だらけで前にこのまま出るのは危険だと思いつつも、前に出る。対する真矢はこの動きに疑問を抱いたのか、眉根を寄せた疑念の表情になっている。

と、同時に、向こうの刃が来ると思われる軌道上に、堅二は精神による操作で魔力を集中。

そして術式を描いて組み上げ、

《防壁系障壁術式：名称『剣戟補助壁』・即時展開》

彼の脇下を守るように、縦横十センチ程度の小さな緑色の正方形が浮かんだ。

半透明なその障壁は、攻撃を防ぐのにはあまりにも小さく、頼り

無い。それもその筈で、この障壁はあくまでも斬り合いの中で相手の攻撃を一瞬でも邪魔するための物であり、肉体を守るだけの耐久力は無い。

が、今必要なのは、僅かな時間光の刀身から身を守る使い捨ての壁だ。

前に出ると障壁も合わせるように動き、

「！」

二つの巨大な火花が巻き上がる。

一つは障壁が光の刃と接触し、削り消されるために生まれる緑と黄色の火花。

もう一つは堅二の光剣と真矢の光剣が擦れることにより生まれる黄色一色の火花。

両方共、堅二が強引に前に出るにより生まれた物だ。

「！？」

ここでようやく真矢の表情に危機感が浮かぶが、堅二はそのまま動きを止めず、

……ぶっ 飛べ！

左肘を前に出し体当たりした。

両の刃を止められ、自然と空いた正面に体当たりを繰り返された真矢は、

「ぐっ……」

小さな呻き声を上げて、吹き飛んだ。彼女が吹き飛び斬撃が止ま

つて、直後に耐えていた緑色の障壁が砕け散ったのを感覚で感じ取る。

堅二の前方、距離にして十メートルという長さを彼女は地に足をつけず飛ぶ。その姿を傍から見ると、真矢の負けと思いそうな一撃だが、

……決定打じゃねえな！

体当たりした堅二自身が、その考えを否定した。

直撃の感触も否定の理由ではあるが、左肘に青い光のような残照が纏わりついているのと、飛んで行く彼女が魔法銃を手放していないのも否定の根拠として上げられる。纏わりついているのは防壁系術式の残照であり、吹き飛ぶ彼女が武器を持っているのはまだそれだけの力があるからだ。

この模擬戦の勝利条件は、相手に決定打と言える攻撃を直撃させること。

なので、まだ戦闘は続いており、

「伸びろ！」

叫びながら、堅二は走り出す。

彼の叫びに答えるように光剣は一瞬で十メートルの長さを得て、右手にしっかりと握られた。

目標たる敵の少女は空中で身体をひねり、床へと着地する。動きにふらつきが無いことから、やはりダメージは殆ど無いのだと堅二は確認するが、

……だけど、どうやら近接戦ならこっちが上みたいだな。

同時に確信する。

彼女は確かにあらゆる面に置いて文句のつけようの無い天才だが、少なくとも近接戦に関しては此方の方が上だ。

流石に剣が役に立たない超近接戦闘になると分らないが、剣闘士の勝負ならば堅二の方が勝つ。それが真矢が近接戦闘が苦手だからなのか、慣れてないからなのか、本来の戦法では無いからなのかは分らない。

ただ此方は、

……俺は普通だが、訓練相手は普通じゃないんだよ……！

あの斉藤家の天才児や神原家の御曹司と模擬戦をずっとやって来たのだ。

それ等模擬戦の経験は、莫大と言っていい程の量で堅二の中に蓄積されている。

だから少なくとも、

……得意分野で負けるつもりは、ねえよ！

走る先、真矢は顔を上げ此方を見た。

距離は十五メートル。着地の時に滑ったことで、かなりの距離が開けられている。伸びた光剣でも届かない距離だ。

しかし加速魔法を使えば、直ぐに無くなるだけの距離でもある。

その事を分かっている堅二は、再度加速魔法の術式を構成しようとして、

……これで、終わりか！？

その思いに答えるように、真矢が動いた。

動きはその場に両足でしっかり立ち、腰を落とすという動作。そして、手に持つ魔法銃を此方に向けるという、撃退の構え。

魔法銃を正面から向けられた堅二は、そう来なくてはと齒をむき出しに笑って、

……あれ？ でもまだ魔力刃を展開したままじゃ……。

内部の術式構造にもよるが、堅二が知る限りではあのタイプの魔法銃は直接銃口から魔力弾を撃ち出すタイプだ。

そしてその魔法銃は銃口を伸べる光刃に塞がれ、此方に向けられているのは銃口というよりも剣先だ。

散弾タイプの銃口を使わない放出系術式か、そもそも魔力刃自体に射撃を阻害しない何らかの仕組みがあるのかと、向けられる魔法銃を睨みながら考えていると、

《射出》

魔法銃の上部分に、そんな言葉の魔法陣が浮かんだ。

「……………はっ？」

一瞬意味が分からず思考が停止し、

「行けっ！」

そんな叫びと共に、ガキン、と金属同士を打ち付けるような音が一つ。

直後、魔法陣に書かれた効果の通りに、真矢の持つ魔法銃から光刃が射出された。

呆気なく、今までの戦闘に耐え切っていたとは想像出来ない光刃が宙を飛ぶ。

ブーメランのように縦回転して飛んで来る刃、本来の使い方は全

く違う使い方を見て、

「……ロケットパンチの亜種版かああ——!？」

堅二の叫びに構わず、魔力の刃が大気を断ち、飛んで来る。

■

やはり彼は強い、と多旗真矢は飛ばした光刃を伸びた光剣で弾く彼を見ながら思う。彼は本当に強い、と。

自分はこれでもオールラウンダーなタイプであり、射撃による中距離戦の方が得意とはいえ、近接戦にもそれなりの実力があるという自覚がある。強い、と誇るつもりは無いが、己の実力を客観的に捉えた結果だ。

大体、Bランクぐらいの近接戦闘能力が自分にはある。

だからこそ、よっぽど強い者が相手に限りあらゆる分野において負けるつもりは無いのだが、

……完全に、近接戦闘だけならアタシより上ね。

流石に近接戦闘に特化した斉藤程では無いが、それに何時か届きそうなレベルの実力を彼は持っている。

これで戦闘ランクB-というのは、明らかにおかしい。少なくとも、今の実力だけでもB+は取れる筈だ。

更に調査結果によると、彼が戦闘ランク試験を最後に受けたのは約三年前。それから一度も、彼は戦闘ランク資格試験を、というより魔法関係の資格試験を一つも受けていない。

その理由を、真矢は深く考えない。誰にだって事情というものはある。

今考えなければならぬのは、

「来るわね……！」

次にどう動くべきかという事だ。

真矢は前を見る。

不意をついた光刃射撃も弾き飛ばされ、光剣を縮めた彼は、何故か怒ったような顔をして、

「ロケット系の技は技名必須だろうか！」

……？

ロケット系とはどういうことなのだろうか。よく分からないことを叫びながら、堅二は此方へと走って来る。

進路は真っ直ぐ、フェイントも何も無い走り。

ただ光剣を縮めたため、小回りが効くようになっている。

縮めた理由は、単に魔力の消費を抑えるためという理由だけではない。

小回りを効かせ、防御に光剣を使えるようにするためだ。

それは、此方の次の動きを、

……読まれてる、か！

そう判断しながらも、真矢は駆け出した。

行き先は左真横。

彼から距離を取るように、床へローファアの靴底を叩きつけながら疾走し、背後を見やる。

此方の背中へと、彼はすぐさま方向転換していた。どうしても最短距離で間合いを詰めてしまいたい為だろう。

その動きは自然と此方の背中を追う姿となり、真後ろから追われることになる。

分かつてる、と真矢は思った。射撃を主とする者にとって一番不味いのは、疾走中完全に死角となり、射撃するのには立ち止まるか振り返るかをしなければならぬ背後から追われることだからだ。並走や斜めから追ってくれば、走りながらも正確に射撃出来るのだが、後方となると射撃するのは難しいし無駄弾になる可能性が高い。

「副砲射撃バレル、十二展開」

《複合系・形成系＋放出系射撃補助術式：名称『高度射撃用バレル』

》

だから。

呟きと共に、真矢は一際強く足を床に叩きつけた。

真下に打ち付けられた右足は床を地震のような激音で震わし、すぐさま反動を肉体に与える。

そして浮かんだ身体は慣性の力により、前へ飛ぶ。

続くように背後から今ので空いた距離を無くす、強い踏み込みの気配。

構わず、真矢は空中で回転した。

魔力光を纏う魔法銃をしっかりと握り、新体操選手のようにひねりを加えた一回転。ブレザーの制服を空気にはためかせ、暫しの間浮遊感を感じる。風を切る、己の身体のみで飛ぶ物だけが感じれる感覚だ。

そのまま一回転し終え、着地した体勢は、

「バックステップで走るのくらい銃使いなら余裕で出来なきゃ、ね」

身体の前面を走って来る堅二へと向けた、進行方向とは逆の身体の向きをしていた。

そのまま彼女は進行方向を見ずに、足を後ろへ後ろへと進行させる。それも普通の全力疾走と変わらない速度で、だ。

普通の人間が高速でこんな走りをしたら間違い無くこけるが、『特別生』として訓練している真矢は苦もなくこなす。

そしてこの曲芸技のお陰で、後ろから追いかけていてもしっかり目で見て、しっかりとした体勢で射撃出来る。

見た所速度はほぼ同速。すぐに距離を詰められることは、無い。

……だっ たら遠慮無く！

光の刃を失った魔法銃を、真矢は自分にとっての前方へと突きつけた。後ろへと高速で走りながら、しかし迷い無く。

黒の金属で構成された銃身。銃口付近だけは灰色の魔法銃には、青い円陣型の魔方陣がそれぞれ十二ずつ沿うように展開されている。一つ一つが立体的で、小さな円が幾つも重なりあって真っ直ぐな円柱を生み出し、大きな円から伸びる光の線が全ての筒を繋いでいた。なので遠くから見るとただの青い光の塊しか見えないが、近くで見ると流麗な曲線と半透明の青色で一流のガラス細工にも似た美しさを兼ね備えている。だが見た目とは裏腹に、その筒達の役割は破壊の力を射撃することだ。

両方合わせて二十四、魔法銃も合わせれば二十六となる銃口をバックステップしながらも、此方へ走る光剣を持った少年へきつちりと狙い定める。

……全弾命中って訳には行かないだろうけど、普通に防いでたら
ブチ抜かれるわよ！

照準の最終調整を意識さえせずに終わらせ、後は引き金を引くだけと言った所で、

「……？」

……うん？

強化され人間を超える知覚速度を持った目が、変な顔を見た。物、では無く、顔だ。

周囲の景色は高速移動をしているため、線のように流れぼやけているが、追って来る堅二だけは相対速度なために普通に見える。

その彼の顔が、率直に言うなら変だ。

何故か顔を戦闘による高揚とは思えない赤に染め、何故か視線は此方の下半身に集中している。

真矢は不思議に思った。何故、彼はそんな風に自分の下半身、というよりスカート、というよりもっと別の何かを見るような、そう、それこそスカートの奥を……、

「……あつ」

……そういえばさっき跳んだ時、スカート押さえてなくて……、まさか！？

気づくと同時、顔に熱が集まった。

そして羞恥の感情とまさかという願いを抱く此方を見ながら、彼は大きく口を開けて、

「黒おおおおおおおっ!？」

「何言ってんのよおお——!？」

感情のままに引き金を引き、射撃した。

大声で言わなければ許したのに、と思いながら引かれた引き金は、それをトリガーに設定された射撃術式を発動させる。

真矢の手元で爆発したような音を上げて、二十六の魔力弾が発射された。

色は銃身周りに展開した術式と同じ、青色。目を痛めそうな程の光を放つそれ等は一つつが弾道は勿論、威力も速度も違う。

特に魔法銃の銃身から放たれた二発は、射撃どころか砲撃レベルの威力を持っている。一戸建ての家屋くらいなら跡形も残さないレベルの威力だ。

……この術式は発動速度や燃費効率が悪い分、防ぎにくいわよ！

この散弾の長所は、初見においての奇襲性にある。

バレル術式を幾つも展開したことから乱射が来るというのは分かるだろうが、弾の一つ一つに違いを出せる術式はそうそう無いためただ単純な一斉掃射だと勘違いされやすい。

が、そうやって勘違いして光剣などで切り落とそうとすれば速度や軌道の違いによって撃ち抜かれ、防壁系の魔法で全体的に防げば追走を止めて足を止めざるを得なくなる。よって追撃をするのなら、切り捨てるのも立ち止まって防ぐのもダメだ。

だから、真矢が彼に向かって放射状に飛ぶ弾丸達を見ながら叫ぶのは、

「どっ、かわす!？」

視界の中で、彼が答えるように高速で動いた。

叫びの余韻で口を大きく開けたまま、此方へ走りながら、

「おおおおっ！」

跳んだ。

……なっ！？

彼、堅二の姿を見るべく、視線が反射的に上がる。

光剣を構えた堅二は高く、前に、此方に飛んで来る。完全に床から足を引き剥がし、真矢を飛び越す様な速さと力を秘めた跳躍だ。

高さにして約五メートル。

その真下を、彼女が放った魔力弾の群れが唸りを上げて通過して行く。そのまま結界の壁に炸裂し、連続して爆砕。青い光の爆発を二十六つ上げる。

そんな現象には構わないとばかりに、彼は迷い無く飛んでいた。

確かに飛び越してかわせば、いくら不規則な弾丸による弾幕といえど簡単にかわして、しかも前に前進し接近することも可能だ。この場合、飛距離からして彼は此方を越え後ろに回り込むことも出来るだろう。

しかし、

「——バカなの！？」

真矢が叫んだのは賞賛では無く、失望の叫びだった。

それは空中へ跳ぶという選択が、彼女にとって最悪に近い答えだから。

何故なら、

……空中に逃げたら、格好の的でしょうが！

当たり前のことだが、人間は空中で自由に動くことは出来ない。手足や肉体への何らかの抵抗で動く人間は、空気しか無い空中では飛んだままの動きしか出来ないのだ。

無論、そういった状況に対応するため空中移動用の魔法は無数に存在する。だが真矢が調べた堅二への情報では、彼がそんな魔法を実戦で使ったという記録は無い。

それに、

……アタシが、自由自在に動けない相手を撃ち抜けない訳無いでしょ！

移動魔法が使われた所で、それは一緒だ。

ここまで単純かつ高い跳躍なら、例え急停止しようとも撃ち抜く自信がある。

そう思案している内に彼の姿は五メートル頭上に来て、

……この程度！？

足を止め、両の魔法銃を上へと翳した。

もはや逃げる意味は無い。彼は自分を飛び越そうとしている。ならば自分はそれを撃ち落とすだけだ。それ以外の動作は必要無い。

右の魔法銃の照準を動かし、灰色の強化ゴムに覆われた銃口からの魔力弾が堅二に直撃するように合わせる。

左の魔法銃は、彼が空中で動く可能性に備えてわざと照準をズラしておく。

射撃体勢は万全だ。後は引き金を引くだけで、速度と操作性を重視した狙い撃ち用の魔法弾が発射される。

引き金を引く瞬間、思うのは、

……アンタは本当に、この程度なの？

勝手な失望の感情。自分が勝手に彼を調べ、そして勝手に彼を信じた代償とも言える失望感に身を浸し、そんな勝手な感情を持つ自分を身勝手にバカだと思い、

「……っ！」

自分がどんな顔をしているかも分からないまま、引き金を強く、抗うように引く。

「——伸びる光刃！」

その瞬間、彼女の視界を黄色が覆った。

「!?!」

かわせたのと、魔法銃の引き金を無意識で引けたのは、彼の姿を見上げていたのと今までの経験で培った反射行動ゆえだ。

咄嗟に身体を背後へと振れば、自分の身体があつた場所に黄色に輝く真っ直ぐで細い何かが突き刺さる。床から上がる音は、斬撃の断絶を示す音。

光刃。堅二が持っている光剣の刃が、長く伸びて五メートル下の床へと刺さったのだ。

まるで、槍の突きのように。

剣を振ったり放出系の魔法を放つといった予兆を察知しやすいものでは無く、ただ刃が伸びるという現象を利用した、無動作無拍子から放たれる超高速突きの一撃。

……あはっ！

憂鬱な感情が、全て消し飛んだ。

何か得体の知れない興奮が胸の中に生まれ、真矢は今まで浮かべた事の無い笑顔を見せる。

歓喜、喜びの、しかし狂ったようにも見える興奮の笑みを。

さっき自分は彼が飛び越すという選択をしたことに失望という感情を抱いたが、何てバカだったのだろうか。土下座してもいいくらい、バカな感情だ。

なにせたった一手。光刃を伸ばすという、此方が知っていた筈の力で、彼は最悪の選択を最善の選択に変えてしまった。

真矢は思う。

自分は移動魔法を使って宙を動く敵を狙い撃てる自信はあるが、自分が攻撃されれば話は別だと。

現に彼へと放つ筈の魔力弾は、身を振りながら撃った所為であらぬ方向へと飛んで行く。

真っ直ぐ高速で飛ぶように設定された魔力弾は、青の輝きのまま天蓋の結界壁にぶつかり、破裂して掻き消える。

そういった轟音を伴う現象にも意を介さず、

「ふんっ！」

彼は慣性の力に身を任せ、此方を越えて行った。

伸ばした光剣を元の長さへ戻し、真矢との間の距離にして十五メートル前後の場所へ降り立つ。

それは彼女の背後であり、また加速魔法を用いれば直ぐに詰めれる距離だ。

彼へと正確な射撃をするためには、振り向く必要がある。

……やっぱり、アンタは十分強いわよ……！

思いながら、真矢は前方へとひるがえりながら跳んだ。先と同じ要領で、しかし今度は前方に回転している途中の、逆さまの視界の中で魔力弾を連射する。スカートを押さえて無いため下着が丸見えだが、どうせ見るのは彼だけだし、彼はもう見てしまっているので気にしない。

大事なのは、スカートを押さえる手よりも相手に射撃する攻撃の手だ。

此方から見ると天地逆さの視界の中、反動と術式反応魔力光を発生させながら飛んで行くのは通常の魔力弾だ。

それは普通の術者の物と比べれば大きな威力を持つてはいるが、所詮は通常弾。特殊性は無いに等しい。引き金を引いた分だけ発射する、決定打にはならない弾丸達だ。

よって襲いかかって来る魔力弾達を、

「そろそろ終わらせるぞ！」

堅二は軽々と切り捨て、当たらない物やかかわせる物はかわす。

足は止まらない。前に出て来て、真矢を直接切り飛ばすつもりだ。引き金を休むこと無く、着地までの短い時間の中で引き続けながら、真矢は、

……模擬戦をして、良かったわね。

そんな思考を抱く。

最初は強引過ぎたかと思ったが、それ以上に実行して良かったとデータだけでは絶対に分からないし確信を持ってない、信頼を置くことの出来る彼の実力を体感出来ているのだから。

それに彼も、此方の実力を確かめるいい機会だと思ってくれたようだ。お互いの実力を見せ合い、これから先の事には絶対に必要な実力の把握が出来た。実力を信じるという行為において絶対に必要

な要素を、お互いにクリアした。

……でも、負けられないわね。

ひるがえり、彼へと向き直りつつ着地。その間にも堅二への連射を止めず、思考も続く。

勝たなければならぬ理由や思いは幾つかある。

一つは単純に負けたく無いという気持ちの理由。もう一つの理由は立候補への勝算があると言ったのが自分だからだ。

自分の戦術眼が確かな物なのだと信じて貰うには、それ相応の結果、確固とした実力を示す必要がある。

そして実力を示す一番簡単な方法は、勝つことだ。

現在進行形で此方に魔力弾を切りながら走り出そうとしている彼に勝てば、少なくとも彼は自分よりも此方の方が強いのだと、此方の実力を認識する。

逆に言うところ此方が負けてしまえば、彼は此方を自分よりも実力が下だと認識するということだ。

……嫌われる、かな。

実力が下、という言葉に思い浮かぶのは先程の己が胸に抱いた失望の感情だ。

思ったよりも弱かった、そのことで此方を信じなくなったり、立候補を取り消したり、最悪嫌われたりはしないか。

グリップにさらなる力を加え、休むこと無く魔力を注ぎ続けながら、

「……あれ？」

首を傾げそうになった。

手を休めず、しかし考えるのは戦いとは別のこと。

今の自分の思考に、ふと疑問が生まれたのだ。

『最悪の場合・嫌われる』などという言葉を生み出した、自分の思考に。

……どうして、嫌われることが最悪なの？ もっと他にも最悪なことはあるでしょうに。

いや、そもそもどうして自分は、彼に嫌われたくないのだろうか。嫌われたくない。その心配は人間がある程度心を許した者を持つ感情であり、それぐらいは真矢にだって分かる。心が大人と子供、どちらとも言えないあやふやなものある自分にも、でも、

……そうなるかもしれないと考えただけで、どうしても胸が痛くなるの？

分からない。今までの人生で経験したことが無い痛みだから、分からない。

ズキズキとした、理解不能の痛み。自分が知らない痛み、自分の未熟を訴えるような痛み。

なんだろうかこれは、と思考に没頭する真矢の前で、

「っ！」

堅二の足下に、青い円陣術式が展開された。

遠目からでも分かるそれは、運動増強型の加速術式だ。

彼はただの連射しかして来ない此方を見て、勝機を感じ取ったのだらう。

光剣を右手に持ち、逆の肩側へと振り上げる彼を見て、

……考えてる暇は無い、か！

痛みを意図的に忘れ、術式を頭に浮かばせ、組み上げ始める。魔力が形となり、生まれた形たる術式に反応し、更に形を変えて行く。引き金を引くのを一旦止めて、彼女は睨むように前を見た。堅二は此方の迎撃準備にも構わず、術式を力強く踏みつけようとしている。

これが、この模擬戦最後の激突となるだろう。
だから、

……新しいの、使わせてもらっわよ……！

真矢も、全力で動いた。

■

堅二は魔力弾の群れが来なくなった隙に、右手の光剣を構え新たな術式を組み上げていた。

それは足下に展開してある加速用の術式では無い。前に出るためのそれは既に準備出来ており、後は踏むだけで発動する。

十五メートル先に立つ、両手の魔法銃を此方へと向ける少女。
彼女に向かって飛び出す準備は整っているとすれば、用意すべきなのは、

……牽制、及び足止めの攻撃だ！

右足を上げる。

強く深く踏み込むために、また次の一撃を高めるために。

制服のズボンに包まれた彼の足は、引き絞られた筋肉の力を限界まで使い、

「らあああああつ！」

いつも通り、円陣型術式へと叩きつけられた。

青い光の円陣は黒い靴底に踏み碎かれ、破裂。破片が光の破砕となつて広がるように碎ける。

そして秘められた術式通りの力を発動し、堅二の身体は前へと撃ち出される、

「——っ！」

その前に。加速魔法による力が働く前に。

堅二は右腕を振り抜いていた。

右手に握られていた光剣は彼の強い踏み込みによって、超がつく速度で一閃。

ほぼ真横に振られた光剣は黄色の光を空間に焼き付け、空を切る。神速の一撃だが、しかしその斬撃は相手には直撃しない。

当たり前だ。

何せ堅二と真矢との間にある距離は十五メートル。堅二にとって光刃の限界伸長距離である十メートルを超えてしまっている距離だ。

だから、刃は届かない。

刃は届かないが、

《放出系斬撃波術式：名称『スワローエッジ』》

刃から放たれる衝撃の斬撃は、彼女にまで届く。
振った光剣の軌道上に鎖型の細長い魔法陣が浮かび、一瞬という
時間でそれは、

《発動》

光剣を振ったのと同じ威力を持つ一撃に変化し、空を滑空した。
放出系の魔法であるこれは、堅二が持つ数少ない中距離対応魔法
であり、効果は振った武器から刃を飛ばすという単純な物。

単純ゆえに、威力の調整や斬撃範囲の操作がし易い、応用性が高
い魔法。

輝く銀色の気体に相似している魔力体で生まれた刃は、真矢が放
っていた魔力弾に負けない速度で突っ切って行く。厚さ十センチ、
横幅十メートルという巨大な、模擬戦を決するに相応しい刃が、だ。
一瞬で五メートルは前に進んだ刃。

それを追うように、

……！

堅二も、前に撃ち出された。

足から返って来る莫大な力は、その莫大さに見合った速度で彼の
身体を前に進ませる。

人外レベルの高速で移動するため、自然と視界が狭まってしまう。
必要以上の処理出来ない情報を、脳が理解しなくなったからだ。

本来なら神経関係の強化を上げて、視界全てを把握出来るように
しなければ不味いが、今だけは構わないと彼は思う。

何故なら、

……今は前だけを、あのガキだけを見ればいい！

狭まった視界の中、銃を構えた少女は刃と、接近する自分を見る。罾などを警戒する必要は無い。そんなことをするだけの暇は無かったし、先程の空中跳躍の際に行った不意打ちで、彼女が地雷関係の術式を仕掛けて無いのは確かめた。

だから本当に警戒すべきなのは、視界の先、ゴール地点である彼女が何をするかだ。

……五メートル！

あつと言う間に五メートルの距離を跳ぶ堅二だが、先行する刃はもっと早い。

既に真矢との距離を、残り三メートル程に縮めていた。

横幅は十メートル。だから、普通に銀の刃を横に跳んでかわすのは不可能に近い。

選択としては加速魔法を使うか、飛ぶか、しゃがむか。

もしくは、

「——アアアアアアアッ！！」

《放出系射撃術式：名称『バーストショット』・即時発射》

撃ち落とすか、だ。

大きな咆哮と釣り合うだけの、圧縮に圧縮を重ねた必殺の魔力弾が銃口と同じ数、つまりは二発分此方へ放たれる。

その内の一発は銀刃にぶつかり、二つの違う形質を持った魔力の塊同士がぶつかり、一瞬の拮抗すら無く破裂。

白煙を纏う爆発が銀と紫の光を拡散させながら起こり、精神から揺さぶるような爆音が生まれる。

それにより、二人の間を遮るように白煙のカーテンが生まれ、堅
二の視界から真矢の姿が消えてしまった。

彼女を隠す白煙は衝撃波に吹き飛ばされることなく滞留していて、

……あぶなっ！？

もう一つの紫色の魔力弾が、頬を擦りながら後方へと飛んで行っ
た。

模擬術式の効果による魔力のみの衝撃を微かに感じながら、尚も
前に出る。後方から結界壁にぶち当たっただろう魔力弾の爆発も無
視して、前に。

白い爆発の余韻たる煙の所為で相手の姿は見えないが、実の所煙
は横にはあまり広がっていない。縦にはある程度広がっているが、
それでも此方に気づかれず移動した所で誤差の範囲無いに収まる。
だったら前に出る。そして、

……勝つぞ！

勝ちに行く。

ここまでの戦いで彼女の実力が、戦術眼が確かな物だと言っこと
は既に分かっている。

恐らく、実力以外のこと、あらゆる面でも自分より上だというこ
とも。

本当ならこれ以上の戦闘に意味など無い。もう既にお互いの実力
を、きつちりと認識出来たのだから。後はある程度の信頼関係を結
べればベストだ。

だが、

……だからって、勝ちを譲るつもりは無いんだよ！

負けたくない。

それはただの意地だ。しかし、それを捨ててしまっただけなら本当にダメな存在になってしまう。

相手が年下であり、本格的な模擬戦が久しぶりだというのもあるだろう。ここ数年は友人達との訓練としての模擬戦ばかりで、真剣な一対一の戦いなどまず無かった。

年上としての矜持。久しぶりの勝負。

これ等二つの理由を軸に据えて、双銃の少女がどれだけ天才であろうとも、堅二は勝ちに行く。

加速を身体全体で感じ、

「……ッア！」

白煙の手前五メートルで、左足を着く。

魔法戦を考えて作られた訓練場の床がミシリ、と軋みを上げ、返って来る力が肉体を震わす。

右手に持っていた光剣の柄を手の中で回す。半回転させて握めば、一瞬で剣は逆手持ちとなる。

逆手は刃を振り抜くには、人体構造的に余り向いていない持ち方だ。短剣やナイフなどの短い獲物ならばともかく、長い武器だとどうしても刃が届かない範囲が出やすいし、速度も落ちる。

だから堅二が取る攻撃手段は、

……真っ直ぐこのまま進んで、すれ違いざまに斬る！

剣を振るのでは無く、相手の横を走り抜け、棒のように突き出した剣で吹き飛ばす。

これならば逆手の方が攻撃しやすい上に、隙も少ない。前に出るのを止める必要も無いのだ。

ただ問題は相手の姿が正確に把握できなければ、当てるのが難し

ということだが、

……居た！

五メートル先の白煙。

此方の走りで生まれた風に吹き飛ばされかけている白の中に、小柄な黒の影がある。

幻覚か偽装で無ければそれが真矢の姿だろう。

反撃が来るかも知れないが、無視して突っ込もうとして、

「っ！？」

向こうが、来た。

身を包む白煙を吹き飛ばし、ブレザー型制服の姿が此方に向かって足を進めて来る。

間合いは既に五メートルも無いというのに、更に詰めようとしている真矢の姿が、くっきりと見える。彼女にとって不利だとは思えない選択を選ぶ真矢の姿が、此方への全力疾走という形で。

……何故！？

前に動きながらも疑問が浮かぶ。

相当なレベルの銃使いである彼女が、白煙や距離のメリットを全て捨てて接近して来たのか。このタイミングで近接戦に持ち込むなど、不意を打つ以外のメリットなど無いのに。

しかし疑問を深く考えてる暇は無い。こうしている間にも自分は高速で前に出ていて、向こうも近づいて来ているのだから。

……遠慮無く決めさせて貰うぞ！

狙いはもうついた。後は左足を蹴り出すだけで彼女を吹き飛ばせる。

若干の方向修正をし、二歩目を蹴り出そうと、

「ほら」

した直後に、軽い声の一つ。

それが目の前、残り三メートルまで詰めて来た少女からの声だと気づいた時。

眼前に黒が出現した。

……んなっ!?

咄嗟に空いていた左手を使い、それを真上に弾く。
弾く感触など無くとも、黒が何なのかは分かった。

銃だ。

彼女が持っていた銃二つが、此方の視界を塞ぐように下から放り投げられたのだ。

その不意にも程がある選択と、弾くという反射的な行動に堅二の身体は確かに硬直し、

「――」

視界が塞がれ、銃を弾いたその隙に、彼女は此方の懐へと踏み込んでいた。

速く、鋭く、まるで一本の矢のように。

しまった、と堅二は思う。ここまで近づかれると、逆手に持つ光剣は使えない上に、左手は銃を弾いて上に上げられている。

反撃が出来ない。そして加速魔法による速さが残っているため、
かわすことも出来ない。

……ここまで、全部計算しやがったのか！？

思い、しかし、疑問はまだ残る。

……武器を匣に使って、どうやって決定打を叩き込むつもりだ！？

内心の叫びに答えは返って来ない。

ただ真矢は無手となった両手を強く握り込む。彼女の構えは右足を前に出し、左足が後ろ、そして右肩を前に出した物。

そして緑色の目は堅二の腹を見て、左手により一層強く力が込められ、

……パンチか！？

その通りの物が来た。

彼女の左手に、赤、青、黄、緑、橙、藍、紫の光が混ざり合った光が纏わりつき、形となる。

それは膨大な魔力で綿密で編まれた、輝く虹色の術式。拳撃の威力を高める、魔法の力だ。

……完全オリジナル魔法！？

思い出す。彼女が教室で紙に描いていた、術式理論の数々を。

一つとして堅二が知らない、オリジナルの魔法。

虹の光を纏う近接攻撃魔法。これが、

……これが、隠し玉であり切り札か！

その堅二が見たことが無い力を纏う拳を、彼女は躊躇なく撃ち出す。

放たれるのは勿論前。此方の腹を狙い、一直線に拳が来る。

《強化系加速術式：名称『未設定』》

そんな虹色の文字が見えたかと思ったら、

「アアアアアアアアアアッ！！」

《発動》

一瞬で、それは此方に直撃した。

痛みの前に見えたのは、まるで真っ直ぐ飛ぶ矢のような虹の一撃と、それを放つ少女の勇ましい姿。

眼孔に焼き付いたかのようにその光景が脳に刻まれて、

「……がつ！？」

轟音と共に殴られ、吹き飛ばされた。思わず胃液を吐き出しそうになる程の衝撃が腹で爆発する。

本能で展開した防御魔法など何の役にもたたず、堅二の腹には虹の一撃がモロにぶち込まれ、当然の結果として彼は後方へと飛んだ。ストレートパンチだったからか、高く吹き飛ぶのでは無く、真っ直ぐ押されたような吹き飛び方だ。

身体をくの字に折り、しかしそれでも膨大な衝撃を殺しきれない。それだけ、この一撃は強く、尚且つ堅二の意識を掠れさせていた。一度もバウンドせずに、ただ真っ直ぐ宙を飛び、

……っ、ぎっ……!?

意識が霞む。衝撃によって麻痺した意識では、高速での移動に耐え切れない。

視界は既に真っ暗で、自分が吹き飛ばされているのに気づいたのは単に耳元で風が鳴り響いているが為だ。

しかしその聴覚でさえ殆ど薄れ、今や痛み感覚も殆ど無い。

ぼんやりとした思考の中、だが何故か浮かぶのは自分を殴り飛ばした彼女の姿。

茶色の髪を戦闘行為で乱し、息は荒く、緊張と緊迫で白の肌を強張らせながら汗を垂らし、しかしその瞳はしっかりと此方を見ている姿。

左手に虹の光を纏い、此方に拳を叩きつける彼女の姿が何故か浮かび続けて、

……悔しいにも程がある。

無意識で口元が笑みの形に釣り上がり、
背中から結界壁に衝突した堅二の意識は、完全に闇へと落とされた。

■

「……っ? いてて……」

そして。

彼、高城堅二の目を覚まさせたのは、鈍痛だった。
全身を満遍なく打ったような鈍痛は、動けば動く程痛みを増す。
だが耐え切れない程の痛みでは無かったため、腕を利用した上半
身の反動で起き上がる。

……うおおおお……、何か気持ちわりい……。

グラグラと脳が揺さぶられ、視界に映る物がいまいち理解出来ない。
まるで酒を飲み過ぎた日の翌日に感じる物、ようするに二日酔
いと同じような感覚がする。

大体、自分は朝低血圧タイプなのだ。痛みが重なれば気だるさは
倍増する。前に神原が寝てる自分の額に肉と書こうとして、それを
寝呆けた頭で撃退してやったのは懐かしい。あの時は寝呆けてた為
にどう撃退したのかよく覚えていないが、起きた時に鮮血に染まる
アホが床に転がっていたのを見てスカッとしたものだ。

……で、何処だここ？

そこまで考えてから、堅二はおぼつかない足取りで立ち上がる。
立ち上がるという行為により、自分は床でじゃない何かで寝てい
たのだと気づく。

振り返り見ると、それはベンチだった。プラスチックと安そうな
鉄の骨組みで作られた、簡素なベンチ。

赤色のそれには自分のカバンも置かれていて、どうやら自分はそ
れを枕に寝ていたらしい。

「……何処だここ？」

今度はしつかり声に出し、辺りを見渡す。

省エネを考えているがためか、天井にある魔力灯の光は弱く、ぼんやりな光しか発していない。そのため、明かりがあるというのに薄暗いが、大体の把握は出来た。

右と左に伸びた灰色の細長い通路、何を考えて置いたのか分らないムーンスルトをしている男の石像、普通の観葉植物と八工取り草の鉢植え、自分が寝ていたベンチ、そして前の壁にある二つの入り口。

その入り口の間には、銀色の巨大ネームプレートに『空峰温泉シャワールーム』と書かれていた。

温泉なのにシャワールームなのかよとのツツコミは面倒なのでしないが、つまりここは、

「訓練場の地下……、シャワールームの方の廊下か」

学年別訓練場の地下には、こうしたシャワールームと、荷物を鍵付きのロッカーに入れれるロッカールームがある。

上の訓練場を利用する生徒達のために設置された、二つの施設。どうやらそんな、見学で一回来ただけの場所に自分は居るらしい。

……俺は訓練場で思いつきりぶっ飛ばされた筈なんだが……、誰がここに連れて来たなんて、分かり切ったことか。

虹の光を纏う少女の姿が見え、頭を振ってその幻覚を追い出す。いかん、まだかなり寝呆けてると思うながらも堅二はベンチに置かれたカバンを手に取った。

手に取ったカバンは、中に入れられた教材の重みを此方の手にズシリと乗せて来て、

「……紙？」

カバンがあつた場所の下。

そこに一枚の紙片が置いてある。表面はツルツルしているのか光沢が強く、一部が字という黒に変化している何の仕込みも無い紙だ。紙を堅二は無造作に拾い上げ、黒の字を読み取る。

そこにはここには居ない少女の行動が、彼女自身の手で書かれていて、

「『シャワーを浴びています。術式のこともあるので、出来れば待つていて下さると幸いです。多旗真矢』……手紙とかだと敬語になるタイプか」

彼女の意外な一面に少しだけ驚きつつ、紙を折り畳んで開けたカバンの中に入れ込む。

代わりにカバンの中から取り出すのは携帯端末。魔力によって動く、携帯魔法機だ。

普段は制服のポケットに入れている物だが、模擬戦の最中に壊してはいけないと思いカバンの中に入れていた。

昔は様々なタイプの携帯魔法が流行っていたらしいが、現在は『マジックフォン』と呼ばれる超高度端末が市場を実質独占している。堅二が持つ物も例外では無く、大きなタッチ画面を持つ滑らかな曲線を持つ長方形の携帯が、彼の手に握られた。外装カラーは基本色のブルー。明るい青で、装飾やストラップなどは一切つけていない。

通常はタッチ画面を操作したり、魔力による三次元の半透明画面を出現させ操作するのが一般的だが、それは今必要無い。

時間を見たいだけなのだから、下部に一つだけついたボタンを押し込めば画面に明かりが点き、

「六時十二分……。確か模擬戦を始めたのが五時半くらいだったか

ら、思ったより時間は経って無いな」

白一色に設定された画面に浮かぶ黒の数字を見てから、堅二はマジックフォンをポケットに突っ込む。

そして思うのは、

「どおりで薄暗い訳だ。こんな時間にここに居るのなんて、俺とアイツぐらいだろうしな」

感覚を張り巡らせても、辺り一帯からは人の気配が殆ど感じられない。

現在はまだ四月。それも四月六日に入学式なので、七日の今日は授業初日となる。

よって本格的な戦闘用魔法の授業はまだ先だ。

訓練場を使う者など今だおらず、どちらかといえば部活・サークル関係で体育館や運動場の方がよく使用されている。

だから人気が無いのは当たり前だし、灯りも誰も使わないのなら消されるだろう。灯りが薄暗いながらもついているのは、

……あのガキがつけたからだろうな。

ガシガシと黒髪を掻き、溜まっていた息を口から押し出す。

とりあえず、学園に居ることが許されるのは四月の間は七時まで。それ以降は学園内に一年生徒は居てはならず、つまりは残り四十五分程度で学園の外に出なければならぬ。

地上の学園では、一年生の殆どが帰ってしまっているだろう。少なくとも、全校生徒の二割以下ぐらいに減っているのは間違いない。

「さて、どうしたもんか……」

寝起きでまだ覚めない頭を抑えつつ堅二は五秒程考えて、

「シャワー浴びるか。待っている時間、何もしないのも退屈だし、いい眠気覚ましになるだろ」

そう言っつてシャワールームの入り口を躊躇無くくぐる。

廊下から入り口をくぐった先にあるのは、廊下から中を見えないようにするための二度無駄に曲がる通路。

その通路を通れば、土足OKの脱衣所に入る事が出来る。

……それにしても、あのガキは一体なんなんだ……？

歩きながら、堅二の寝呆けた脳内では思考がノロノロとしながらも展開され、微かな疑問について考えられていた。

模擬戦の前から分かっていたことだが、あの少女はとんでもない天才だ。

十五歳の自分とほぼ同格、否、それ以上の戦闘技術。あれで十歳だというのは、一体全体どんな才能とどんな訓練を積み上げて来たのか、聞きたくなるぐらいだ。

あのオリジナル術式にも驚愕した。彼女の戦闘行動から全体的に見ても近接戦は弱い方なのに、あんな近接戦限定のオリジナル術式を作り上げるとは。しかも不安定かつ状況、人、精神力で色を変えと言われている魔力光の中でも一番珍しいと言われている虹色の魔法だった。

『多旗』の姓を持っていることから薄々感づいてはいたが、やはり彼女は生粋の研究者タイプで……、

「おっと」

そこまで考えて体勢がよろけたため、壁に手をついて倒れるのを

防ぐ。

相当に寝呆けている自分の身体に、自然と苦笑して、

「これ以上の思考は冷水シャワーを浴びてからだな……。確かシャワールームに『滝浴び仙人修行モード』とか言っただけであつた気がするし」

書置きにも術式についての話をするを書いてあつた。なら、後から考えればいい。

足を踏み出せば、そこはもう脱衣所だ。

広さは大体教室二個分ほど。

縦長で、壁際と真ん中に二列分、服などを入れるロッカーが設置されている。

真っ直ぐ行けばシャワールームの入り口があり、入り口たるガラス戸は完全防音の特殊な曇りガラスだ。中の様子は壁に耳を当ててもしない限り伺えない。

「やっぱ人が居ないと無駄に広く見えるよなあ、これ」

本当は約九千人の学年生徒達が利用する場所なので、これでもまだ小さい方なのだろうが。

その広い脱衣所を歩き、ガラス戸近くのロッカーの前に立つ。誰も居ないとはいえ、なるべく肌でいる時間は短い方がいい。

持っていたカバンを下のロッカーに投げ入れ、金属の大きな音を響かせながら、

……タオルが無いが、温風の魔法でどうにでもなるか。

制服の上着に手をかける。

ブレザー型の上着は大きめの物を注文したからか、肩幅ピッタリ

ということもなく脱ぎやすい。

さつさと脱いで下のワイシャツからネクタイも外し、手に持って堅二は呆れたように呟く。

「あれだけの模擬戦をしたのに何処も損傷してないって、この制服はどういう構造してんだ……？」

手にある制服を不気味そうに見ながらも、堅二はカバンを入れたのとは別のロッカーを開ける。

金属の軋む音と、金具が外れる音を聞きながら、彼は間を置かずブレザーの上着とネクタイを投げ込んだ。

全ては流れるような動作であり、

……ん？

そして疑問した。

続いてワイシャツも脱ごうとしていた堅二の手がピタリと止まり、彼の視線がロッカーの中に釘付けとなった。

釘付けになった理由は、ぐちゃぐちゃな形でロッカー内に鎮座する制服では無い。

その下にある、恐らくは布切れと思われる物体だ。

堅二は何も入って無い筈のロッカーに入っていた何かに、首を傾げて、

「誰かの忘れ物？」

脱衣所は廊下と同じように薄暗い。その薄暗い空間のさらに光が届かないロッカーの中だ。パツと見て形は分かって、それが何かは暗過ぎて分からない。シャワールームの方から漏れ出す光もあるが、それはロッカー内に濃いい影を落とすだけだ。

なので堅二は自分の制服の下にあるそれを、右手で即座に引っぱり出した。

大した重みも無く、その何かは此方の手に引かれてロッカーの外へと出る。

灯りの元に出されても、その布切れの色は変わらない。

……黒色？

黒だ。影の色と同じ黒色の布切れ。

灯りの元に出したため、黒い布切れの正確な形と、それが何なのかが堅二には一瞬遅れて理解出来た。

全体的に柔らかい素材で出来ており、三角形型の形をしていて、若干だがその用途としては布面積が少々小さめな気もする。

あくまでも自分の知識のみによる情報からの認識なので、間違っているかもしれないが、しかしそれが何なのかだけは確かだ。

そう、それは何処からどう見ても女性用下着だった。

……ほほう。

堅二は硬直してしまった右手から視線を外し、周りを見る。

目が慣れて来たのか、脱衣所の色合いが段々と認識出来るようになって来た。

薄暗い脱衣所の空間は、ピンクを中心とした、温色系の色合いで構成されている。

そう、さながら一般的な女性用トイレなどと似たような色合いで、ちなみに男性用トイレなどは大概青系の色合いだ。

そして気がつく。自分は脱衣所に入る際、どちらの入り口に入る

のか確認していなかったこと。プラス、前に自分がシャワールームを見学した時は、薄い青の色合いだったことを。

……ほ、ほほう？

頬が引き攣り、嫌な汗が噴き出て来た。

全身が本能で強張り、必要以上に力が籠る。

待て、と言いたい。これは何かの間違いだと。

色々と理不尽とか言い訳とか社会に対する抗議とかを叫んで現実逃避をしたい所だが、生憎と右手に握られた黒の布が現実逃避を許さない。

自分の意思通り動かない癖に、その布切れが持つ感触とか微かな暖かさとかだけは伝えて来る右手を、今すぐ嫌な現実ごとぶった切りたかった。

「ほ、ほ、ほほう？」

今日一番の命の危険、人生の危機を感じ取り、堅二の表情から血の気が一切切引く。

そんな状況でも男の本能がなす業か、気がつけば右手にある下着をガン見していた堅二は慌てて視線をずらすと、ロッカーの中に見える明らかに自分の物では無い制服やらカバンやらが見えた。

黒い魔法銃の姿さえも、そこにはある。

「……………」

もはや誤魔化しの声すら出ない。

言うことを聞かずに下着をつまみ続ける右手は無視し、堅二の目はシャワールームへの入り口に向いた。

今なら。百の剣を突きつけられるよりも危険な状態に落とし込ま

れ、冷え切った頭なら疑問に思うことがある。

……なんで、誰も使って無い筈のシャワールームに灯りがついてんのかなぁー、あはは……。

防音だから中の音は聞こえない。

しかし曇りガラスなので、誰かがガラスの前に立てば、姿は光に照らされ影となって『此方は』認識出来る。

向こうから認識は出来ない。此方の空間の方が圧倒的に暗いのだから。

「……………」

嫌な予感と汗は止まらない。

堅二は思った。

……逃げるが勝ち！

右手から下着をロッカーに戻し、自分の上着とネクタイ、下の口ッカーからカバンを取り出して逃走。

それだけでこの危機は回避する事が出来る。目はもうとっくに覚めた。だから俊敏に動ける。

「――」

しかし不意に、一瞬で曇りガラスに影が差して、

……ちよ、

逃げたり言ったり誤魔化したりする間もなく、

一気にガラス戸は開け放たれた。

開け放たれると同時にシャワールームを満たしていた湯気が、脱衣所へと流れ込んで来て、

「ふう……」

少女が、堅二が持つ下着の持ち主が首からタオルを引っさげて立っていた。

シャワールームから出て来て当然のこととして、その姿は完全に何も身に纏っていない。

つまりは、全裸だ。

「……………」

その姿を見て、堅二の思考はフリーズした。黒の目をまん丸に見開き、口だけは笑いを堪えるような横に引き攣った状態だ。

対して。彼女は誰も居ない筈の脱衣所に立っている男にまだ気がついていないのか、目を閉じくすぐったそうに、タオルで水気を取るために髪をわしゃわしゃとこすったりしている。

短めに切り揃えられた茶色の髪は温水で湿っており、普段は無い艶やかさを見せて、その艶やかさは全身にも適応する。

雪を連想するような白よりの肌は、若い少女特有の張りの強さを持つていて、所々シャワーで暖められ朱くなり、薄い湯気が立ち上る。それ等がまたとてつもなく、彼女の年齢に似合わない程扇情的だ。

そしてその顔は湯を浴びてスツキリしたという、邪気の無い子供の笑顔で、うきうきとタオルで身体を拭っている。頬流れてる汗のような水滴は、彼女自身の汗のように見えて、それが益々彼女の無邪気さを引き立てる。

情欲を煽る顔以外の全ての部分と、子供っぽさを満遍なく見せつ

ける顔。

それ等彼女の全身、それこそ無邪気な顔からまだまだ未発達な白い胸、細くて儚そうであり握ったら折れてしまいそうな腕、健康的に白く腕よりも太く流麗に伸びる足、背中から踵までの艶やかなライオン、足の爪先もつとも隠すべき場所など、隅から隅まで、彼女が身体を拭いているということもあり、堅二は彼女の全てを見ていた。

「……………」

ぽかんと、驚きでは無く彼女の姿という一種の芸術品に放心してしまう堅二。

言い訳を考えたり、逃げたりなどという選択を取れない程、その姿を凝視し続けてしまう。

…………ま、まずいぞ高城堅二！？ これじゃあ、立派な性犯罪者じゃないか！？ アウト、アウトだぞこれ！？

脳内で冷静になった部分がそう囁くものの、堅二の目は彼女の姿から離れない。

何秒経っただろうか。

やがて、

「…………よしっ」

全身を吹き終えたらしい彼女はそう満面の笑みで呟いて、タオルを首に掛け直す。

そこまでしてようやく、彼女、多旗真矢は目を開けた。

緑色の瞳が、パチリとまばたきと共に焦点を合わされ、

「…………えっ？」

真正面に立つ此方の姿を、見た。

視線に乱れは無い。ただ満面の笑みだった表情は一種で無表情になり、固まって動かなくなる。

冷気が吹きすさぶような幻聴まで聞こえて来そうな空気が、場に満ちた。

……ど、どうする！？

ここで堅二の脳はようやくどうこの状況に対処するのかを検討し始めた。

まず、もう無かったことにするというのは無理だ。

何せ自分は既に真矢の裸を犯罪者レベルでたっぷりと見ており、彼女は此方の姿をしつかりと認識している。

では誤魔化しはどうか。

彼女から見て堅二は、自分の下着を右手に握り、自分の姿を見つめる変質者にしか見えない筈だ。

……そんなんじゃ誤魔化しも無理じゃねえかああ！？

ならば、と思う。

ここは最後の手段で行くしか無いと。

まだ状況が受け入れられず、全身の動きを停止している真矢の姿を見ないよう、全身全霊で目を強引に閉じる。

そして右手の下着はロッカーに入れ、代わりに自分のブレザーとネクタイを手探りで取り出す。

目を閉じたのに何故か白い裸の幻覚が見えるのはもう諦めて、真矢が居るであろう方向に踵までつけるビシッとした直立をして、

「——ごめんなさい」

腰を九十度に曲げたお辞儀と、短い謝罪の言葉を告げた。

「……………ッ!？」

当然。

そんな言葉で許されることも無く。

堅二の前で真矢の顔に生気が戻り、一気に朱色一色に染まって、

「う、あ、あ、ああああああああああっ!？」

羞恥の絶叫と、傾けた背中側から叩きつけられた莫大な衝撃と、やはり幻覚として見える少女の裸体。

その三つが、堅二が四月七日の内に感じた最後の感覚だった。

第三章・夕刻の剣劇 後半（後書き）

前半と後半で結合させる予定でしたが、どう頑張っても四万字をオーバーしてしまったため、このまま前半と後半で行くことにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7240y/>

銃剣少年と双銃少女

2011年12月25日21時50分発行